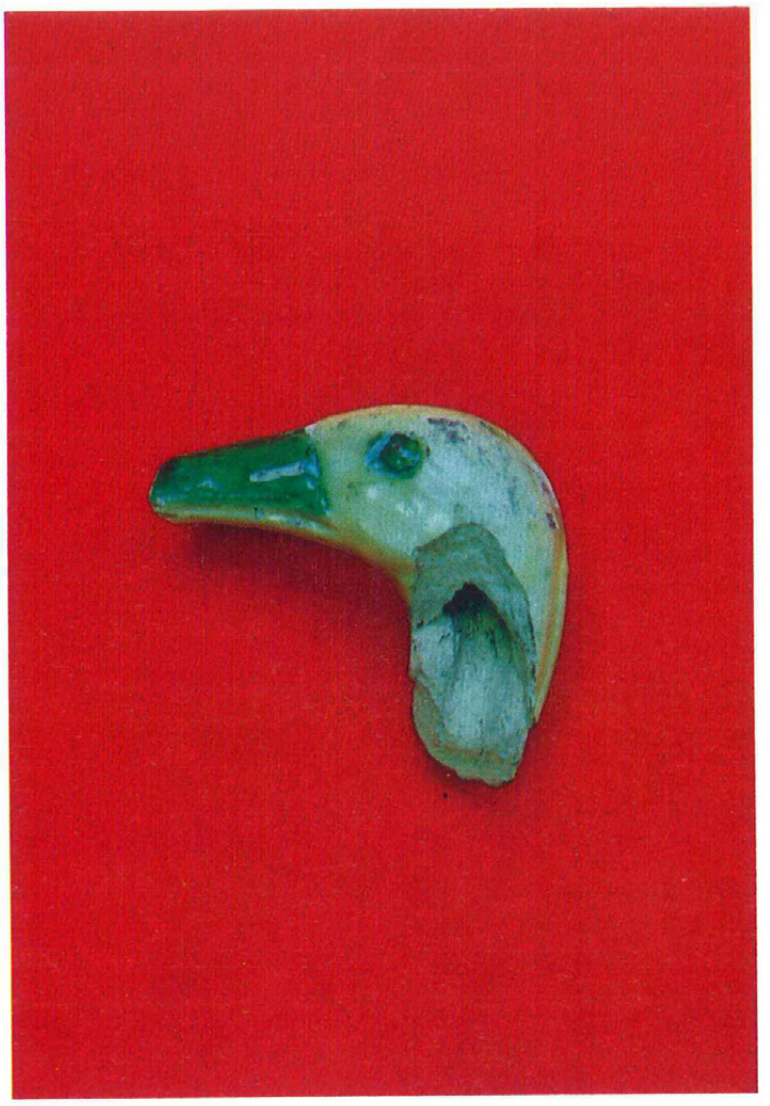
# 都城市文化財調査報告書

第　3　集

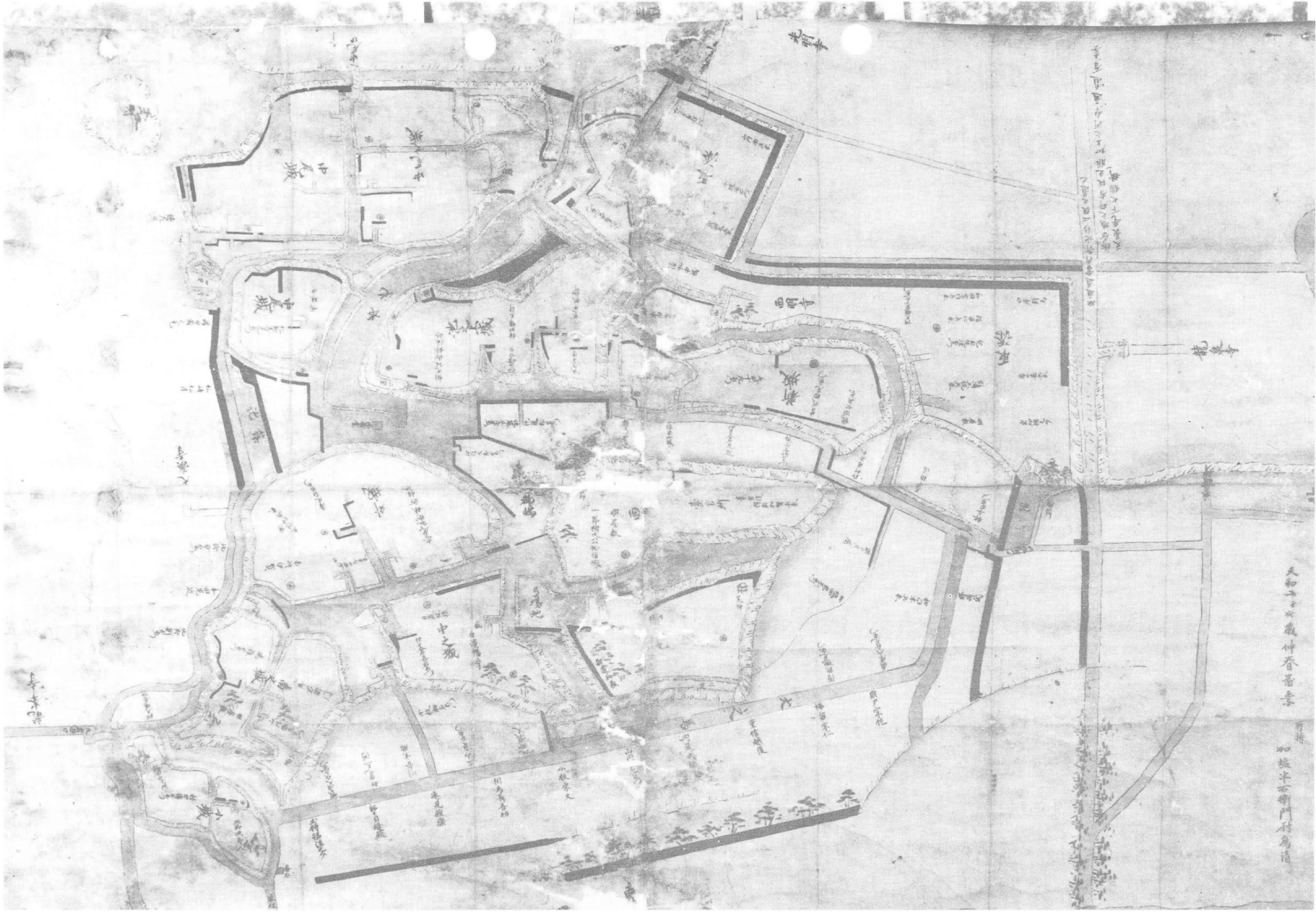
# 都城・中之城跡
# 菓子野地下式横穴

1983年

都城市教育委員会



三彩鳥型水注


光明寺
中之坂
天和二壬戌歳仲春晋書
加藤半右衛門尉為清

都城図

# 序

都城市文化財調査報告書第３集をここに刊行いたします。

今回は、都城跡の一角である「中之城」と「菓子野地下式横穴古墳」について、その発掘調査の結果を報告するものであります。

調査は、宮崎県教育委員会、県文化財保護審議会委員の石川恒太郎氏のご指導と多大のご協力によって行ったものであり、特に調査の計画から報告書の作成にわたり、全面的にご苦労いただいた県文化課の岩永哲夫氏、面高哲郎氏、谷口武範氏に負うところが極めて大きく、深く謝意を表します。

また、発掘調査に際しましては、地主の　　をはじめ、地元市民各位より積極的なご協力をいただき、心からお礼を申し上げます。

この報告書が、当地方の歴史解明のため、学術資料として研究に活用していただくことを期待しまして序文とします。

昭和58年３月１日

都城市教育長　刀　坂　守　信

# 例　　言

1. 本書は、都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 掲載しているのは、古墳時代関係３、中世関係１の計４件についてである。
3. 調査関係者は、次のとおりである。

調査主体

都城市教育委員会

| | |
|---|---|
| 教育長 | 刀坂守信 |
| 図書館長 | 柏田　実 |
| 館長補佐 | 松下義弘 |
| 文化財担当 | 遠矢昭夫 |

調査員

| | |
|---|---|
| 宮崎県文化財保護審議会委員 | 石川恒太郎 |
| 宮崎県教育庁文化課主任主事 | 岩永哲夫 |
| 〃 | 面高哲郎 |
| 〃　主事 | 谷口武範 |
| | 有田辰美 |

調査協力

| | |
|---|---|
| 宮崎県文化財保護指導委員 | 児玉三郎 |

4. 人骨の調査は、長崎大学医学部松下孝幸講師に依頼した。
5. 遺跡名、調査期日等は下記のとおりで、本書の編集は都城市教育委員会が担当した。

記

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 調査期日 | 執筆者 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 都城・中之城 | 都島町 | 57. 5.17～ 7.10 | 岩永哲夫<br>谷口武範<br>面高哲郎 |
| 2 | 菓子野地下式横穴群 | 菓子野町 | 57.11.29～12. 3 | 石川恒太郎 |
| 3 | 菓子野地下式横穴群 | 菓子野町 | 57.11.29～12. 3 | 面高哲郎 |
| 4 | 菓子野地下式横穴群<br>（人骨編） | 菓子野町 | ① 55.12.15～16<br>② 57.11.29～12. 3 | 松下孝幸 |

# 総　目　次

Ⅰ　都城・中之城跡発掘調査 …… 1

Ⅱ　菓子野地下式横穴調査報告 …… 67

Ⅲ　菓子野地下式横穴第57－4号・5号発掘調査 …… 77

Ⅳ　菓子野地下式横穴出土の古墳時代人骨 …… 103

# 都城（みやこのじょう）・中之城（なかのしろ）跡

# 例　　言

1. 本書は都城市教育委員会が実施した都城中之城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和57年５月17日から昭和57年７月10日まで実施した。
3. 調査関係者は次の通りである。

調査主体　都城市教育委員会

| | |
|---|---|
| 教育長 | 刀坂守信 |
| 図書館長 | 柏田　実 |
| 図書館長補佐 | 松下義弘 |
| 文化財担当 | 遠矢昭夫 |

調査員　岩永哲夫・谷口武範（県教育庁文化課）・有田辰美

調査協力　児玉三郎・近藤組

遺物整理協力　酒井晴子・増田慈子・高橋加奈子・津隈久美子・日野美智子
有田具子・今橋牧子・桑畑　礼・横尾理恵

4. 本報告書の執筆編集等作成に関わるすべては、岩永・谷口・有田が行った。
本書の執筆は調査員が分担し、文責については目次に明記した。
5. 遺物については亀井明徳氏（九州歴史資料館）の指導を得た。
6. 本書で用いた挿図中の遺物は、すべて通し番号である。

# 本　文　目　次


第Ⅰ章　序　説 …… 1

1.　調査に至る経過 ……（面高）　1

2.　遺跡の位置と環境 ……（岩永）　1

3.　調査の概要 ……（谷口）　10

4.　層　序 ……（　〃　）　10

第Ⅱ章　遺　構 ……（谷口・有田）　13

1.　Ⅰ　区 …… 13

2.　Ⅱ　区 …… 26

第Ⅲ章　遺　物 ……（谷口）　32

第Ⅳ章　結　語 ……（岩永）　45

付　「都城」築城とその位置 ……（有田）　46


# 挿　図　目　次


第１図　遺跡所在地図 …… 8

第２図　都城中之城地形図 …… 11

第３図　土層断面図 …… 12

第４図　都城中之城遺構実測図（Ⅰ区） …… 15～16

第５図　柱穴実測図 …… 17

第６図　１号土壙実測図 …… 18

第７図　通路実測図 …… 21～22

第８図　石垣列実測図(1) …… 23

第９図　石垣列実測図(2) …… 24

第10図　７号土坑実測図 …… 25

第11図　都城中之城遺構実測図（Ⅱ区） …… 27

第12図　９号土壙実測図 …… 28

第13図　10号土壙及び井戸状遺構実測図 …… 29
第14図　竪穴状遺構実測図 …… 30
第15図　土師器実測図(1) …… 33
第16図　土師器実測図(2) …… 34
第17図　青磁実測図 …… 35
第18図　白磁・青白磁実測図 …… 37
第19図　染付実測図 …… 39
第20図　陶器実測図 …… 40
第21図　三彩鳥形水注 …… 42

# 図　版　目　次

図版１　(上)絵図（拡大図）　(下)都城遠景 …… 51
図版２　(上)Ｉ区　(下)柱穴出土状況 …… 52
図版３　(上)１号土壙検出状況　(下)７号土坑検出状況 …… 53
図版４　(上)通路検出状況（北より）　(下)正門跡（北より） …… 54
図版５　(上)正門跡（西より）　(下)通用門跡（西より） …… 55
図版６　(上)石垣列　(下)石排除後 …… 56
図版７　(上)石垣拡大図　(下)石垣列 …… 57
図版８　(上)９号土壙出土状況　(下)竪穴状遺構出土状況 …… 58
図版９　(上)井戸状遺構及び10号土壙　(中)10号土壙出土状況
(下)井戸状遺構遺物出土状況（左：青磁碗、右：竹組） …… 59
図版10　(上)土師器　(下)土師器 …… 60
図版11　(上)９号土壙出土遺物（上：白磁皿、下：青磁盤）
(下)井戸状遺構出土（青磁碗） …… 61
図版12　(上)青磁　(下)白磁、青白磁 …… 62
図版13　(上)染付　(下)染付 …… 63
図版14　(上)陶器（備前焼）　(下)陶器（備前焼） …… 64
図版15　(上)陶器（常滑焼）　(下)陶器 …… 65

# 第Ⅰ章　序　説

## 1. 調査に至る経過

昭和56年５月、軽費老人ホーム建設のため造成を行なっていたところ、柱穴や青磁、染付等の輸入陶磁器、土師器等の出土が確認された。都城市教育委員会では、造成地が中世山城である『都城』の一郭「中之城」にあたることなどから直ちに事業者に工事中止を要請し、遺跡の取り扱いについて協議を行なった。協議の結果、現状で保存することが困難であったためやむなく発掘調査を実施して記録保存をとることになった。調査は、事業者の依頼により都城市教育委員会が主体となり、県文化課主任主事（現宮崎県総合博物館主任主事）岩永哲夫、同主事（現宮崎県総合博物館主事）谷口武範の両名が調査を担当した。

調査は、当初、昭和57年５月17日から６月２日までを予定したが、通路等の発見により、最終的に７月10日に終了した。

## 2. 遺跡の位置と環境

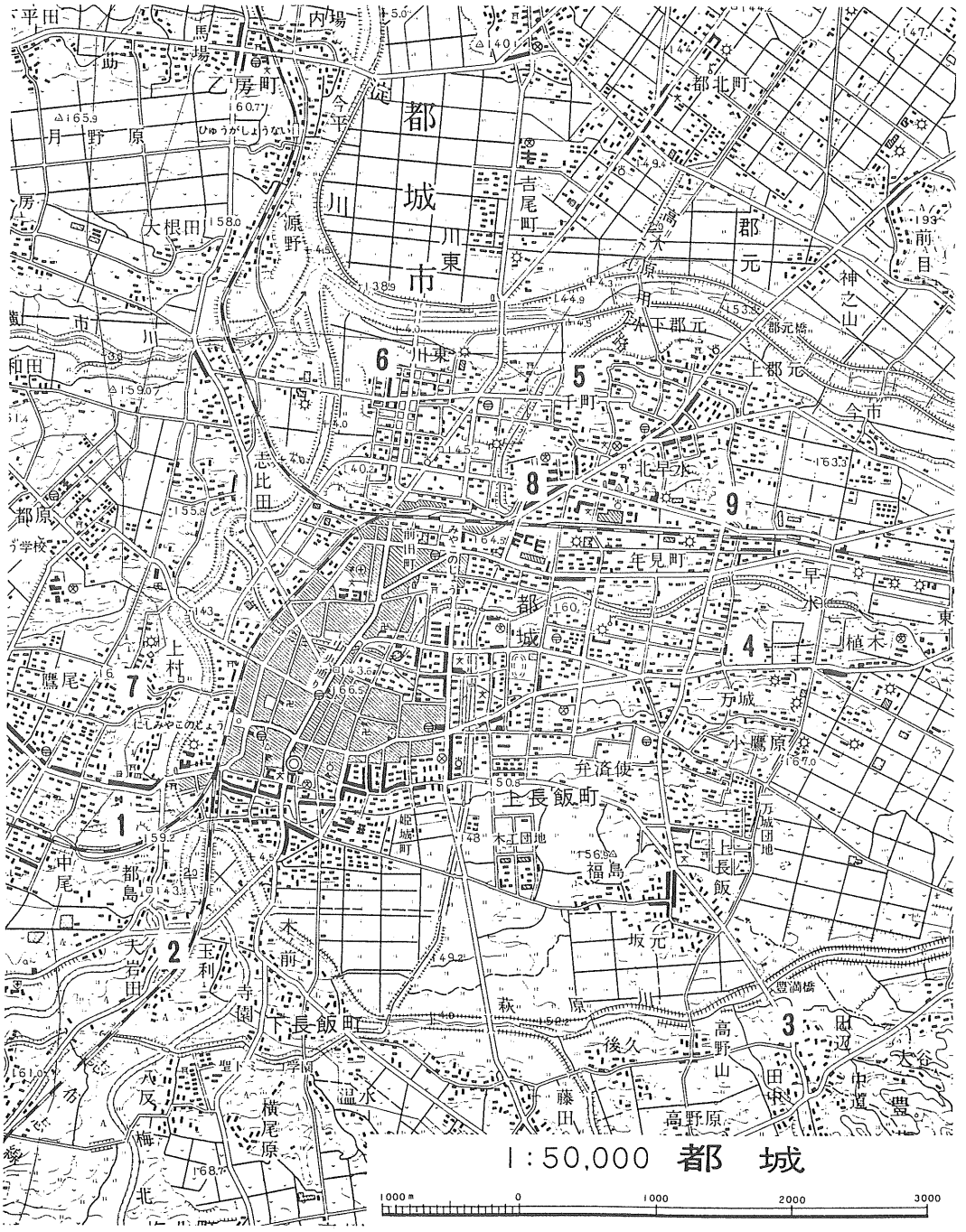
都城跡は大淀川の支流都城川が同じ支流の萩原川と合流する地点の左岸（西岸）台地上にあり、通称鷹尾原台地の東端にあたる。日豊本線西都城駅の南西約１㎞の地点である。

同地周辺の遺跡を概観すると、縄文早期の丸山遺跡(注1)が西北部の丘陵上にある。昭和４９年母智丘ゴルフ場造成工事中に発見されたもので、押型文土器、塞ノ神式土器の出土を見た。

また、東南にあたる豊満町成山遺跡(注2)からは縄文後期の土器が出土するなど、盆地を囲む周辺の山麓から丘陵にかけて、縄文期遺跡の存在が知られている。

弥生時代では、昭和３９年に調査され、集落跡等が発見された年見川遺跡(注3)があるが、最近では、祝吉・郡元土地区画整理事業に伴ない、昭和５５・５６年に都城市教育委員会が発掘調査を実施した祝吉遺跡(注4)があげられる。祝吉遺跡は都城盆地の中央を流れる大淀川の支流沖水川の左岸の低位河岸段丘上に位置しており、弥生後期を中心とする住居跡群が検出され、遺構・遺物とも注目される内容をもつものであった。なお、この遺跡からは１５世紀末に南中国で製作されたと考えられる「緑釉陰刻牡丹文水注」が良好な状態で出土し、島津氏との関連を窺わしめるものとして注目される。

古墳時代では、県指定史跡都城古墳が沖水，鷹尾，志和池地区などにみられ、地下式横穴墓も牧ノ原をはじめ、志和池，菓子野地区などで調査されている。




第１図　遺跡所在地図

1.　都城跡　　2.　大岩田城跡　　3.　成山遺跡　　4.　年見川遺跡　　5.　祝吉遺跡

6.　牧ノ原地下式横穴墓群　　7.　都城古墳　　8.　沖水第１号墳　　9.　沖水第２号墳

中世になると、「島津家発祥の地」として知られる県指定史跡祝吉御所跡がある。

さて、都城は永和元年（１３７５）、第２代都城領主北郷義久が築いたとされ、時代を経て元和元年（１６１５）一国一城令で廃城になるまで２４０年間にわたって営まれた中世平山城である。

都城市立図書館蔵の都城の絵地図(注5)によると、本丸，中之城，西城，外城，南之城，小城，新城，池之上城，中尾城，取添城によって構成され、城への道に弓場田口，鷹尾口，中尾口，大岩田口，来住口の五口がみられる。現在、本丸と中之城との間に日豊本線が通過しているが、西之城と池之上城に狭まれた区域（線路の周辺）に都城の地名由来になった都嶋が位置する。

注 1.　未報告

注 2.　田中熊雄「都城市成山遺跡の研究」宮崎大学教育学部日本史研究室　昭49

注 3.　調査の概要について、石川恒太郎著「宮崎県の考古学」昭和43年に記述されている。

注 4.　都城市教育委員会「祝吉遺跡」都城市文化財調査報告書　第１集　1981
都城市教育委員会「祝吉遺跡」都城市文化財調査報告書　第２集　1982

注 5.　都城図書館蔵の絵地図の裏には「大正八年十二月十二日領祖都城御入部記念之日　益田玉城寄贈」とある。
このもとになった絵地図は都城市在住の　　が所蔵されており、それによると、天和二年（1682）加塩半右衛門尉為清が図写したとある。

## 3. 調査の概要

発掘調査にあたり地形にあわせ５ｍ方眼のグリッドを設定した。調査区の南北をＡ～Ｑ，東西を１～９とした。しかし、工事途中での発見であったので撹乱の激しさが目についた。その中で比較的残りのよいＣ～Ｈ－２～９区とＭ～Ｏ－２～５区をそれぞれⅠ区、Ⅱ区として調査を行った。

調査の結果、ボラ層あるいはアカホヤ層に掘り込まれた柱穴、土壙、通路などの中世遺構のみ検出された。しかし、絵図に記されている厩、井戸等についてはすでに土取りなどで削平されており確認はできなかった。また、検出された遺構は中・近世のもので、それ以前の遺構についてはまったくみられない。出土遺物は、磁器（青磁・白磁・青白磁）、染付、土師器、陶器、古銭など山城に伴うものばかりで、いずれも表土中あるいは遺構内の埋土中からの出土であった。

## 4. 層　序

調査区の北側端部（Ｏ－４～６区がすでに土取りで掘り下げられていたのでそこで土層観察を行った（第３図）。なお中之城遺跡における基本的土層は次のとおりである。

第Ⅰ層　　表土（耕作土）　褐色をなし軟質である。

第Ⅱ層　　黒色土層　厚さ約３０cm

第Ⅲ層　　ボラ層　　降下軽石層で遺構のすべてが掘り込まれている。厚さ約70cm

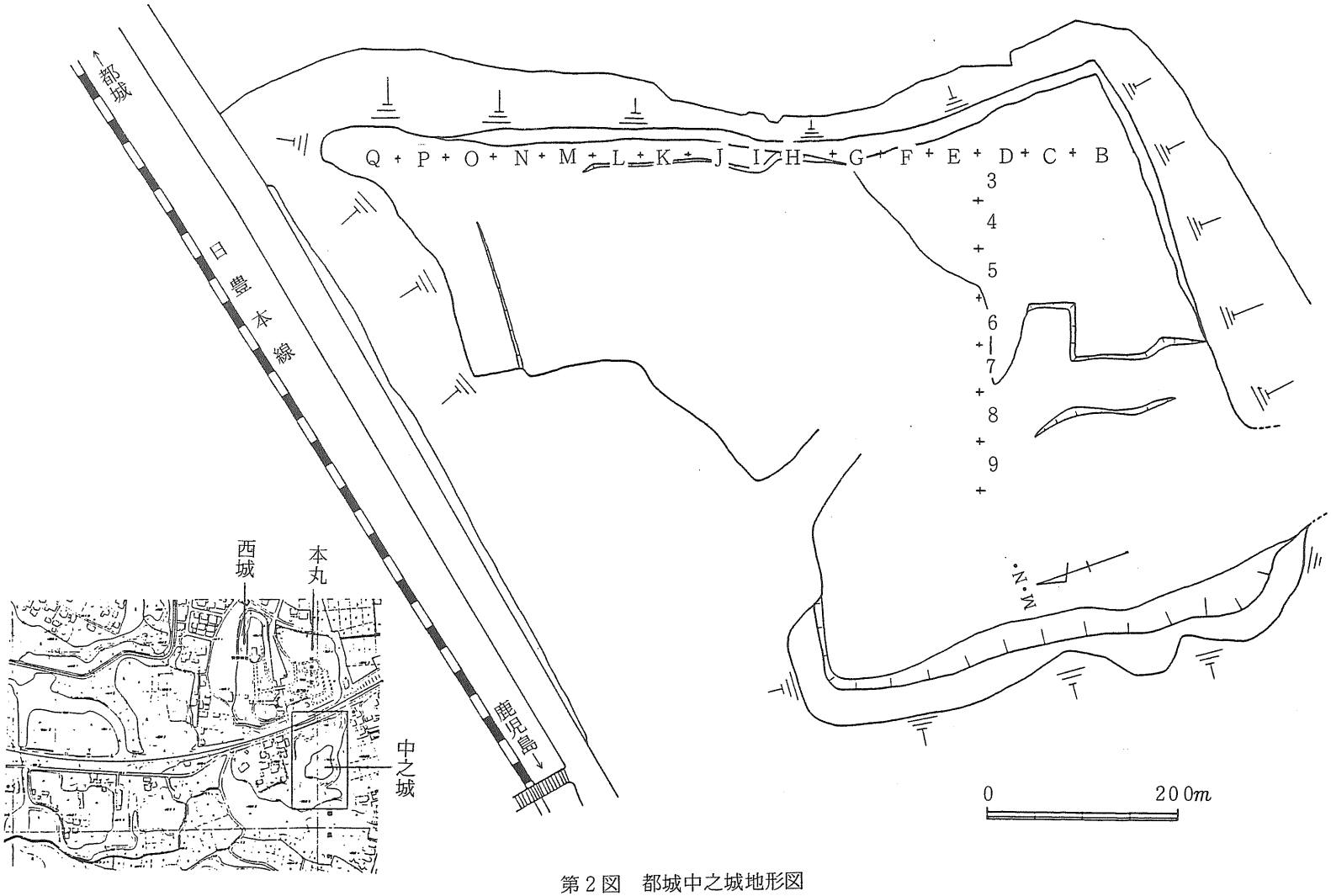
第Ⅳ層　　黒色土層　厚さ約３０cm

第Ⅴ層　　黄褐色土（アカホヤ）層　厚さ約３０cm

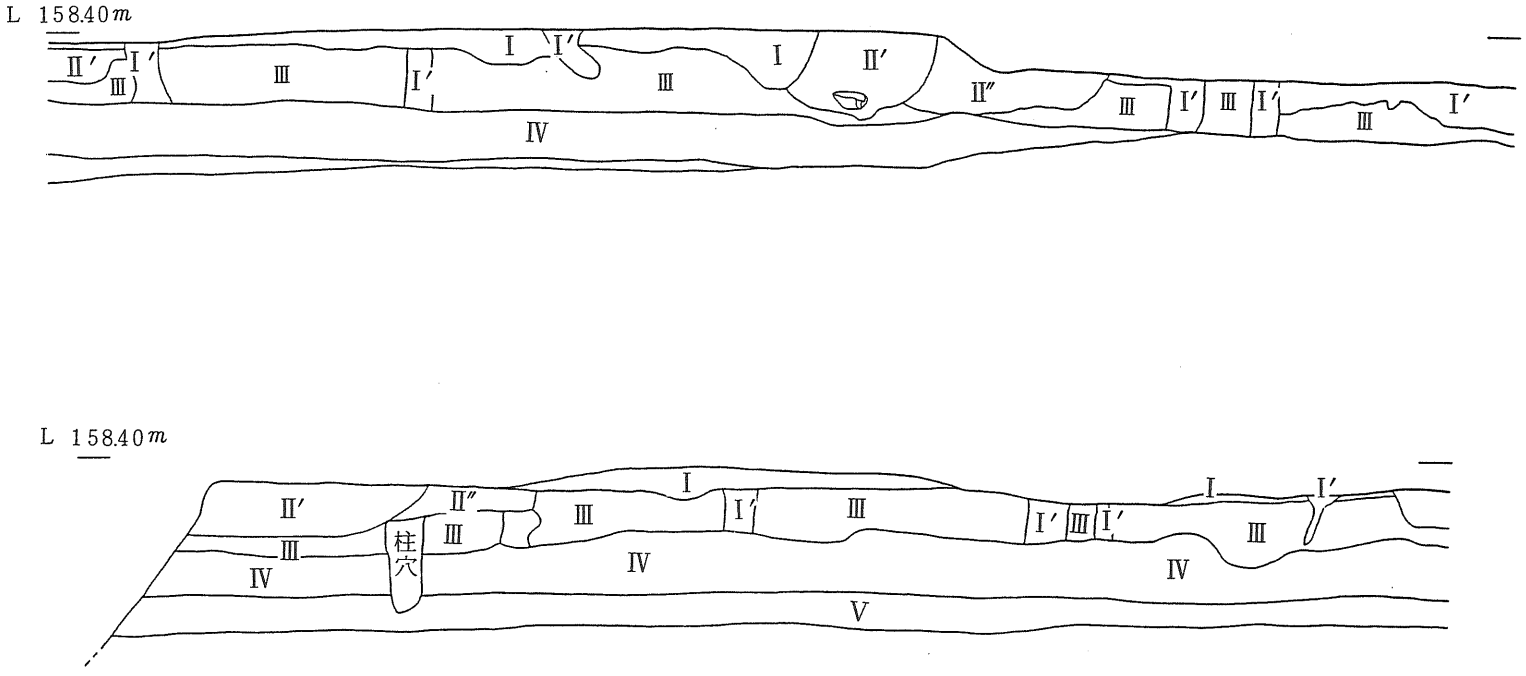
第Ⅵ層　　黒褐色土層　厚さ７０cm

以下、灰褐色土，橙色粘土層，砂礫層の順である。砂礫層は表土より約3.5ｍのところで確認された。

遺物は、第Ⅲ層上部より土師器，陶磁器が出土しているが、第Ⅳ層以下ではまったく検出されなかった。




第２図　都城中之城地形図




Ⅰ：表土
Ⅰ′：褐色土（木根による撹乱）
Ⅱ′：黒色土（やや粘質をおびる）
Ⅱ″：黒色土（ボラが少量混入）
Ⅲ：ボラ層
Ⅳ：黒色土
Ⅴ：アカホヤ層

第３図　中之城土層断面図

# 第Ⅱ章　遺　構

調査区は全体にわたってバック・フォー等により削平されていた。その中で比較的残りのよいC～H（2～9）区とM～O（2～5）区をそれぞれⅠ区、Ⅱ区として調査を行った。

遺構の確認面は、すべてボラ層あるいはアカホヤ層からのものである。検出された主な遺構には、柱穴、土壙、通路跡などがあった。

## Ⅰ　区　（第4図・図版2）

Ⅰ区の東側（E～G－2～6）区は、ボラ層が残っていたが、その西側については、すでに土取りされ、アカホヤ層からしか確認できなかった。

### 1.　柱　穴　（図版2）

検出された柱穴の総数は381個を数えた。柱穴はすべてボラ層に掘り込まれており、径（15～80cm）、深さ（30～70cm）と比較的変化に富んでいる。埋土の状態も黒色土、砂質の褐色土、粘質をおびた褐色土の3種類確認できた。柱穴からの出土遺物には、土師器、陶磁器などの小片のほかに、釘、石臼片などがみられ、それらのほとんどは流れ込みのものであった（表1）。また川原石や軽石が混入していた柱穴は21個で、楚石として使用されていたと思われる。その中で主なものについてのみ説明を行なう。P－67は長径60cm、短径48cm、深さ77cmの柱穴である。浅い2段掘りで西側に比較的大きめの石を、そして東側には小振りの石が置かれていた。石材は、1個の角礫をのぞいてはすべて軽石であった。P－346は2段掘りで深い方の上部に石が集中してみられる。石はすべて川原石で、土師器片も出土している。

（第5図）。

建物跡については、絵図（図版1）に、日置氏、伊ケ倉氏など地区割が記載されておりなんらかの手がかりになると思われていた。しかし戦時中の高射砲陣地の設営あるいは耕作等による撹乱がひどく建物跡は確認できなかった。

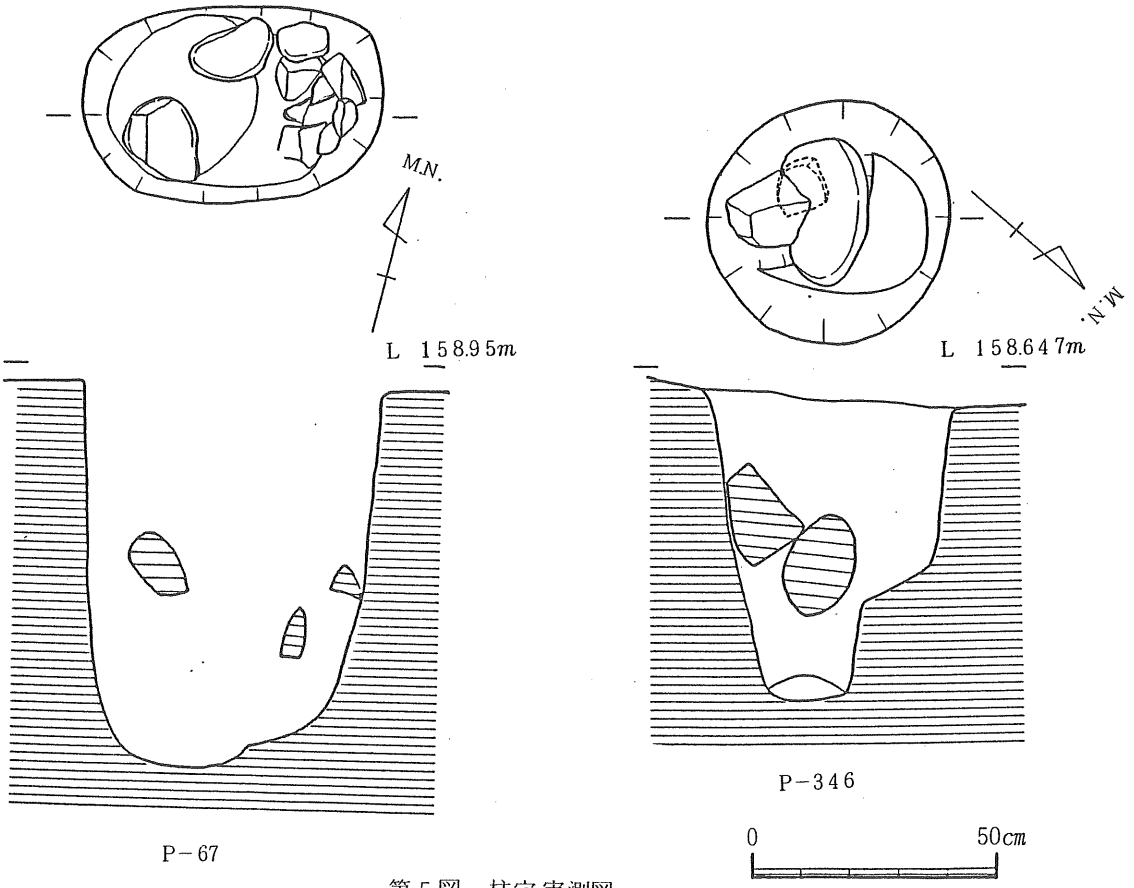
### 2.　土　壙

Ⅰ区西側の土取りされた部分に7基検出された。土壙のほとんどはアカホヤ層面からの確認であった。埋土については、粘質のある黒色土、ボラ混じりの暗褐色土の2種類があった。その中で1号土壙については本文中で説明しその他は表2にまとめた。

第4図　中之城遺構実測図（Ⅰ区）

| 柱穴 | 長径(cm) | 短径(cm) | 深さ(cm) | 出土遺物 | 柱穴 | 長径(cm) | 短径(cm) | 深さ(cm) | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 31 | 40 | 40 | 51.8 | 土師器 | 185 | 25 | 25 | 25.3 | 古　銭 |
| 38 | 35 | 35 | 45.8 | 青　磁 | 204 | 30 | 25 | 33.5 | 陶　器 |
| 39 | 30 | 30 | 51.3 | 土師器 | 209 | 25 | 25 | 27.4 | 陶　器 |
| 43 | 81 | 30 | 23.3 | 土師器，石臼 | 232 | 40 | 38 | 58 | 土師器，染付 |
| 46 | 63 | 45 | 50.9 | 土師器 | 234 | 30 | 30 | 26.8 | 土師器，釘 |
| 73 | 23 | 22 | 65.6 | 土師器 | 240 | 32 | 31 | 43.4 | 土師器 |
| 101 | 40 | 40 | 42.3 | 瓦　器 | 249 | 40 | 31 | 46 | 陶　器 |
| 109 | 95 | 65 | 61.4 | 土師器 | 271 | 30 | 30 | 30.8 | 陶器，釘 |
| 118 | 33 | 31 | 55.5 | 土師器 | 301 | 22 | 20 | 52 | 釘 |
| 125 | 68 | 68 | 45.8 | 土師器 | 335 | 57 | 23 | 31.1 | 土師器 |
| 128 | 75 | 50 | 32.2 | 土師器，青磁 | 341 | 40 | 37 | 59 | 土師器 |
| 131 | 46 | 30 | 37 | 染　付 | 346 | 45 | 40 | 47.2 | 土師器 |

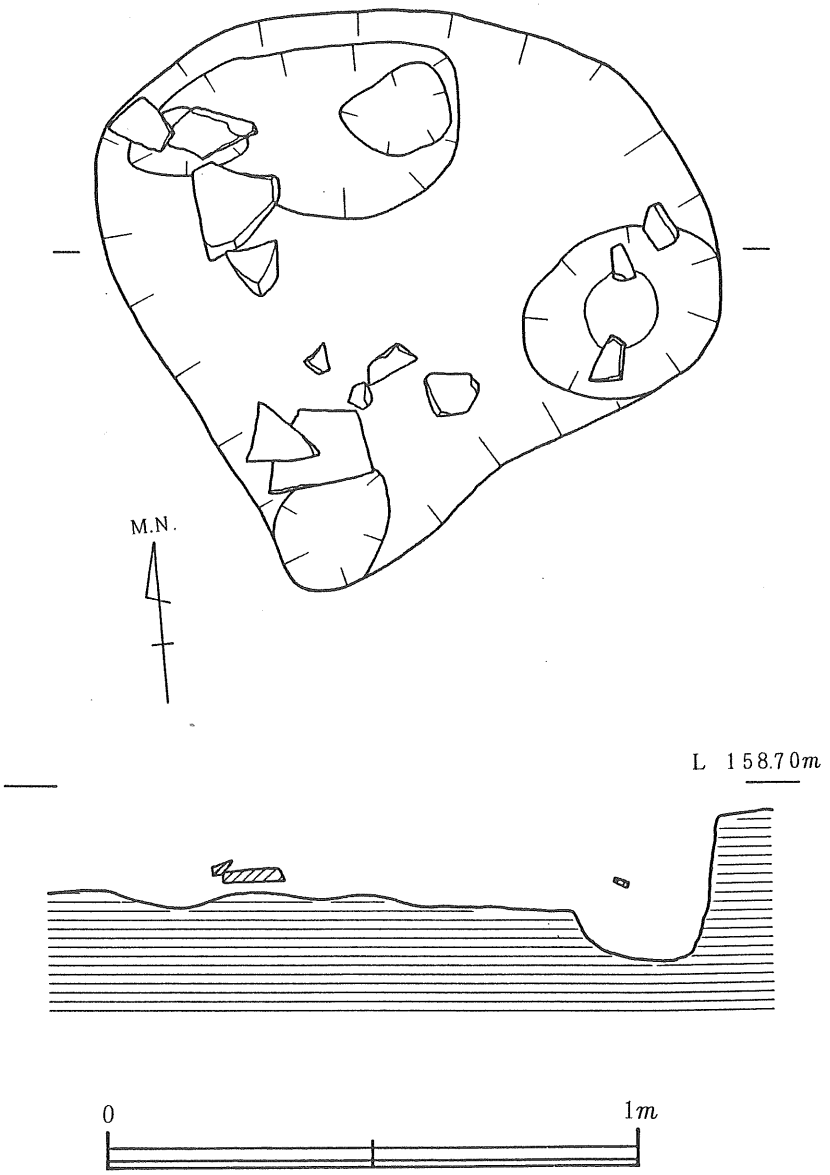
表 1




第 5 図　柱穴実測図

| 土　壙 | 長軸(cm) | 短軸(cm) | 深さ(cm) | 遺　物 | 埋　　土 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 120 | 100 | 15 | 備前焼 | 灰褐色土 |
| 2 | 88 | 56 | 70.6 | な　し | 黒褐色土 |
| 3 | 104 | 58 | 87.2 | な　し | 黒褐色土 |
| 4 | 117 | 92 | 113.8 | 染　付 | ボラ混入の暗褐色土 |
| 5 | 106 | 75 | 45 | な　し | ボラ混入の暗褐色土 |
| 6 | 134 | 63 | 35.7 | な　し | 黒褐色土 |

表 2




第 6 図　1 号土壙実測図

1号土壙は、備前焼の大甕片や擂鉢（73・77・81）など多く出土しているが、上部が削平され深さも約15cmと浅い（第6図，図版3）。2号，3号，4号土壙は、ほとんど出土遺物がないが深さが35～100cmと、1号土壙とはちがう意味のものであろうと考えられる。

3. 石垣列（第8図）

E－4区にあり長さ約3.2m、高さ約20cmを計る。石材はほとんど軽石で西側が面取りされている。石垣の積み土は、たたき締められた痕跡はみられず、粘質をもつといった漆喰としての役割は果していない。

4. 通　路（注1.）（第7図　図版4）

調査区（Ⅰ区）の北西側から検出した。幅約3.9m、長さ約16mで確認面より約0.8m掘り下げられている。床面は第Ⅵ層まで達し固くしまる。北から約6mのところに正門跡、そこから約5mの位置に通用門と思われる遺構を確認した。通路は、北より登り始め約4.5mの場所で段がつけられている。そして約15mのところから右に曲っているがそれより先は不明である。また通路東側には石垣列が検出された。遺物としては三彩鳥形水注の頭部のほかに土師器、陶器（79）が出土している。

(1) 正門跡（図版4・5）

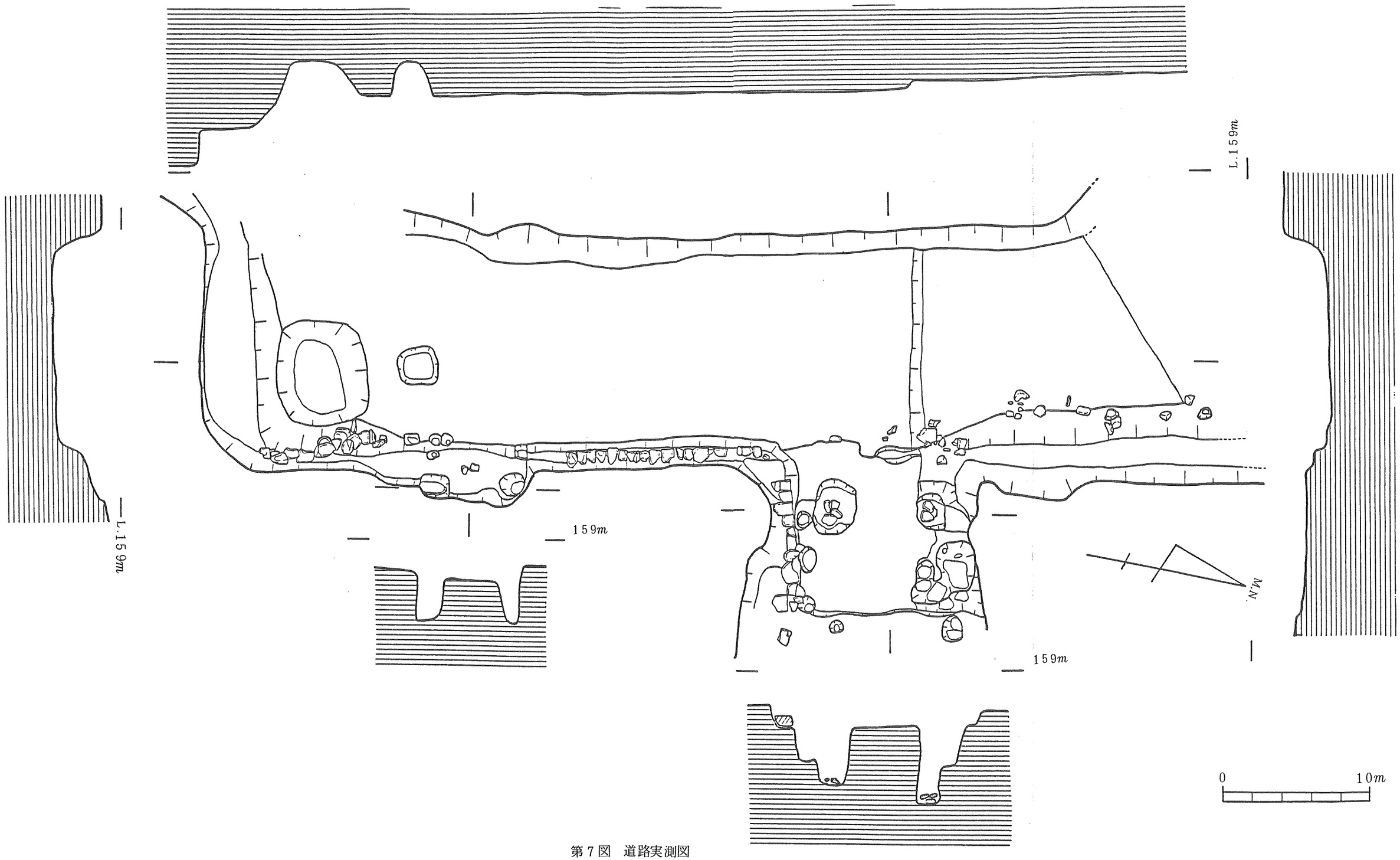
正門と思われる場所には、通路より階段状に登り口がつけられ平坦部には2つの柱穴がある。東側は径0.73m、深さ0.96m、北側は径0.5m、深さ1.3mで両方とも楚石として使用されたと思われる川原石が検出されている。正門の幅は約3m、柱穴間は約1.7mであった。

(2) 通用門跡（図版5）

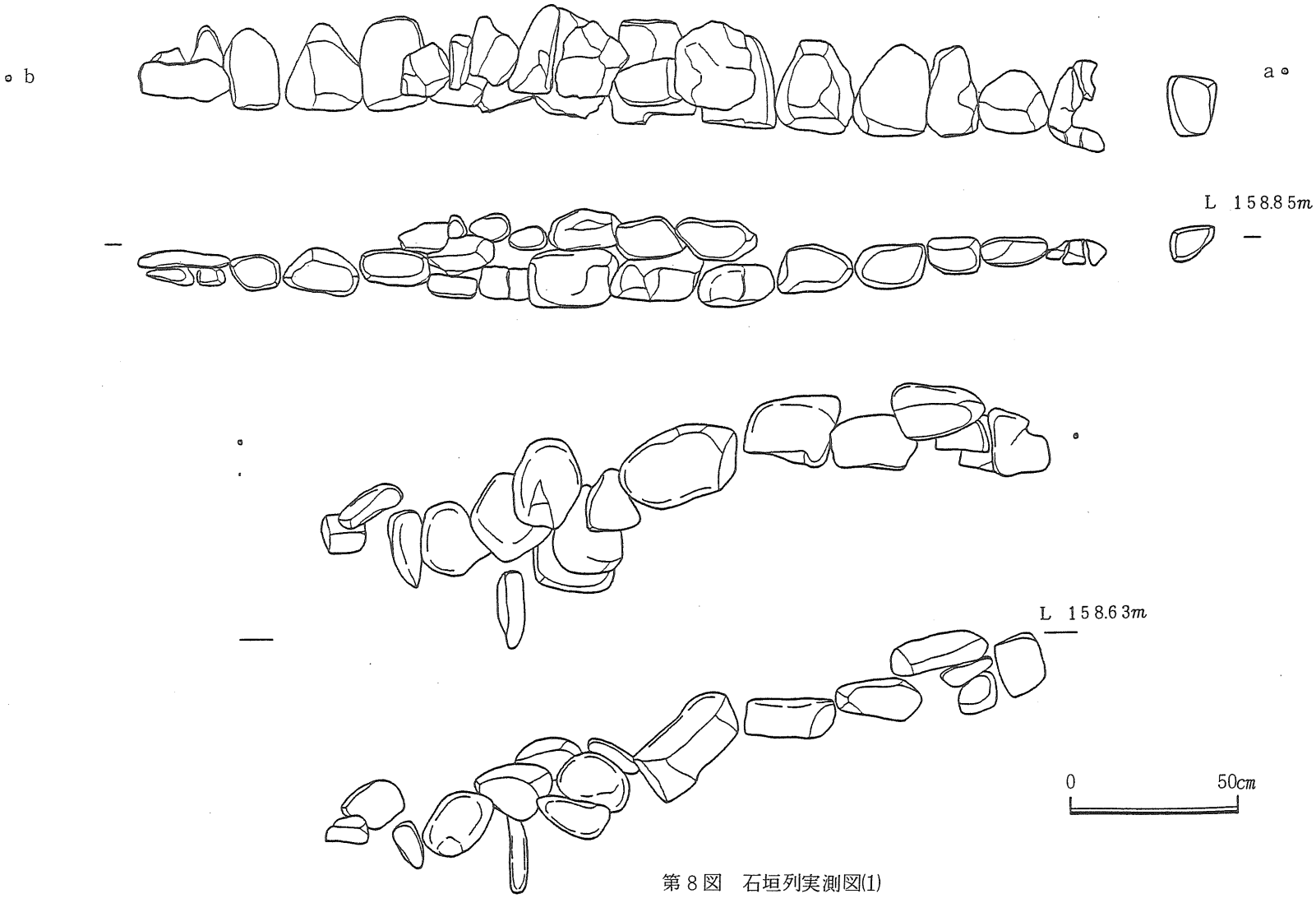
正門より南に約5mの位置に、やはり階段状の登り口が確認された。正門とは別の出入口ということで通用門とした。床面は固くしまりその両側に7個の柱穴が検出されたが、通用門に伴うと考えられたのは4個であった。通路側の2つは、径約20cm、深さ30cmで小さくその東側の2つは径約45cm、深さ60cmで前者に比べ大きめである。柱穴間は約1.5mを計る。

(3) 石垣列（図版6・7）

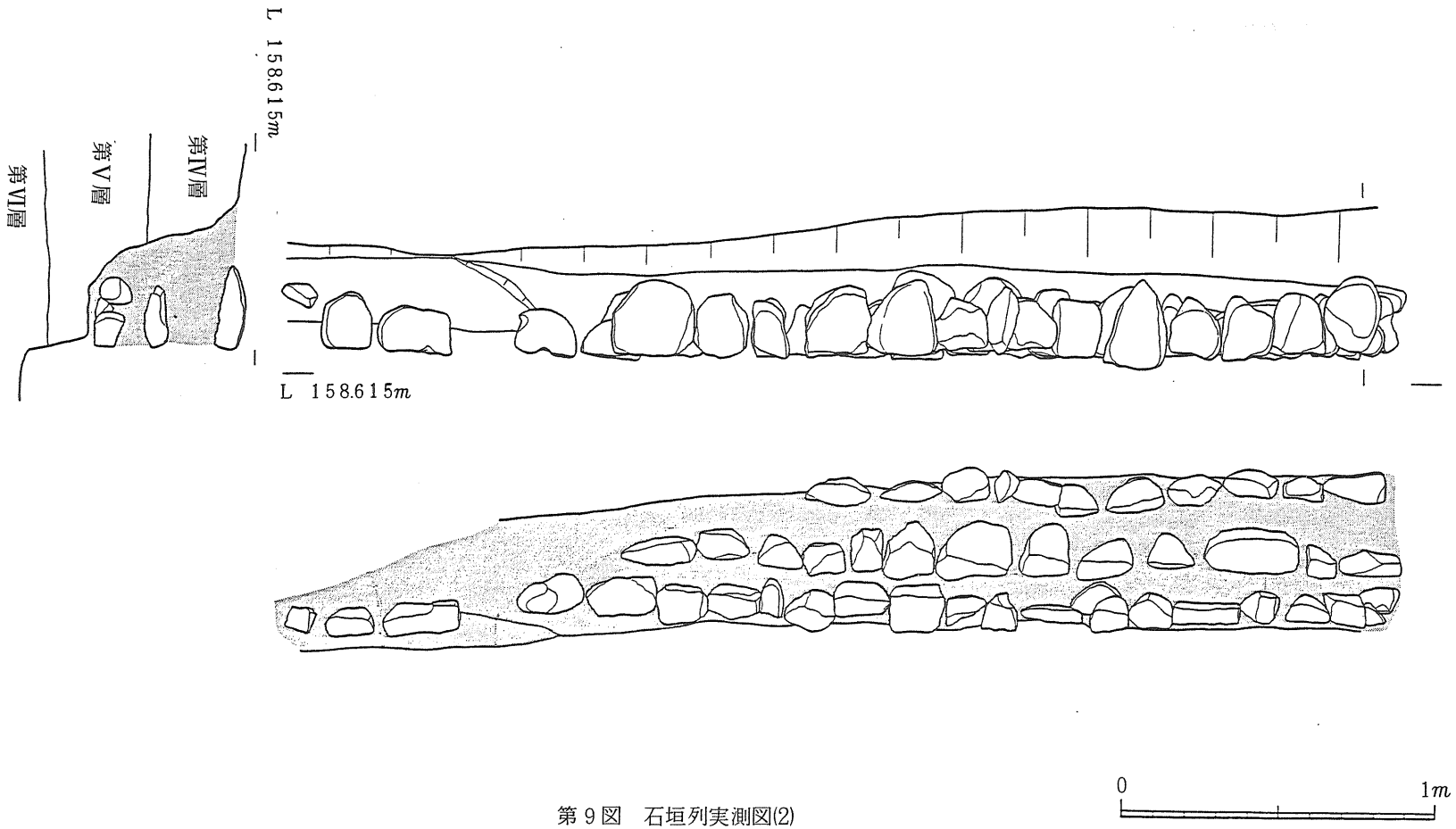
通路東側に3ケ所検出され、すべて通路側は面取りされている。正門南側の石垣は、一段だけ残存し、アカホヤ面につけられた段に積まれていた。正門北側にも段がつけられていたが石列については確認できなかった。正門跡と通用門跡の間の石列が一番残りがよく長さ約3.3m、高さ0.7mを計る。石は、アカホヤ面に段がつけられそこに積まれている。石材はほとんど軽石であった。(第9図)。通用門とつきあたりの間にも石列が崩れた状態で検出されている（第8図下）。また、通路入口付近の東側にも軽石の残片がいくつかみつかっており石列があ




第７図　道路実測図



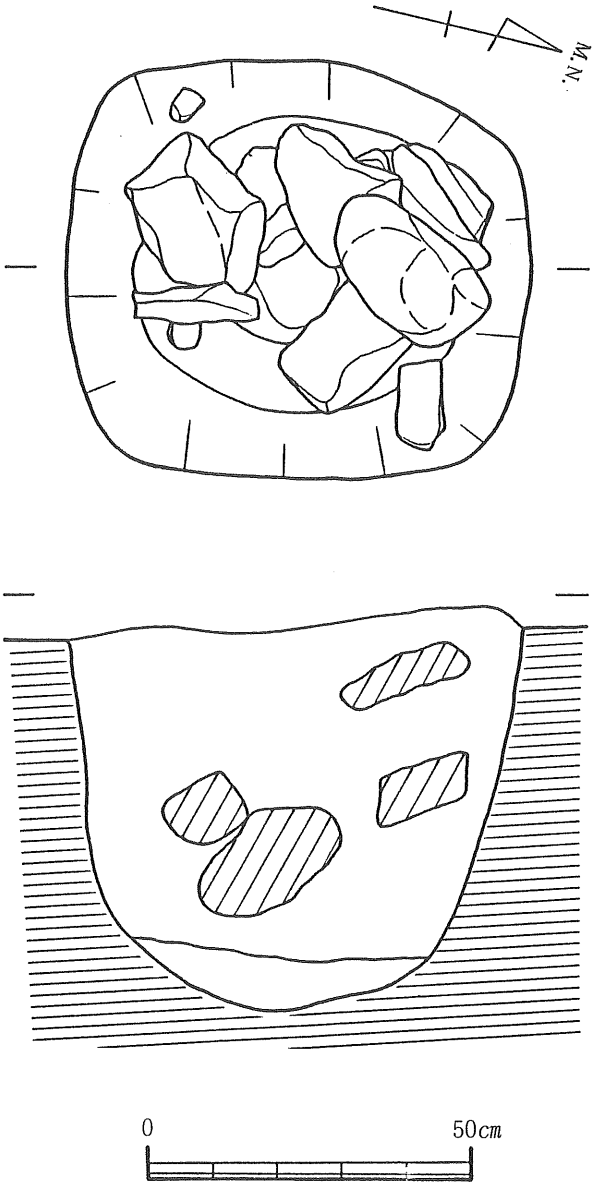

第８図　石垣列実測図(1)




第９図　石垣列実測図(2)

ったのではないかと思われる。それとともに柱穴がいくつか確認されているが通路に伴うものかどうかは不明である。石列は東側のみ存在し、西側については壁もほぼ垂直に立ち上がっており石列はなかったのではなかろうか。石積み土については、粘質性もそれほど感じられなかった。また、裏込めも確認できなかった。そのため通路の石垣として実際に使用されていたかには疑問がもたれる。

7号土坑は通用口付近の通路床面に掘り込まれている。1辺63cm、深さ60cmを計る。埋土中には、軽石を中心に多くの石が含まれていた。この土坑が、通路に伴うものなのかどうかは不明であるが後世の遺構の可能性が大きい。Ⅱ区で検出された竪穴状遺構と類を同じにするものであろうか。




第10図　7号土坑実測図

## Ⅱ　区　（第11図）

北側と東側の端部は、ボラ層上面まで残存しており、柱穴、土壙、井戸状遺構など比較的残りはよかった。それに対し中央部は、アカホヤ面まで削平され土壙あるいは竪穴状遺構などが残存するだけであった。

### 1. 柱　穴

北側、東側のみ検出され総数86個を数えた。埋土の状態はほとんどⅠ区と変わらず３種類の柱穴が存在する。しかし、柱穴からの出土遺物はあまり見られなかった。P−394から土師器片、P−399から青磁（24）と土師器片を、P−429から染付（84）がそれぞれ出土している。建物跡については、絵図（口絵２）では白濱氏の館があるとされているが確認はできなかった。

### 2. 土　壙

土壙は全部で４基検出された。８号土壙は、長軸86cm、短軸74cm、深さ24cmを計る。埋土は黒色土で遺物は見られなかった。９号土壙は、長軸107cm、短軸62cm、深さ44cmで第Ⅵ層まで達している。床面より５cm位上の位置から川原石４個、軽石２個とともに木炭が敷きつめられた状態で検出された。そのほかに青磁（41）、白磁（52）も出土したが骨などは確認できなかった（第12図・図版８）。10号土壙は長軸90cm、短軸42cm、深さ20cmで井戸状遺構を切っている。埋土中より川原石や面取りされニカワ系統のものが付着した軽石も出土している。

この軽石は、通路に使われていたと思われ、後世になりこの土壙に廃棄したとも推定される。

11号土壙は長径82cm、短径44cm、深さ25cmを計る。出土遺物としては、備前焼の擂鉢（75）が出土している。

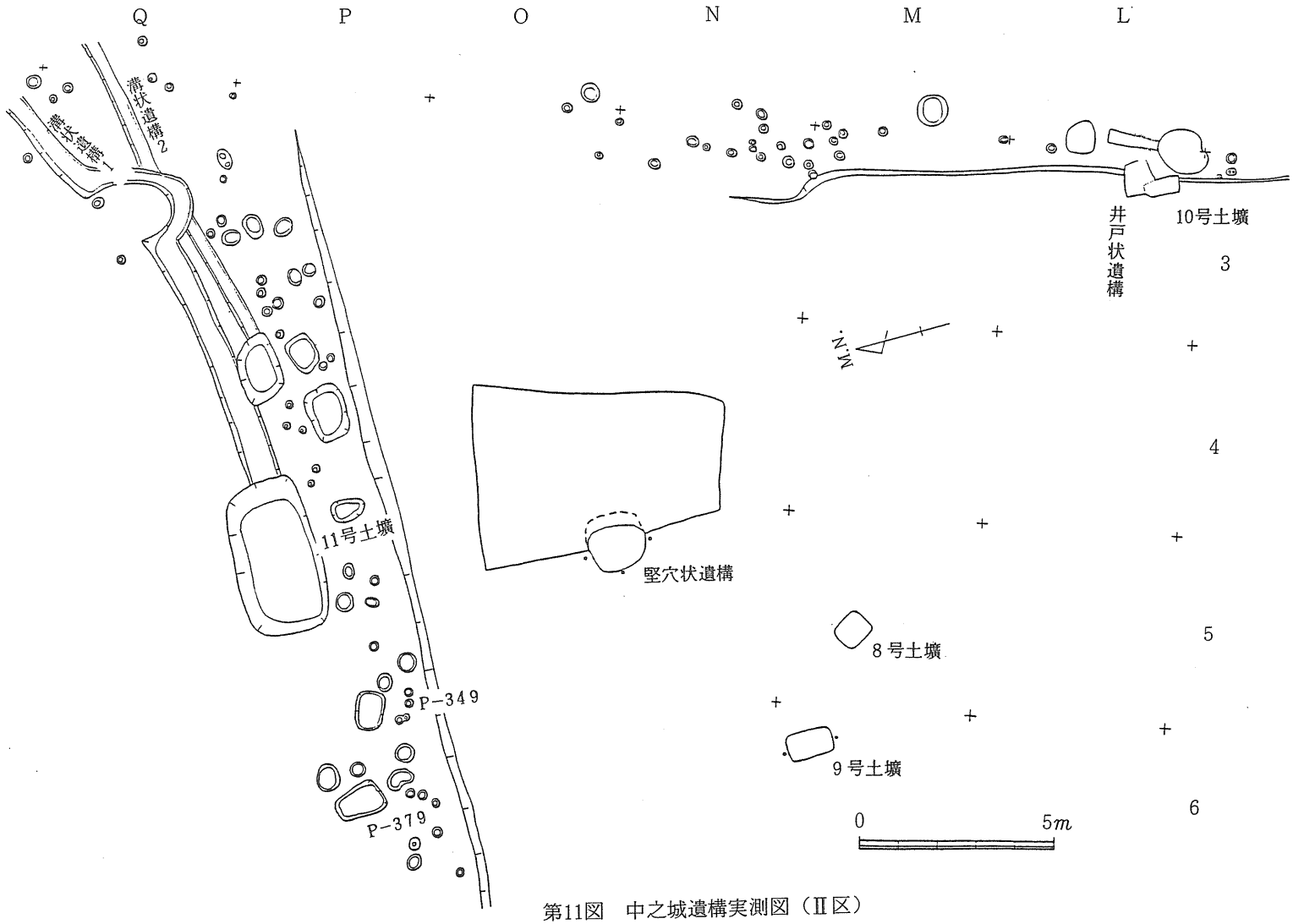
### 3. 井戸状遺構（第13図　図版９）

本遺構は、10号土壙に切られており、検出面での上場は南北約85cm、東西83cm、下場は南北１m18cm、東西１m07cmを測るほぼ方形の遺構である。上部検出面より底まで3.24mで、水性シラス層下の不透水層と思われる粘土層上（層厚５cm）まで掘りこまれ、下部に向ってわずかづつ広がるフラスコ状を呈す。このことは、本遺構の機能を特徴づけることと思われる。[注2.] なお埋土については、

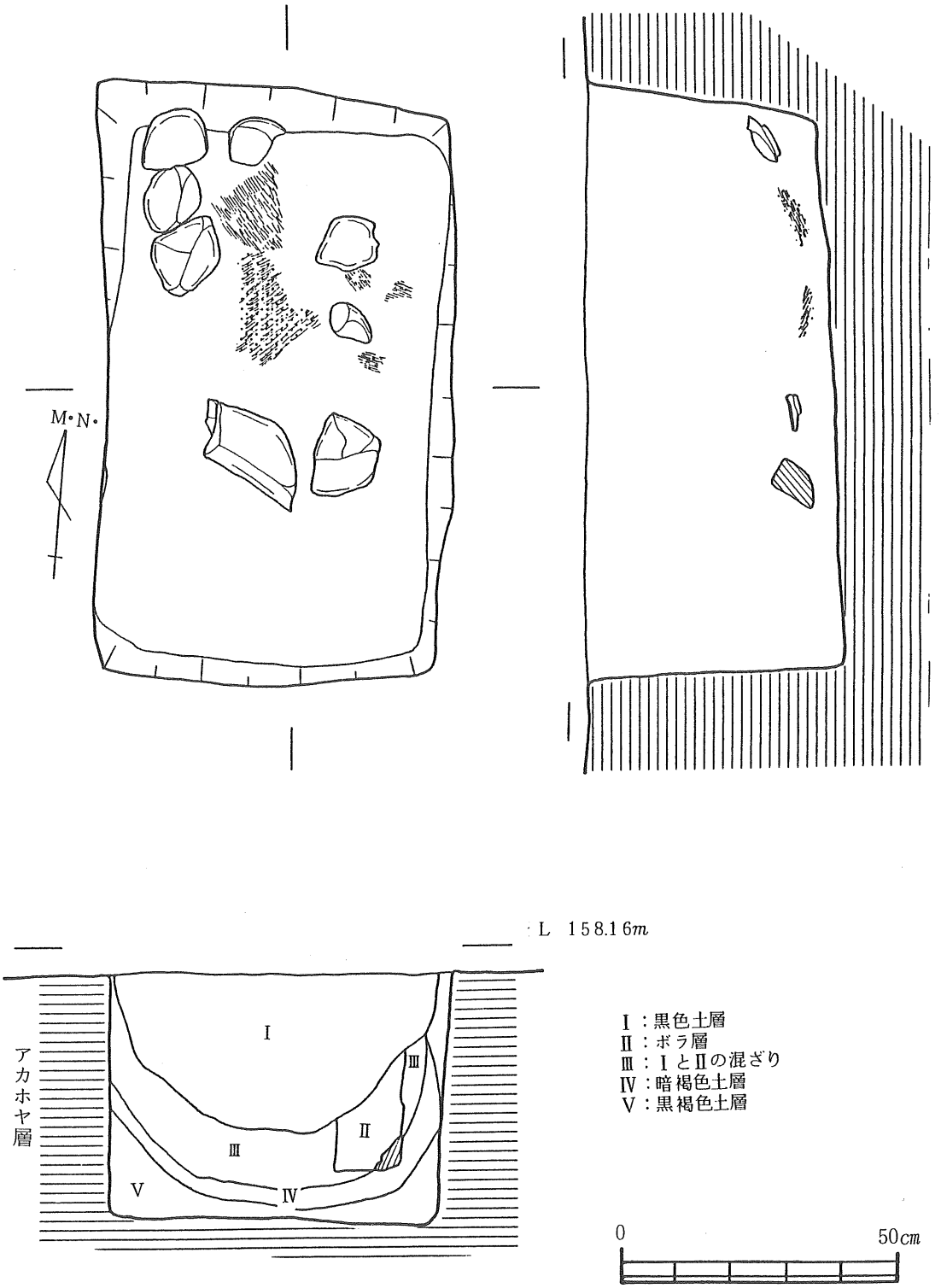
第１層　褐色土層（白ボラ混）

第２層　白ボラ層（２〜３mm）

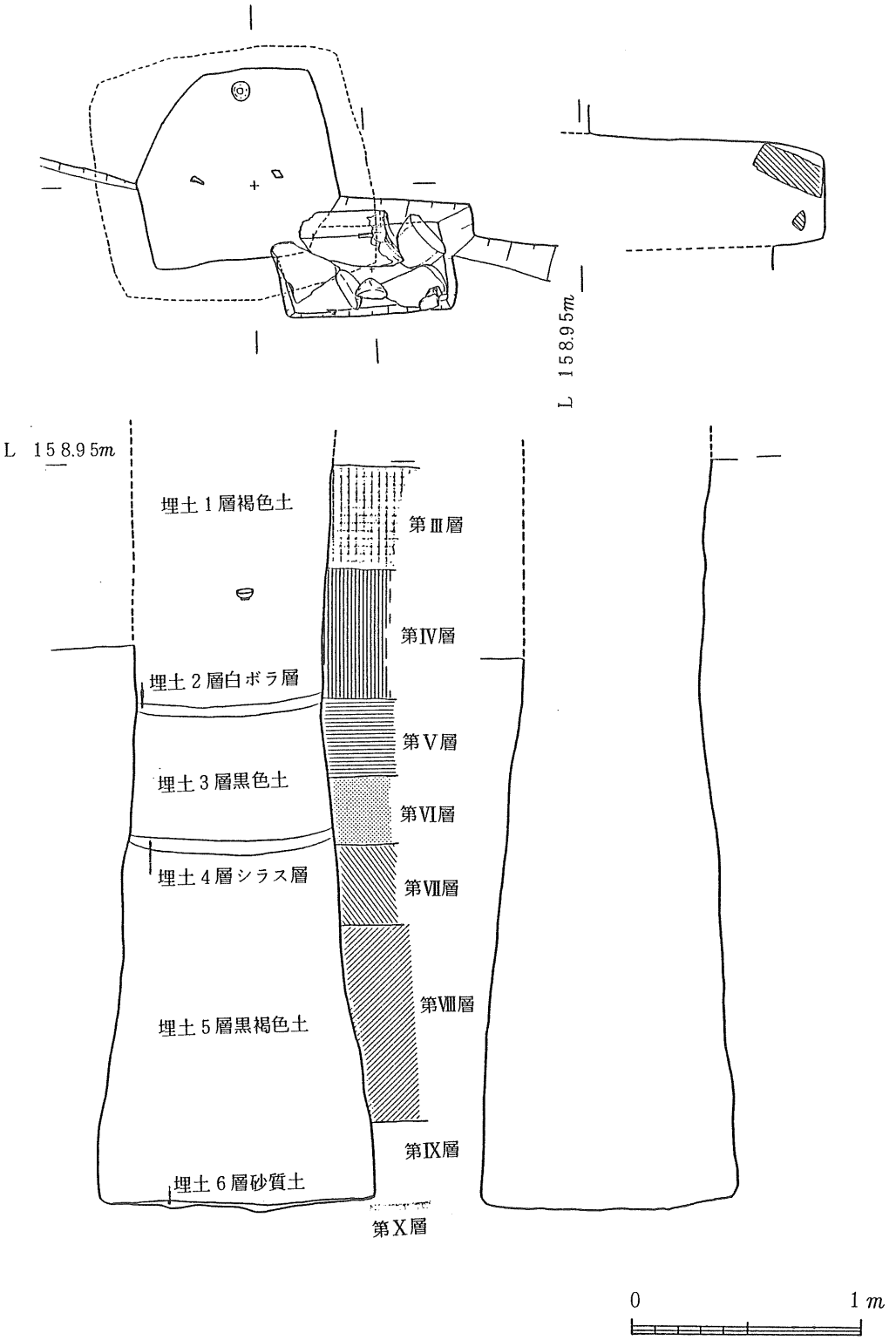
第３層　黒色土層（炭化物を多く含む）




第11図　中之城遺構実測図（Ⅱ区）




第12図　9号土壙実測図



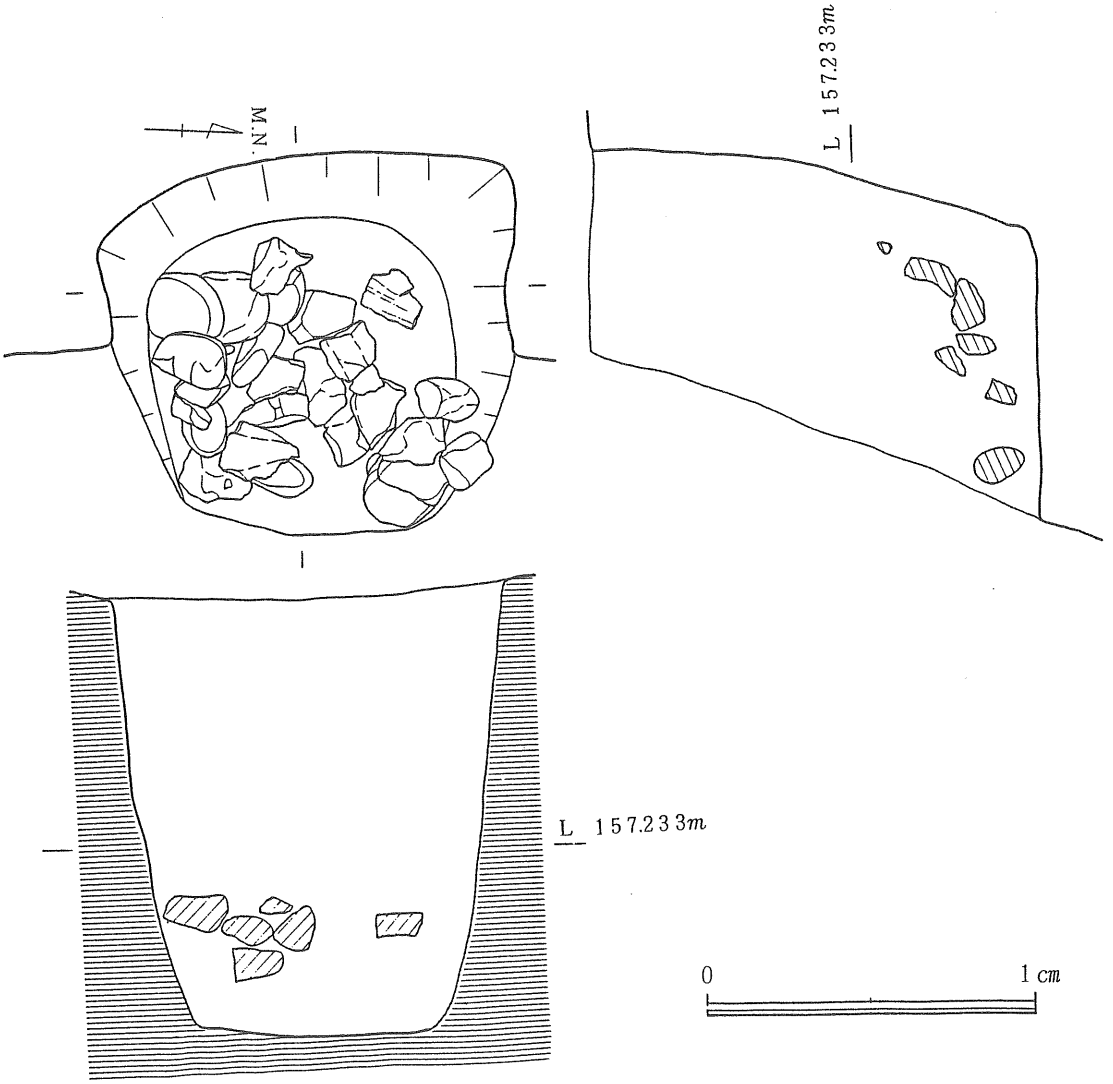

第13図　10号土壙及び井戸状遺構実測図

第４層　シラス層

第５層　黒褐色土層（ブロック状土，焼土，ワラ・カヤ類の炭化物及び灰を含む）

第６層　砂質土層

となっており特に第５層は、ワラ・カヤ類の炭化物・灰に焼土、ブロック状の土、土壁か土塀の一部と思われる遺物が混入した状態の埋土であった。あわせて埋土の白ボラ層及びシラス層の存在は意識的な廃棄を想起させ、一時期の廃絶を窺わせるに充分な状況であった。底面の第６層については水性シラスのものと思われる砂と粒子の細かい粘質の土が若干堆積していた。




第14図　竪穴状遺構実測図

遺物については、青磁（32）が第1層より出土しており、第3層より鉄釘、土師皿片（16）が出土しており、最下層の砂層の中に底面にはりつく形でどぶねずみの骨が1個体分出土している。またその他に土壁（土塀）と思われる厚さ4.5cm位の粘土塊の構造は、中央部に径1cm位の竹をほぼ半截し、その切断部分を外に向け組み合わせ、一部をシュロ状の均一な繊維でより合わされた細縄（遺存時径3mm弱）により結ばれており、竹組を中心に外側2cm位、内側1.5cm位にワラ・カヤを混入した粘土をはりあわせ表面を3mm位の厚さで上塗りしている。

4. 竪穴状遺構（第14図　図版8）

一辺が1.2m、深さ1.3m、すでに土取りのため半分は削平されていた。埋土は黒色土で、下面は第Ⅶ層まで達しており、底面は1辺82cmの隅丸方形を呈する。床面付近より多くの石が検出されたが、そのほとんどは軽石であった。石の出土状況からして人為的に積まれたものでないと思われ、用途については不明であり、伴出遺物はみられなかった。

5. 溝状遺構

Ⅱ区北側に2本確認できた。いずれも後世の土壙によって切られている。1は、幅約70cm、深さ約10cmで埋土は褐色土である。遺物は確認されなかった。2は、幅約30cmで深さ約15cm、埋土は暗褐色土である。備前焼の擂鉢（72）が出土している。1，2とも部分的にしか残っておらず、用途については不明である。

注1. 虎口というより城内に3つある城士邸の区画の役目をもった通路の可能性が考えられる。

注2. ここでは不透水層の粘質土の存在から井戸状遺構としたが、土牢、貯蔵穴、埋納施設（貴重品）などの遺構の可能性も考えられる。

# 第Ⅲ章　出土遺物

今回の調査では、耕作、戦時中の兵舎などによる撹乱が激しく一括資料として扱えるものはほとんどなく、表土中出土が大部分を占める。遺構出土の遺物についても混入が目立つ。そのため、ここでは遺物の種類ごとにまとめて紹介したい。なお、遺構出土の遺物については遺構のところで遺物番号を付した。

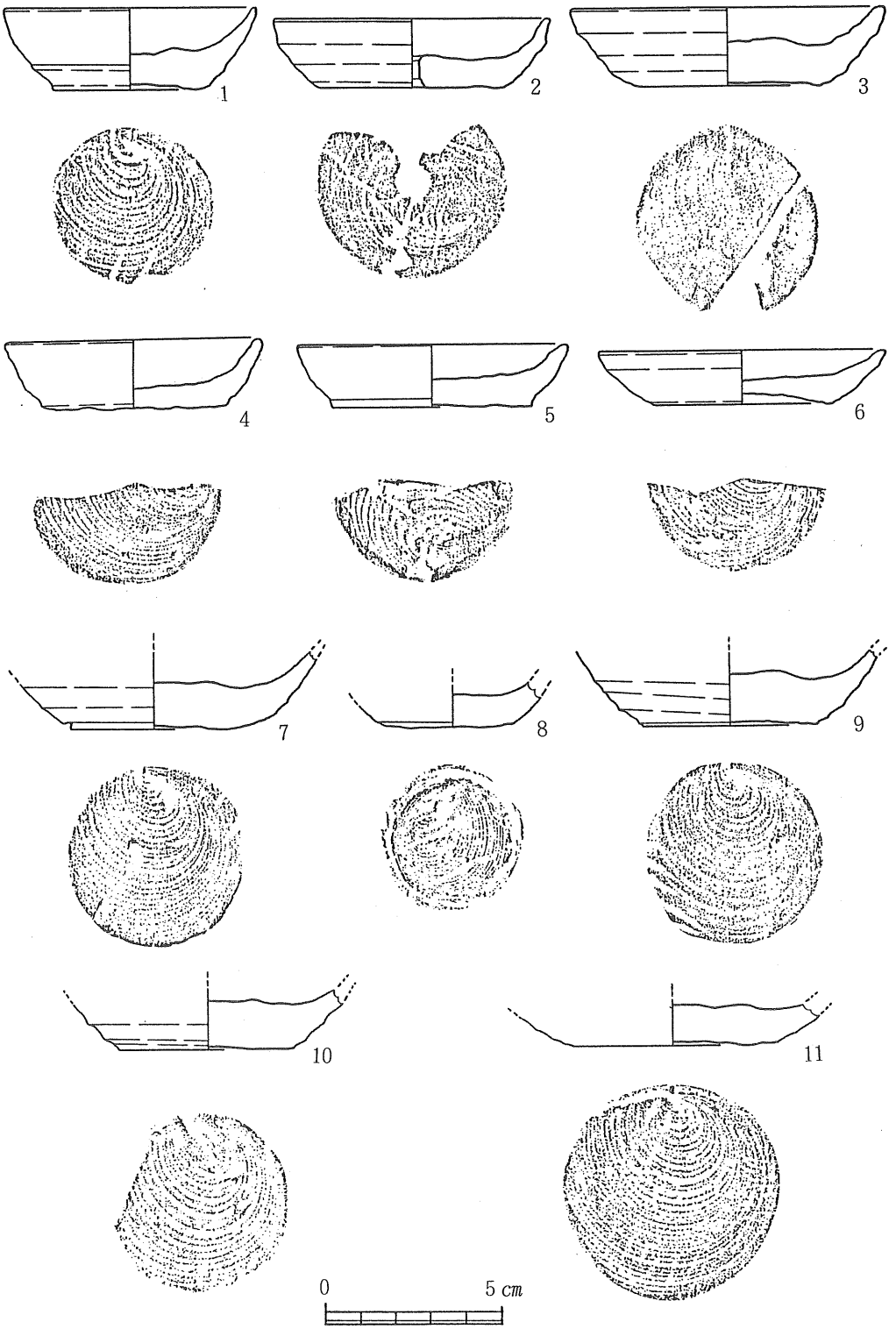
1. 土師器（第15・16図，図版10）

すべて回転糸切り底の皿でほとんどが復元実測である。

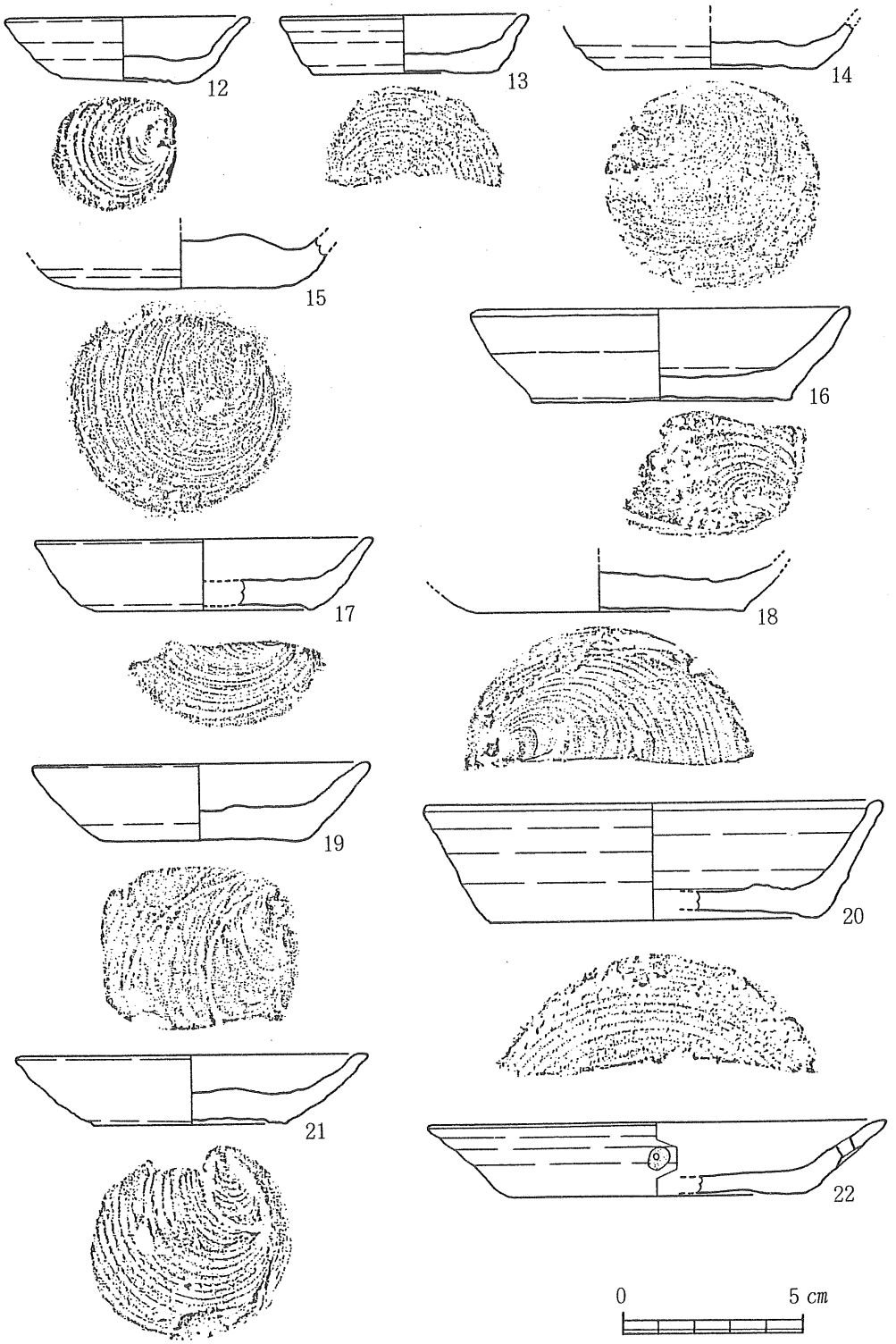
1～6は、口縁部がやや内彎気味に立ちあがり端部は丸くおさめられる。7～11も、同様と思われる。その中でも1・3・7・9・10・11は、底部の厚さが1cmを越える。また3・9・10は、体部外面に明確な稜をいくつか残す。2は、底部中央が穿孔されきれいに整形されている。12～22は、口縁部が直線気味あるいは外反しながら立ちあがる。これらは内彎するものに比べ上げ底ぎみで底部の厚味も少ない。20は、検出された土師器皿の中でもっとも器高が高い。底部は上げ底で淡黄褐色を呈す。23は、器壁中央部に外面より穿った孔が一ケ所認められる。焼成も良好で淡赤褐色をなす（表3）。

| No. | 器高(cm) | 口径(cm) | 底径(cm) | 底部の厚さ(cm) | No. | 器高(cm) | 口径(cm) | 底径(cm) | 底部の厚み(cm) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2.3 | 7.0 | 4.2 | 0.85 | 12 | 1.7 | 6.6 | 3.2 | 0.55 |
| 2 | 1.9 | 7.7 | 5.25 | 0.9 | 13 | 2.0 | 6.8 | 5.0 | 0.8 |
| 3 | 2.2 | 8.9 | 5.1 | 1.15 | 14 | 1.7 (推) | 8.4 (推) | 5.9 | 0.6 |
| 4 | 1.95 | 7.0 | 5.3 | 0.55 | 15 | 1.9 (推) | 8.6 (推) | 5.5 | 1.5 |
| 5 | 1.8 | 7.5 | 5.65 | 0.7 | 16 | 2.55 | 10.4 | 7.25 | 0.6 |
| 6 | 1.5 | 8.2 | 5.1 | 0.4 | 17 | 1.9 | 9.4 | 6.0 | 0.7 |
| 7 | 2.4 (推) | 9.5 (推) | 4.8 | 1.3 | 18 | 1.7 (推) | 10.4 (推) | 7.35 | 1.15 |
| 8 | 2.0 (推) | 5.8 (推) | 3.8 | 0.9 | 19 | 2.1 | 9.2 | 5.6 | 0.8 |
| 9 | 2.4 (推) | 9.0 (推) | 5.0 | 1.35 | 20 | 3.25 | 12.8 | 4.5 | 0.5 |
| 10 | 2.1 (推) | 8.4 (推) | 5.0 | 1.35 | 21 | 1.9 | 10.1 | 5.4 | 0.8 |
| 11 | 1.7 (推) | 10.4 (推) | 7.35 | 1.15 | 22 | 2.0 | 12.7 | 8.25 | 0.5 |

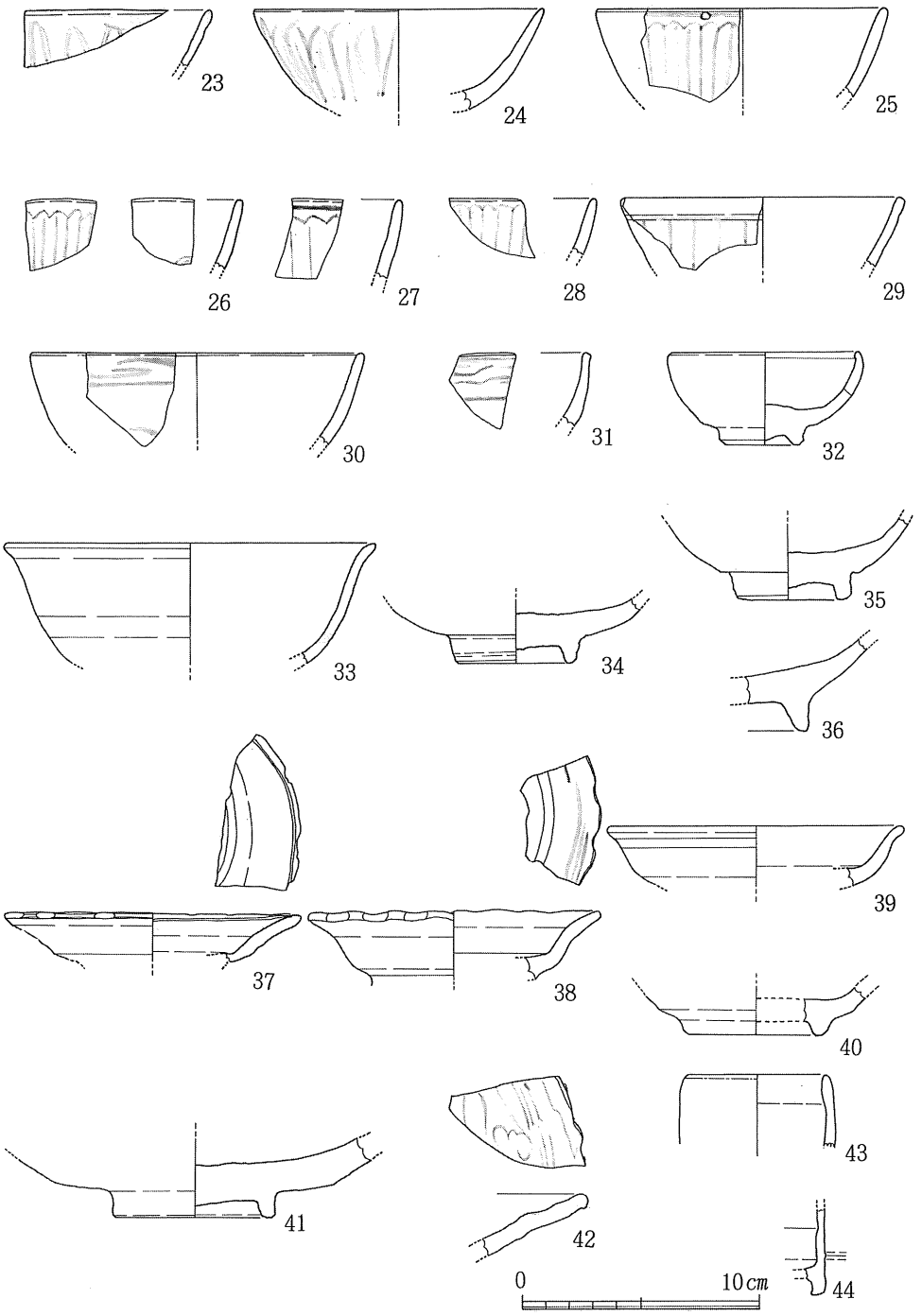
表3




第15図　土師器実測図(1)




第16図　土師器実測図(2)




第17図　青磁実測図

2. 青磁（第17図　図版12）

① 青磁碗（23～26）

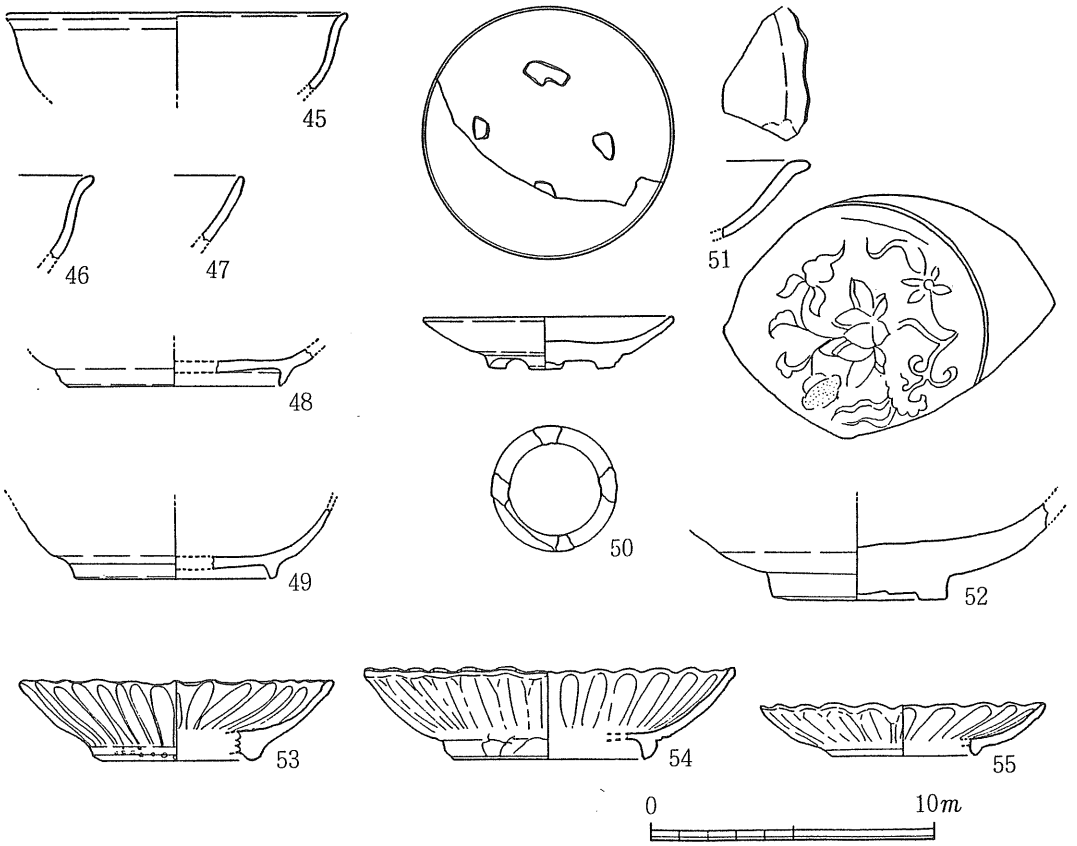
23は、線刻で蓮弁が描かれておりまだそれほど簡略化されていない。鎬にしても明確な稜は残っていないが、それを意図した高まりが認められる。灰青色を呈す。24は、P－39 9から出土している。オリーブ色の釉が内外面ともかなり蓮弁，間弁及び鎬が描かれている。一部2次的焼成を受け黄褐色に変色している。25～29は、線刻細蓮弁が体部に施されている。なかでも29は、他に比べ一層簡略化されたものである。25・26・27は青緑色、28・29は暗灰青色を呈している。30・31は、口縁外面直下に便化したヘラ描きの雷文帯をもつ。32は、Ⅱ区の井戸状遺構から出土している。口径7.5㎝、器高3.9㎝を計る。口縁部は比較的厚味をもったままのび、口縁端部で強く内彎する。見込みは厚く染付でいう「饅頭心」をなす。釉は高台手前までかかり一部畳付にまわる。口縁部が一部2つに割れているが、ニカワ系統のもので接着し再利用されていたらしい。33は、端反り碗で、腰より内彎しながら立ち上がり端部で外反し丸くおさめられる。灰青色を呈す。34・35は、釉が高台外面にかかり、面取りされた畳付をもつ。34は、高台外面に稜を有する。36は、34・35に比べ焼成・釉ともに良好である。高台内面まで比較的厚い釉がかかる。

② 青磁皿（37～40）

37・38は、いずれも口縁部が稜花をなす。37は、体部中央まで直線気味にのび、それよりかるく外反しながら口縁部にいたる。体部内面に稜を残す。茶味の強いオリーブ色の釉がかかる。38は、体部下半から稜を有して外反する。体部内面には、劃花文が施されている。39は、体部下半が「く」の字形気味に屈曲し口縁部にかけて朝顔形に強く外反する。　口縁端部は丸くおさめられている。40は、皿の底部でP－38から出土している。高台内部まで明灰青色の釉がかかるが、畳付の一部は釉が削りとられている。体部下半が「く」の字形に屈曲しており、高台は台形を呈する。

③ 青磁盤（41・42）

41は、Ⅱ区9号土壙出土である。全体的に厚味のある底部で見込みには2本の円圏がめぐらさられ、明るいオリーブ色の釉が高台外面までかかる。畳付は露胎である。白磁皿（52）と供に出土した。42は、口縁部手前でかるく「く」の字形に開く。　口縁は稜花をなし内面にはヘラ画きの劃花文が施される。外面には焼成時の砂が一部付着している。青緑色を呈す。




第18図　白磁・青磁実測図

④　香　炉（43・44）

43は、口径 6.2 cmで比較的厚味のある香炉である。暗青緑色をなし釉は外面と口縁部内面下約 1 cmのところまでかかる。44は、Ⅱ区 9 号土壙出土で、土師皿などを供伴する。口径 5.4 cmを計り 3 足の香炉と思われる。

その他掲載しなかったが、蓮弁文で明確な稜をもつ鎬部分の青磁片も出土している。

3.　白　磁（第18図・図版12）

①　白磁碗（45～49）

45は、丸味を持ちながら立ちあがり口縁部近くで外反する。器壁は薄手である。46も45と

ほぼ同形の碗と考えられる。両方とも焼成及び釉ともに非常に良好である。47はやや内彎気味に立ち上がる。口縁直下に稜を残す。内外面に微かな貫入があり淡黄白色釉がかかる。48・49は、碗底部である。48は灰白色の施釉がなされているが畳付は露胎である。全体的に薄手であり高台は内側に傾く。49は、体部下半より丸みをもって立ちあがる。48に比べてやや厚手である。明灰白色釉が内外面ともかかるが畳付は露胎である。

② 白磁皿（50～52）

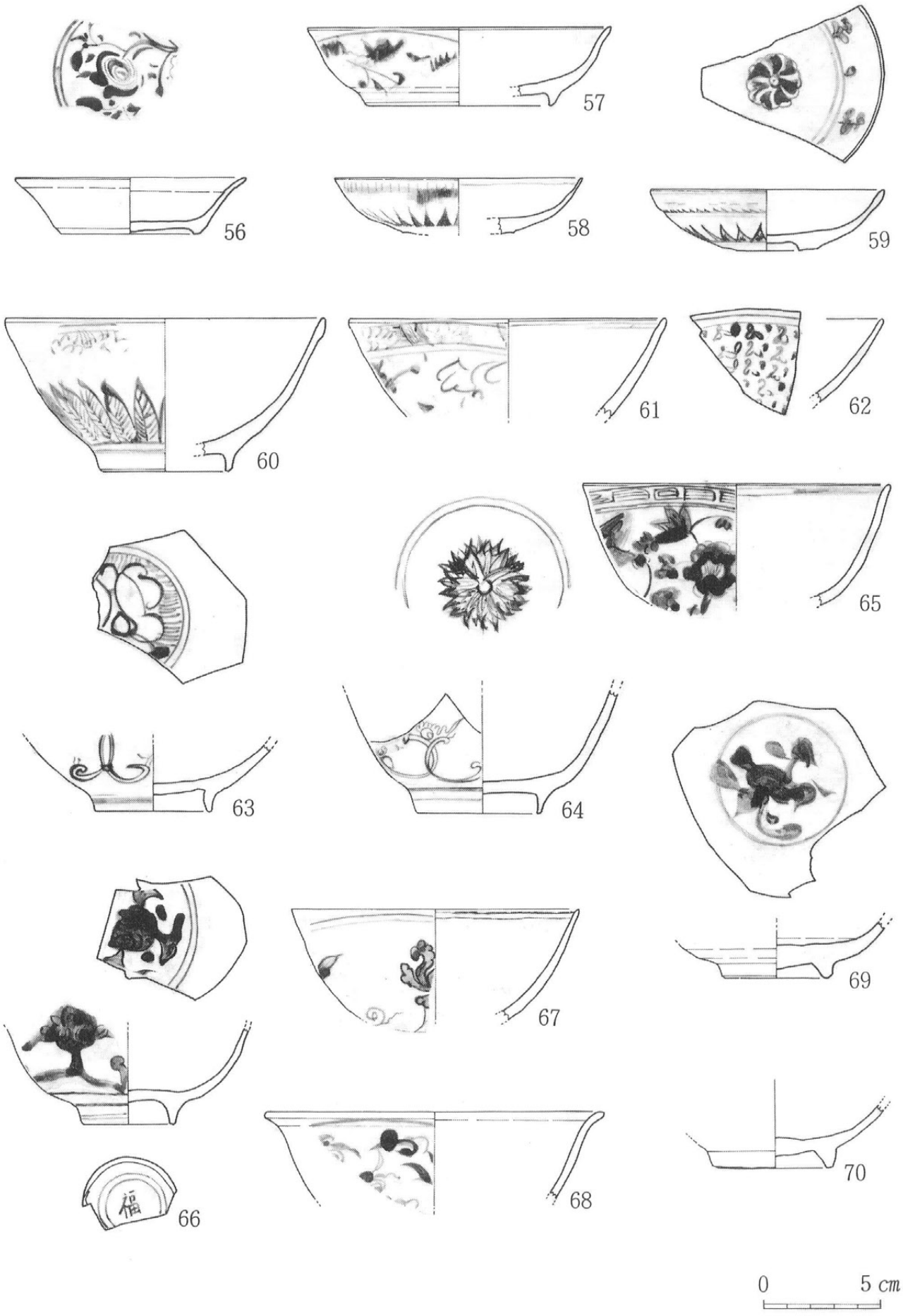
50は、口径8.9cm、器高1.8cmの白磁小皿である。高台内はヘラ切り痕を残す。高台は「アーチ状」に削られ台形状をなす4つの畳付を有している。畳付には重ね焼きの跡が認められる。また見込みにも同様の目跡を残す。51は、口縁が稜花をなす。部分的に先端が二股に分かれている。乳白色釉がかかる。52は、Ⅱ区9号土壙出土で青磁盤（41）も供伴している。がっちりした高台を有する。体部下半まで青白色の釉が施されている。見込には円圏をめぐらしスタンプ様の草花文が施されている。

③ 青白磁（53～55）

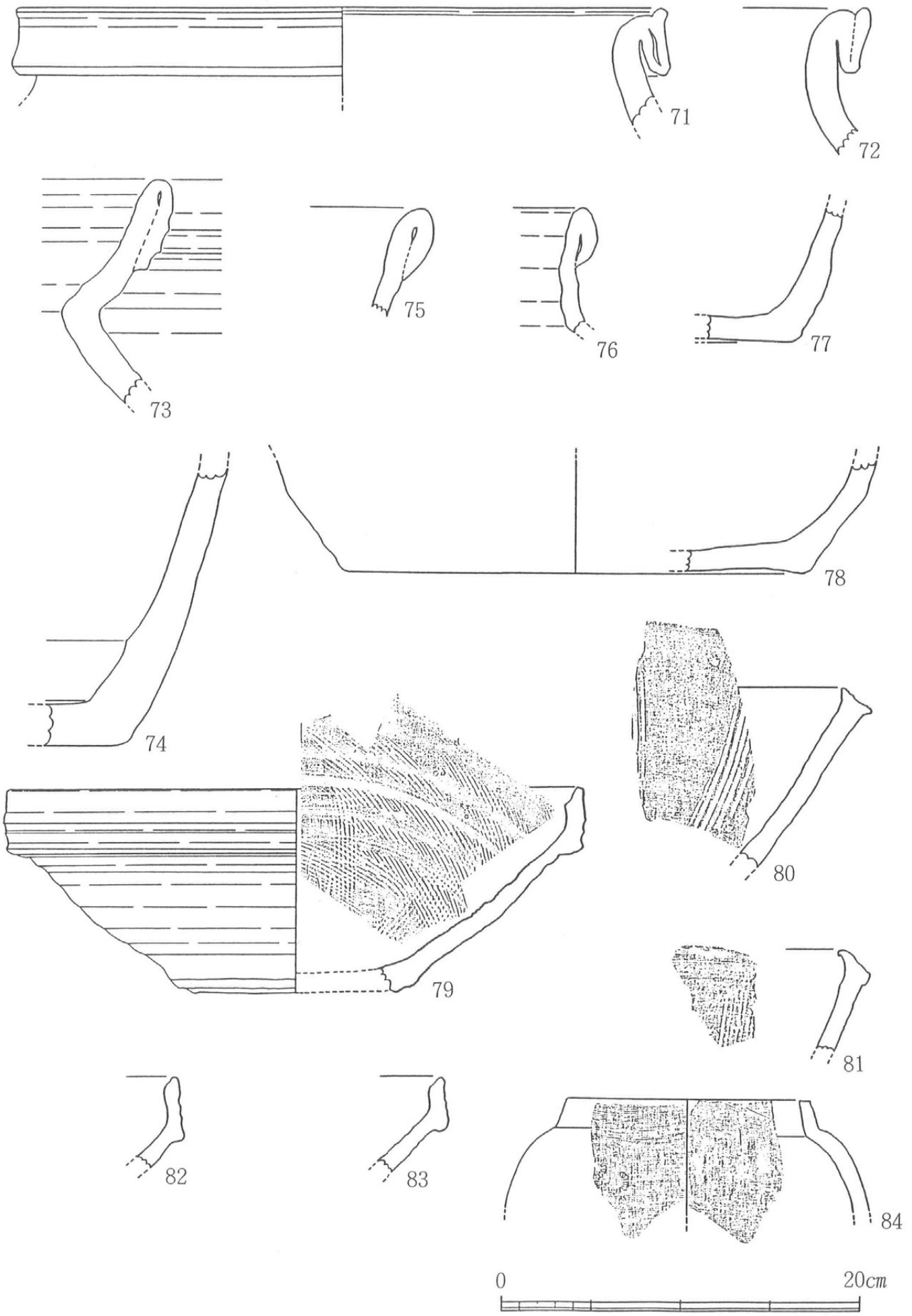
53～55は、菊花皿でともに口縁は稜花を呈する。53は明確な稜をもって内外面の菊花を表現している。灰白色の釉がかかる。54は、口径12.1cm・器高は3.3cmで3者の中で最大である。凹凸で菊花を表現しておりこの点では55も同様である。底部は薄く全体に淡青白色の釉がかかり、畳付は露胎である。55は、比較的小振りで灰白色の釉がかかる。53～55は、すべて体部下半から丸味をもって立ちあがり口縁部にいたる。

4. 染　付（第19図・図版13）

56～59は、皿類である。55は、わずかに高台をもつ端反り皿である。口径9.8cm・器高2.4cmを計る。見込みには花文が描かれている。内外面とも乳灰色を呈し畳付は露胎である。57は、56と同様端反り皿である。高台は内傾し、畳付は露胎。56に比べ腰から胴部にかけて丸味をもつ。58・59は、いわゆる「碁笥底」をもち胴部に芭蕉葉文が描かれる。60～62は、「蓮子碗」の系統に属す。60は口縁部に波涛文、胴部に芭蕉葉文がそれぞれ描かれている。61は、丸を3つ結合させた文様を胴部にもつ。63は、見込みがやや凹み64に比べ狭い。高台は薄手で外傾する。胴部にアラベスク文、見込みに花文をもつ。64は、見込みが63に比べ広く平坦で高台は内傾する。見込みには菊花文が施される。65は、口縁部に簡略化された雷文帯が描かれ胴部には牡丹唐草文をもつ。66は、腰から胴部にかけて丸みをもちながら立ち上がる。見込みはわずかに盛り上がり、「饅頭心」の系統に属する。高台はほぼ直立し、内面




第19図　染付実測図




第20図　陶器実測図

には、「福」の字が描かれている。67は、口縁部がやや外反し、胴部には唐草文をもつ。68は、口縁部が強く外反するいわゆる端反り碗である。口縁部内面には波涛文が描かれる。69・70は高台内が盛り上がり露胎である。高台は両方とも面取りされている。70はP－42 9出土である。

5. 陶　器（第20図・図版14，15）

① 常滑焼（71・72）

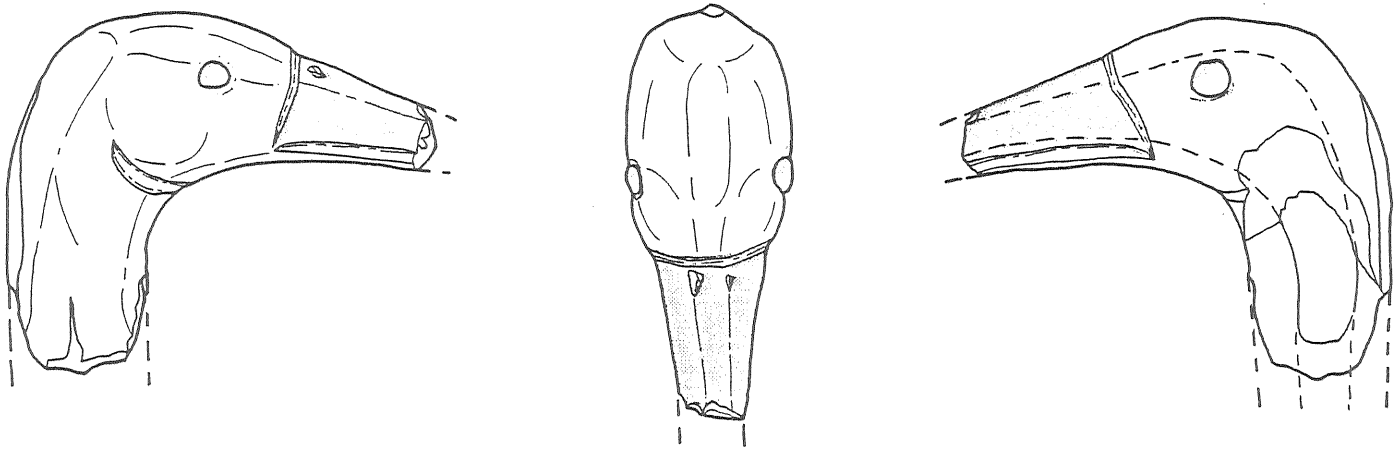
71は、口径3 6.6㎝を計る。口縁部は2度外側に折り曲げられ断面はN字状を呈する。縁帯も幅広く3.5㎝を計る。外面には、明青緑色の釉がかかる。内面は露胎でヨコナデ調整が施されている。72は71に比べ全体的に厚手である。内外面ともヨコナデによる調整がなされており、暗茶褐色をなす。口縁端部付近に斑点状の自然釉がかかる。

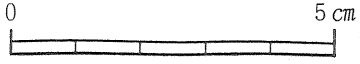
② 備前焼（73～83）

73・74はⅠ区1号土壙出土で同一個体と思われる。73は口縁の玉縁外面に凹凸をめぐらした口径 52㎝ の大甕である。口縁部は「く」の字状に外反しながら立ちあがる。頸部より肩部にかけて内面ではタタキ痕が見られる。外面では暗緑色の自然釉がかかる。口縁内面にもまばらに自然釉を認めることができる。74は厚手の底部である。内外面ともヨコナデ調整であるが、体部内面下に明確な稜を残す。75・76は口縁部が上方で折り曲げられ玉縁をなしている。両者ともヨコナデであるが、76は内面に稜を残している。また外反する75に対して76はやや直立すると思われる。77・78は甕の底部と考えられるが、 共に75に比べ薄手で上げ底を呈する。78は「通路」床面直上より出土し赤褐色をなす。78の底部内面は非常に磨研されている。79～83は擂鉢である。79は、P－20 9より出土。体部から口縁部にかけてやや内彎気味にのび口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。端部は丸くおさめられ、口縁下半には凹凸を残す。内外面ともヨコナデでその後斜線と縦線の条線が施される。80は、Ⅱ区11号土壙出土である。体部から口縁部にかけて直線的に張り出し、端部付近で上方にややのびる。内面はヨコナデ後、縦方口に 1単位6本の条線が施される。81は、口縁端部が途中より急に上方に張り出すが、その端部は内側につぶれている。外面は青灰色、内面は茶褐色を呈す。Ⅰ区1号土壙出土で73・74と供伴する。82は、口縁外面に凹凸を残し全体に自然釉が認められる。83は、比較的器壁が薄く条線は認められない。

③ 火　鉢（84）

84は、内外面とも淡青灰色を呈する。肩部には2つの菊花文が施される。口縁部内面は横方向の、体部内面には斜めの刷毛調整がなされる。「通路」床面直上出土である。






第21図　三彩鳥形水注

6.　三彩鳥型水注（第21図・口絵１）

頭部のみで嘴の先端部はすでに破損していた。嘴と眼の部分に緑釉、それ以外の部分には黄色の釉がそれぞれ施されている。施釉は比較的薄く風化のためかムラがある。同種の水注は、阿蘇大宮司の館跡とされている浜の館から出土している。(注1.) しかし、浜の館出土の鳥型水注は鴨を、中之城跡出土のものは鶴をモチーフにしている点が異っている。通路埋土中より出土した。(注2.)

その他に図示しなかったが洪武通宝、石臼片、フイゴの羽口などの出土遺物があった。

以上、遺構、遺物について述べてきたわけであるが、すでに中之城自体がかなりの破壊を受けているため遺跡の全貌を明らかにすることはできなかった。

Ⅰ区、Ⅱ区とも柱穴群、土壙など検出したが、その中で目をひくのが土壙の多さであった。土壙は、発掘面積や撹乱によってはっきりとはいえないが、北側、南側のへりに集中しているように思える。遺物を出土したのは１号・９号だけで、これら土壙の時期差あるいは用途については不明である。類例としては、清武城などからも検出されている。(注3.)

遺物のほとんどは埋土中よりの出土ということである程度の年代幅をもって考えてみたい。青磁は大部分が線刻の細蓮弁文あるいはそれがくずれた形の碗で、15世紀～16世紀にかけてのものであろう。(注4.) 染村は、小野氏の分類によるならば一部$B_1$群の皿も見られるが、碗、皿ともＣ群に含まれるものばかりであった。(注5.) 陶器類は備前がほとんどで一部常滑大甕の口縁部が出土している。備前の大甕はⅤ期、擂鉢はⅣ～Ⅴ期の特徴を、(注6.) 常滑大甕はⅤ期の特徴をもつ。(注7.) 土師器のほとんどは糸切り底の小皿で法量も小さくほぼ同種と思われるものばかりであった。これら遺物を総括して年代幅を考えるならば15世紀中葉から16世紀末という時期を与えられる。これは、城が存続していた１３７５年（築城）～１６１５年（廃城）までの時期にあたり、文献上の「都城」の存在を裏づけるものといえよう。

都城周辺からは、祝吉遺跡の緑釉陰刻牡丹文水注、(注8.) あるいは墨書土器が、(注9.) そのほか北諸県郡高崎町では須恵器壷、土師器杯とともに越州窯系青磁碗も出土している。(注10.)

最近、宮崎学園都市遺跡群では中世の遺物も多量に出土している。それらは古銭あるいは銘でもった石塔などに供伴し、(注11.) 県内における古代から中世にかけての遺物に対する時期比定の重要な鍵を握ると思われる。

注1.　『浜の館』熊本県教育委員会　1977

注2.　浜の館や祝吉遺跡では埋納された状態で出土している。

注 3.　『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集』宮崎県教育委員会　1979

注 4.　亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古稀記念古文化論集』1980

注 5.　小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№ 2.　1982

注 6.　『世界陶磁全集』3　小学館　1977

注 7.　同　上

注 8.　『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第 1 集　1981

注 9.　都城43普通科連隊内郷土館に祝吉出土として展示してある。

注10.　面高哲郎「高崎町東霧島出土の輸入陶磁器」『宮崎考古』6　1980

注11.　『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅰ　1980

『　〃　』Ⅱ　1981

『　〃　』Ⅲ　1982

# 第Ⅳ章　結　　語

都城は鶴丸城とも言われ、本丸，西之城，中之城，南之城，外城，小城，新城，池之上城，中尾城，取添城によって構成される。都城は永和元年（１３７５）、第２代都城領主北郷義久が築いたとされるが、「庄内地理志」によると、この時は本丸，西之城，中之城，南之城，外城が築かれ、その後、８代忠相の時に新城，池之上城，中尾城，小城および中尾口（大手）弓場田口（搦手），鷹尾口（西北の間），来住口（東），大岩田口（南）の五口も定められたという。また、取添城は伊集院幸侃の時に定めたとある。

今回発掘調査を行った中之城跡は本丸の南にある。図書館蔵の絵地図には「取添城」「忠虎公ノ御妹」の名がみえることから、　この原図の作成年代は慶長年間と見て差し支えないであろう。元和元年（１６１５）に廃城となるから、図面記載の家臣名は都城に居住した最終段階の人々とも考えられる。中之城跡に限っていえば、伊ケ倉喜右衛門（忠年），日置筑後（久之），白濱幡摩（重政）の名が見える。

調査は限られた区域で行わざるを得なかったが、先述したように、記録類では把握できない諸事実が明らかになった。中之城中央を南北にカギ型に抜ける幅約４$m$の通路、おそらく伊ケ倉家の屋敷に属すると考えられる正門跡の遺構、通路に面して築かれた軽石製の石垣列、また、白濱家に関するとみられる深さ３$m$余りの井戸状遺構など比較的遺存度のよい遺構群であった。その他、方形に掘り窪められた遺構など、機能・用途について不明な点も多々あったが、他の城跡調査での類例を待ち、検討していきたい。

出土遺物は、１５世紀から１６世紀にかけてのものを中心としており、土師器小皿、青磁、白磁、染付、陶器などである。また、通路の脇から出土した三彩鳥形水注の頭部が１点あり、注目される。さきの祝吉遺跡の第１次調査で出土した緑釉陰刻牡丹文水注とともに島津氏の戦国期における動静を語る資料のように思われる。

壮大な規模を今に残してきた都城跡も次第に時代の波に押され、現在半数近くの城を失ってしまった。南の方から小城，南之城，外城，池之上城の一部，新城が今はなく、考古学的調査が行われたのは中之城跡が初めてである。他の残っている城跡の保存状況は極めて秀れている。

# 付　「都城」築城とその位置

この「都城」を中心とする地方は、古代より、島津庄の発祥地とされ『建久図田帳』にある北郷300町、中郷180町、南郷200町、三俣院700町、島津院（破）300町がそれにあたる。鎌倉時代には富山氏や開発領主系の伴氏一族が、島津庄官人として弁済使、図師、公文等として活動している。建武元年（1334）の「島津庄地頭代道喜濫妨人注文」の中には、北条氏の日向料国化を示す北条氏一族家人等に併せて在地系領主の建武新政による支配に反抗している事実が記されている。南北朝初期には肝付兼重が三俣院高城を中心に南朝方として活動しており、対兼重与党として畠山直顕（義顕）が日向国支配の為、尊氏より下向させられている。南九州の南北朝の混乱は複雑であり、島津氏はその中で、三州の国人領主等と競い領主権の伸張を計っている。

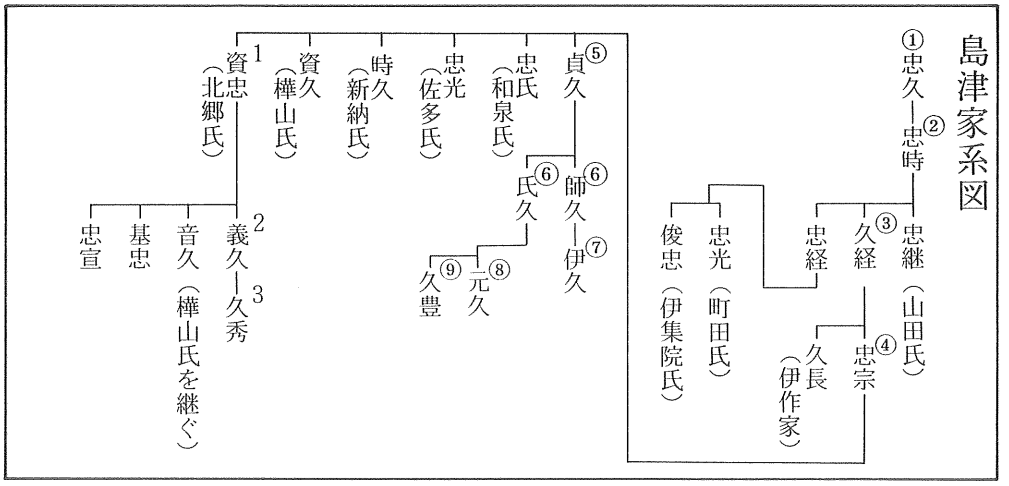
こうした中で北郷氏の入部は、島津氏の代官支配方式から、惣領鎮西下向一庶子配分方式へと移行（注1.）し、在地における領主権の伸張を目ざす中に捉えられる。4代忠宗の3男までが、薩摩国を中心にその配分が行なわれ、後をうけて、4男時久（新納氏）、5男資久（樺山氏）、6男資忠（北郷氏）が、日向国にその配分をみることになるわけである。次にその資忠の入部についてみると、

北郷氏初代である資忠については、『西藩野史』にある暦応4年（1340）4月の催馬楽城攻が初めであり、ここでは南朝肝付兼重与党矢上氏攻めを樺山資久と一緒に将として攻め落している。また、観応2年（1351）に南朝方の雄である菊池武光との戦いであった筑前金隈の戦に一色範光に属し氏久とともに戦っている。そして文和4年（1355）薩摩知色城にあって島津師久とともに、東郷氏等の攻撃を受け、師久とともに傷を受け、手負百余人と記されており、相当な苦戦を強いられている。『庄内地理誌』によると資忠の庄内（北郷）安永村薩摩進入部は文和元年（1352）とし、筑前金隈の戦の功として北郷300町を与えられたものとする。しかし、北郷氏（資忠）の庄内地方支配は、次の文書等から確固たるものでなかったことも考えられる（注2.）。相良文書に延文4年（1359）に畠内直顕より相良定頼に北郷領家職を兵粮料所として預け置かれており、また年紀を欠くとはいえ、相良定頼一族に一色範氏（九州探題、肥前守護）より宛行われた所領の目録があり、本来の領国たる肥後球磨郡をはじめ、日向にも相当数の所領が、宛行われている。これを受けて相良氏は庄内地方にも転回していたものと考えられ（注3.）、事実、島津氏久は延文4年（1359）に大隅・日向の国境である国合原の戦に相良定頼に破れ、鹿児島まで落ちのびている。北郷資忠の入部（1352）

から義久の都城築城までについては詳らかにし得ないが、氏久の手として従っていたものと考えられる。北郷氏の庄内地方における確固たる転回は、二代義久の都城築城とその格護にまつことになる。

都城築城は『庄内地理志』によると永和元年（1375）とされ、(注4.) 二代義久の時とされている。この築城の理由を考えると、前述の相良氏一族の都城周辺への転回があり、また、直接的には、永和元年（1375）の九州新探題である今川貞世による少弐冬頼謀殺事件である肥後水島の陣での訣別があるものと考えられ、対抗上、南朝方となった島津氏に対して組織された南九州国人一揆に備えたものと考えられる。これは、新納時久の新納院高城落城から、島津氏の日向の国における橋頭堡としての庄内地方を格護させることを意味し、天授2～3年（1376～7）の南九州国人一揆による都城の役では氏久は後巻として、救援しており、乱戦の中、一揆方を退ぞかせている。そしてこの戦は『山田聖栄自記』に「一、氏久ノ御代ノ内ニも是程之大合戦ハなし、(中略）」といわしめる程の重要な戦であったのであり、その戦を戦い抜いた島津氏は、その一家衆である北郷氏（樺山氏を含めて）をして庄内地方に確固たる橋頭堡を確保したのであり、後の野々美谷城をあわせて、日向の地に進出の基盤を得たのである。その後、北郷氏は「都城」を根拠として活動し、北原氏・伊東氏といった近領主と攻防を重ね、退りぞけ、一族である新納氏とも衝突するなどして、都城地方にその境域を漸次拡げていくことになる。永禄年間（1570年頃）には、日我上人(注5.)をして島津氏の庶子の中でも主ものとして挙げられ「（前略）薩州或ハ北郷など人数分限の衆様々計略の行にて国を守んとし色々賄賂仁義候て雖望家督、（後略）」として家督（島津宗家）を望む程の大身になっている。その後文禄3年（1593）に祁答院に転封されて、伊集院氏の城となる。

（有田）



注1.　瀬野精一郎、「鎮西に於ける東国御家人」　日本歴史167号・168号
この中で島津氏型＝代官支配方式としてその領国支配の不利を述べてある。

注2.　日向古文集成二－27号、「北郷資忠譲状」には、北郷の3分の1を譲り渡している。
このことは、資忠の北郷地方支配を示すものとも考えられる。

注3.　服部英雄「相良氏と南九州国人一揆」歴史学研究514号
この中で氏は相良氏にとっての一揆参加の意味づけの中に、①球磨郡における平和的状況を作ること。②都城地方に恩賞地を確保すること。の二つを挙げられ、一族田中公長の配置を指摘されている。

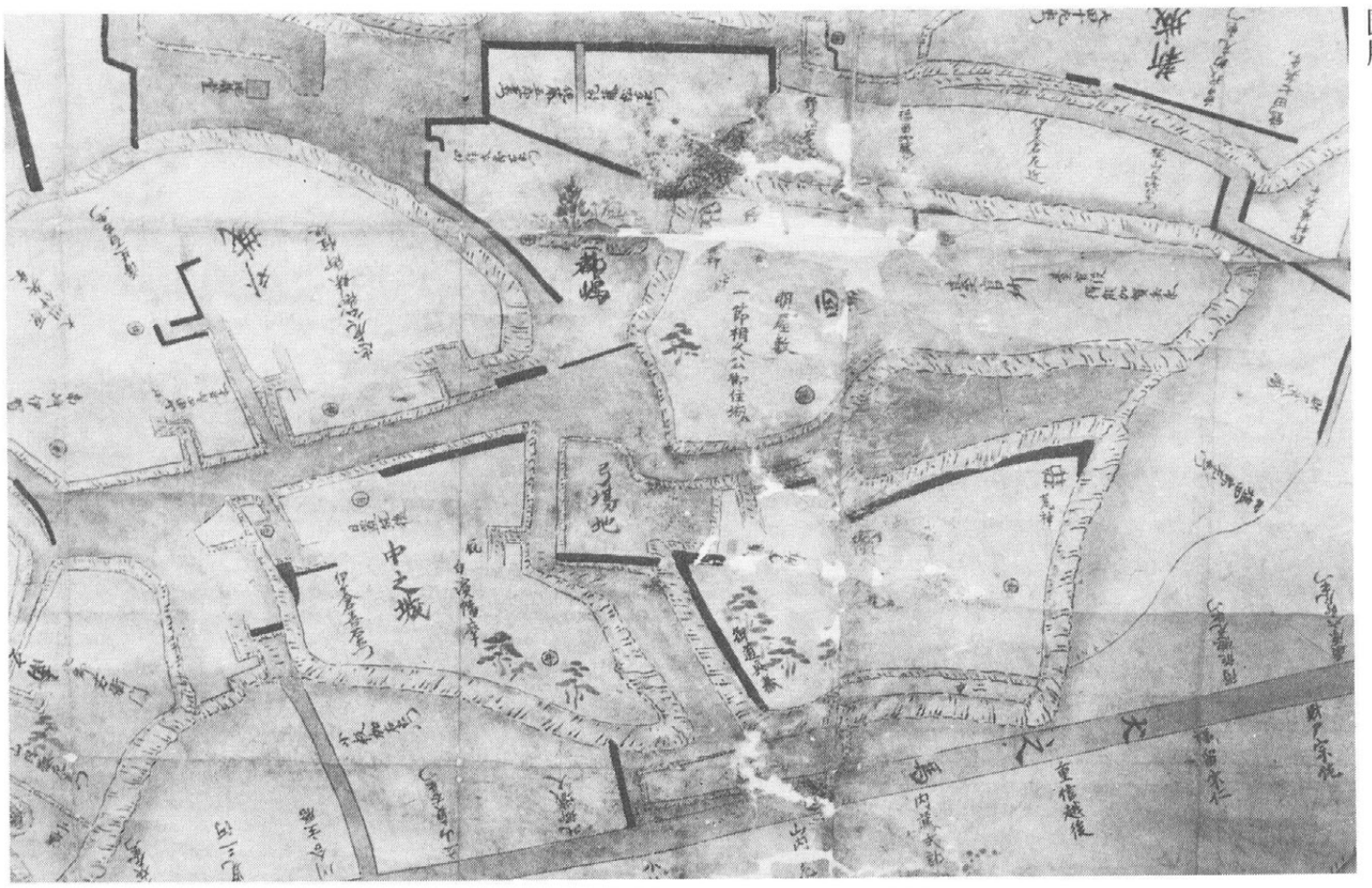
注4.　この中では、大和田城を大岩田城とし、「都城」はその地に築かれたとしている。
因みに「大和田城」は日向古文集成二ノ9号「畠山義顕注進状」に落城の事として挙げている。1341年以前に落城していることが知られる。

注5.　五味克夫「島津家物語一日我上人自記」について、鹿大史学23号

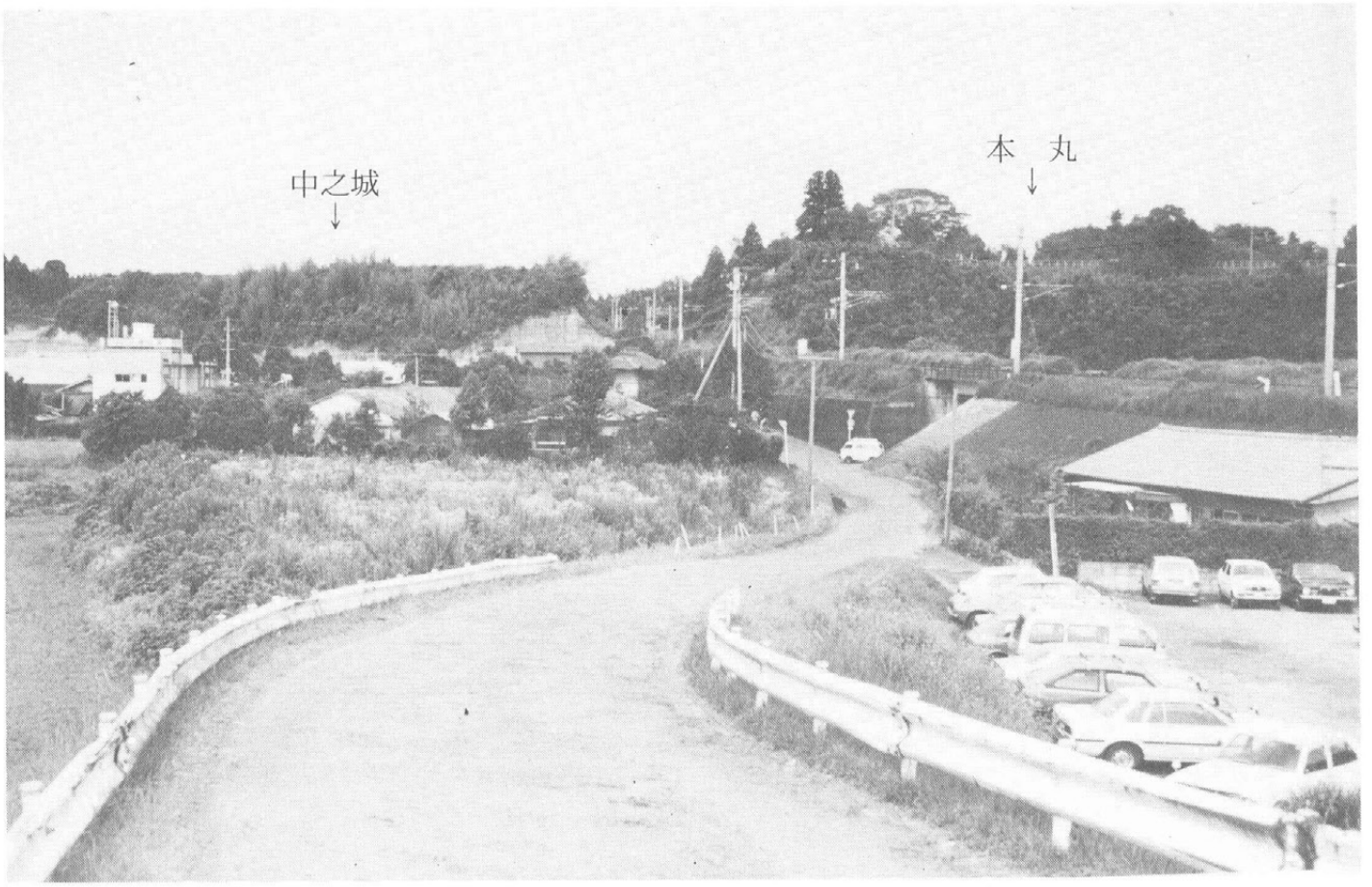
# 図　版

# PLATES

図版1

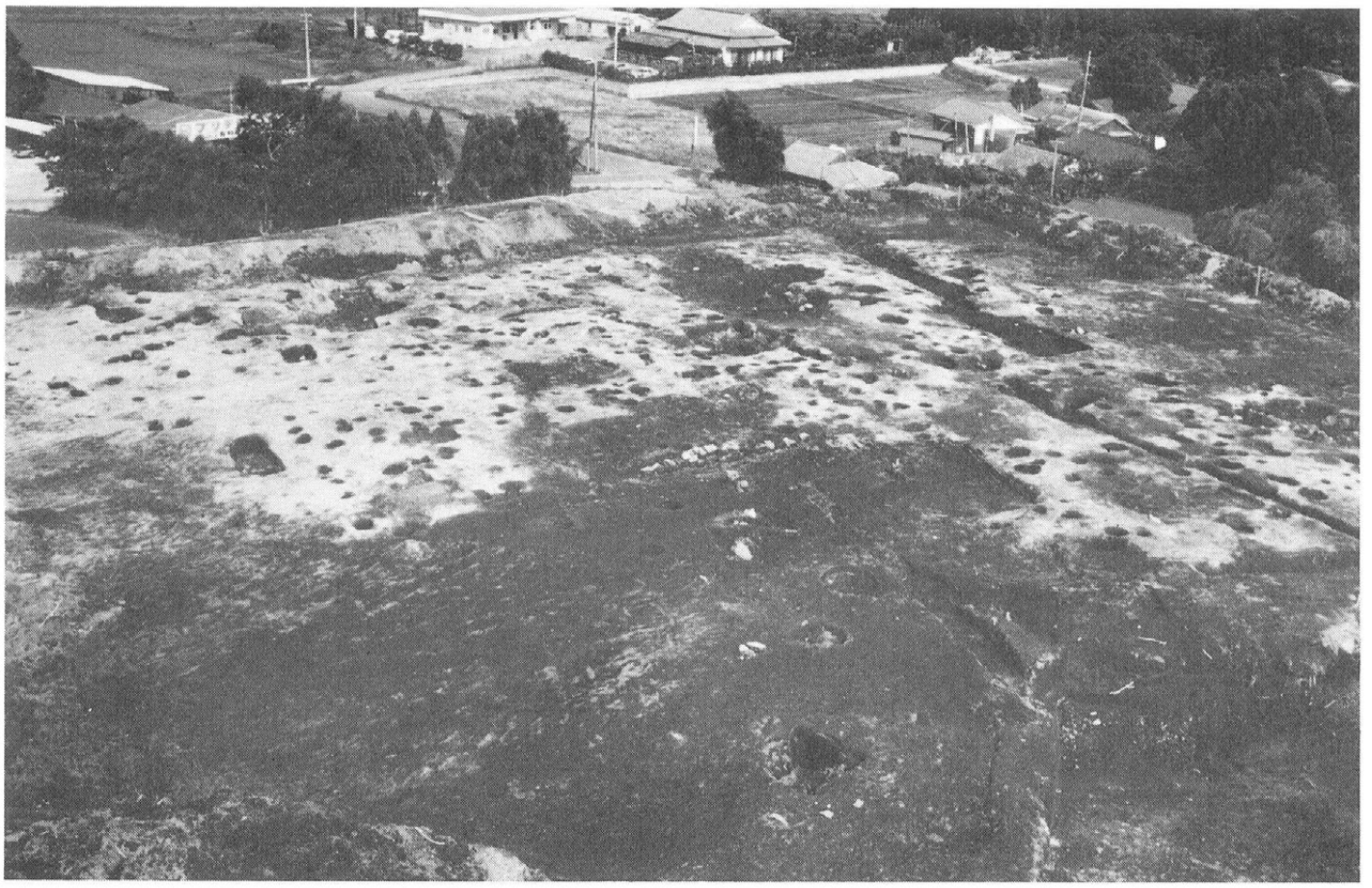



絵　図　（拡大図）

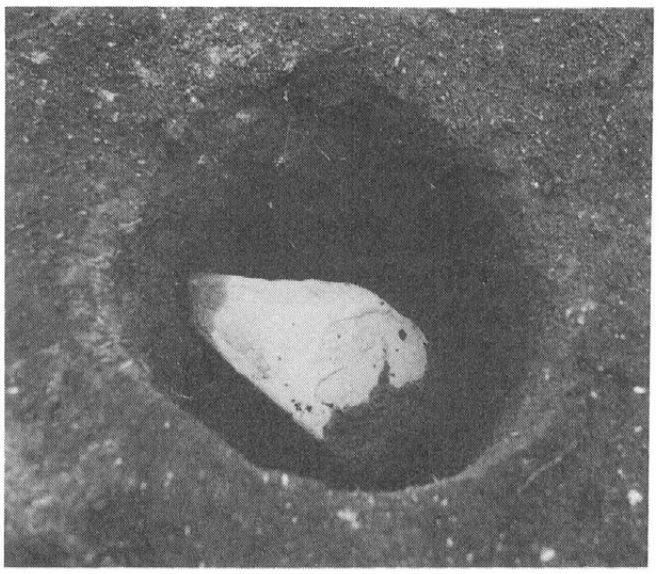


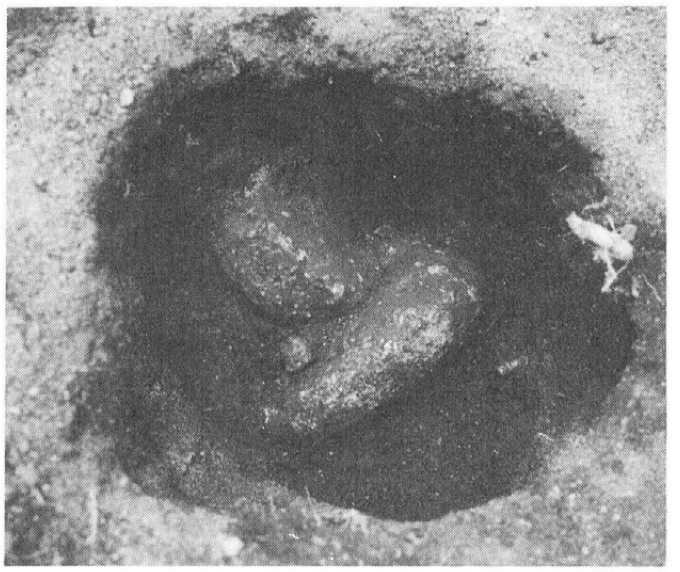

都城遠景

図版2

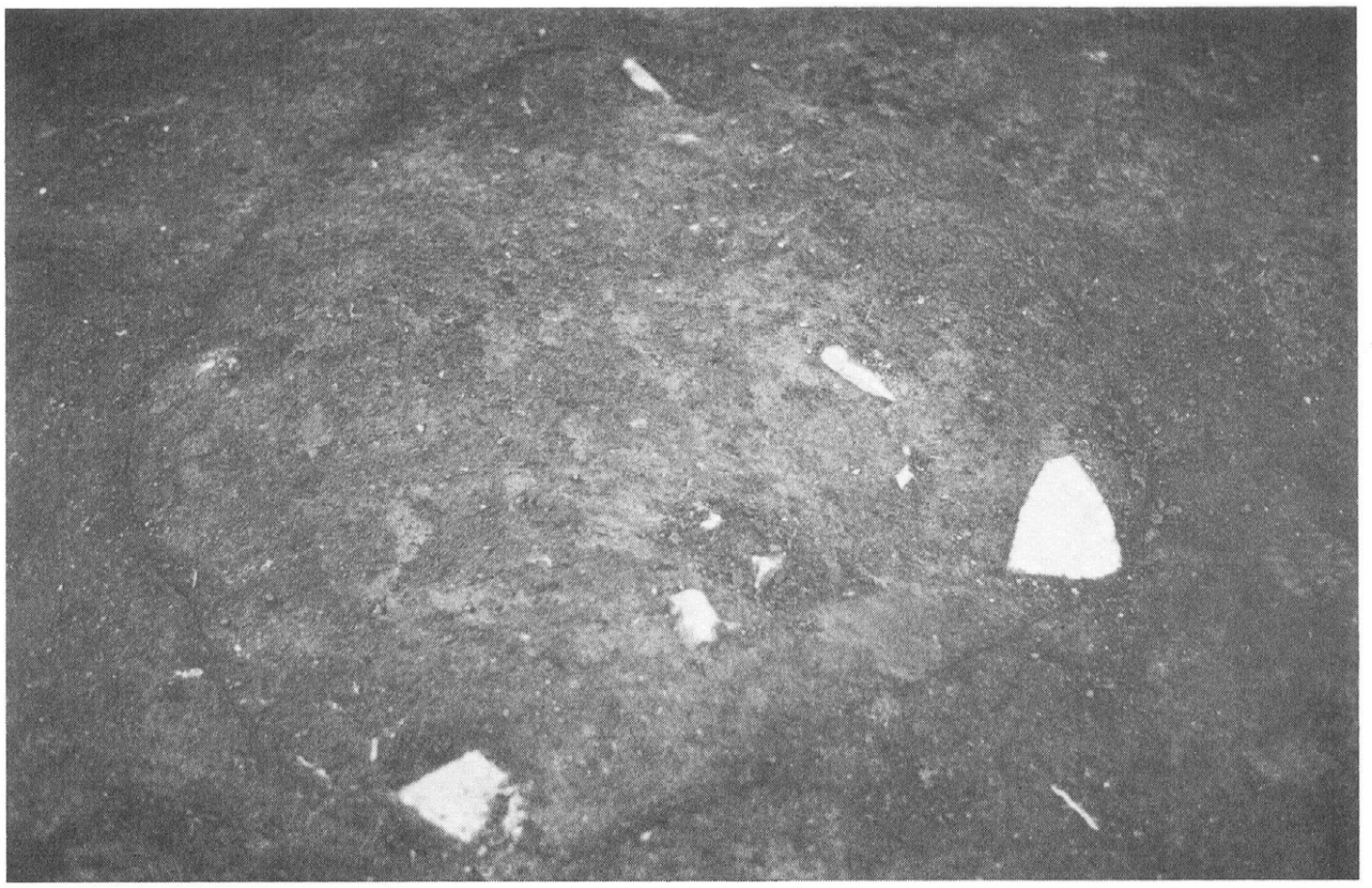


1区

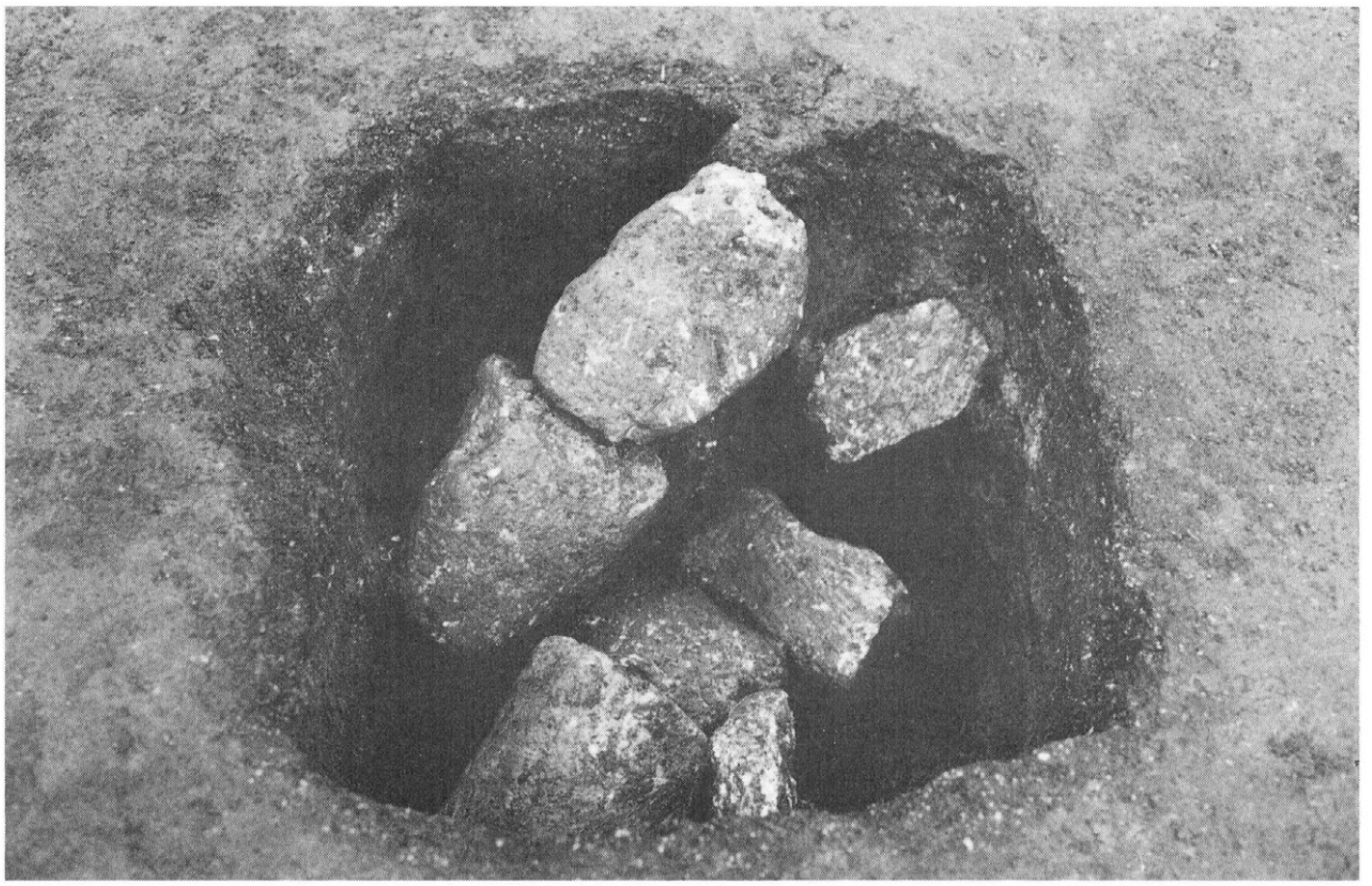




柱穴出土状況



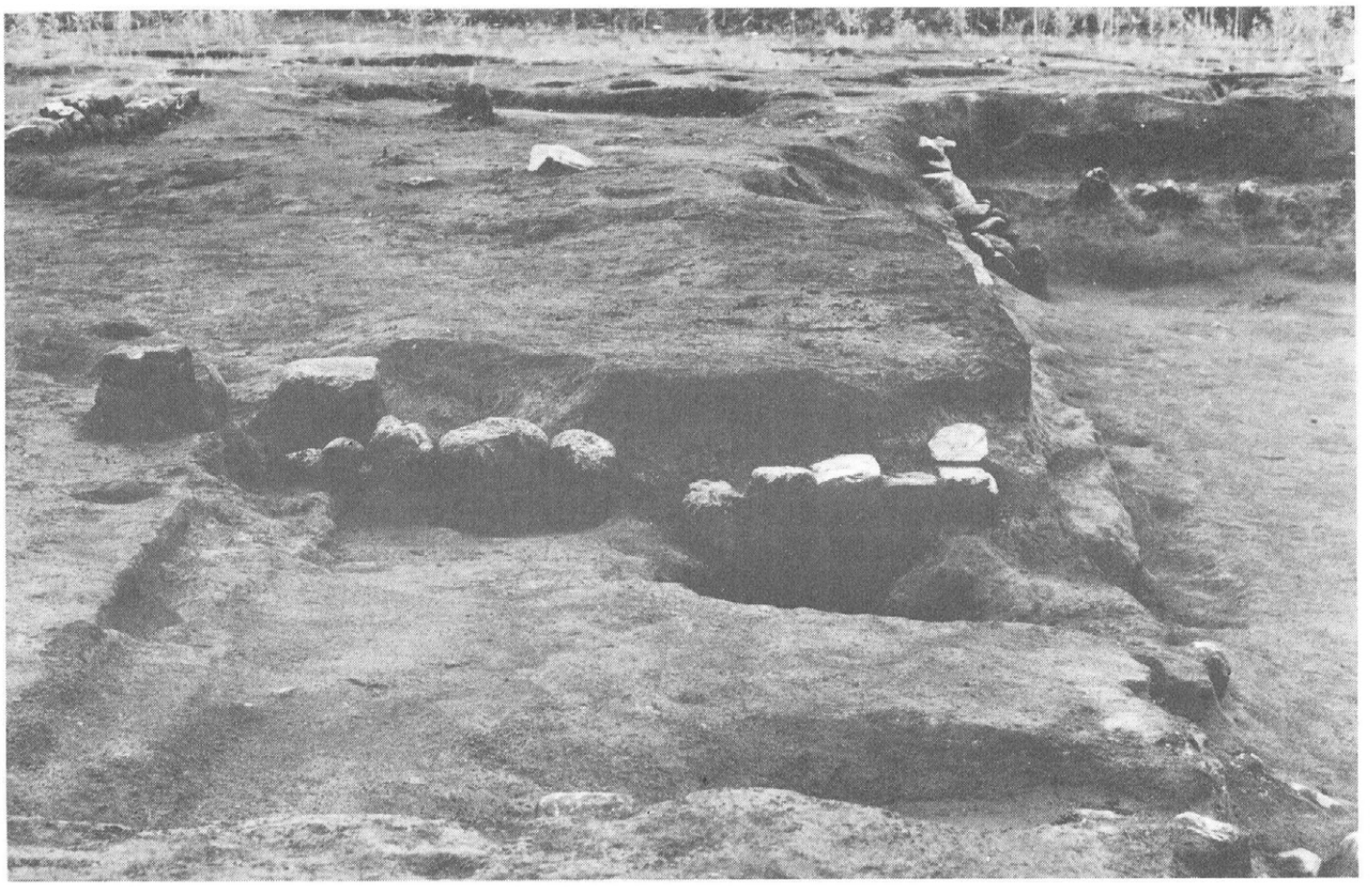
1号土壙検出状況



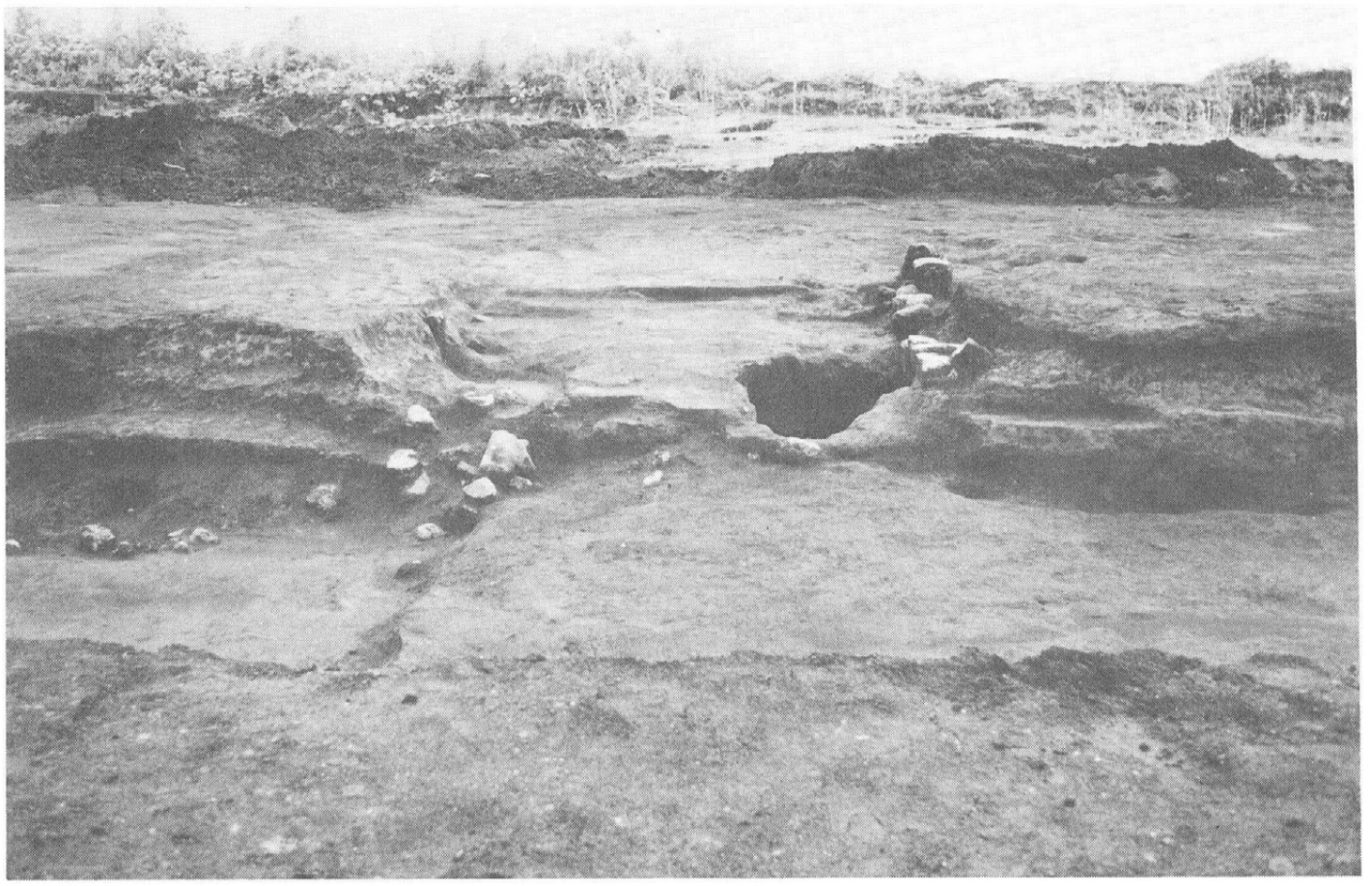
7号土坑検出状況

図版4

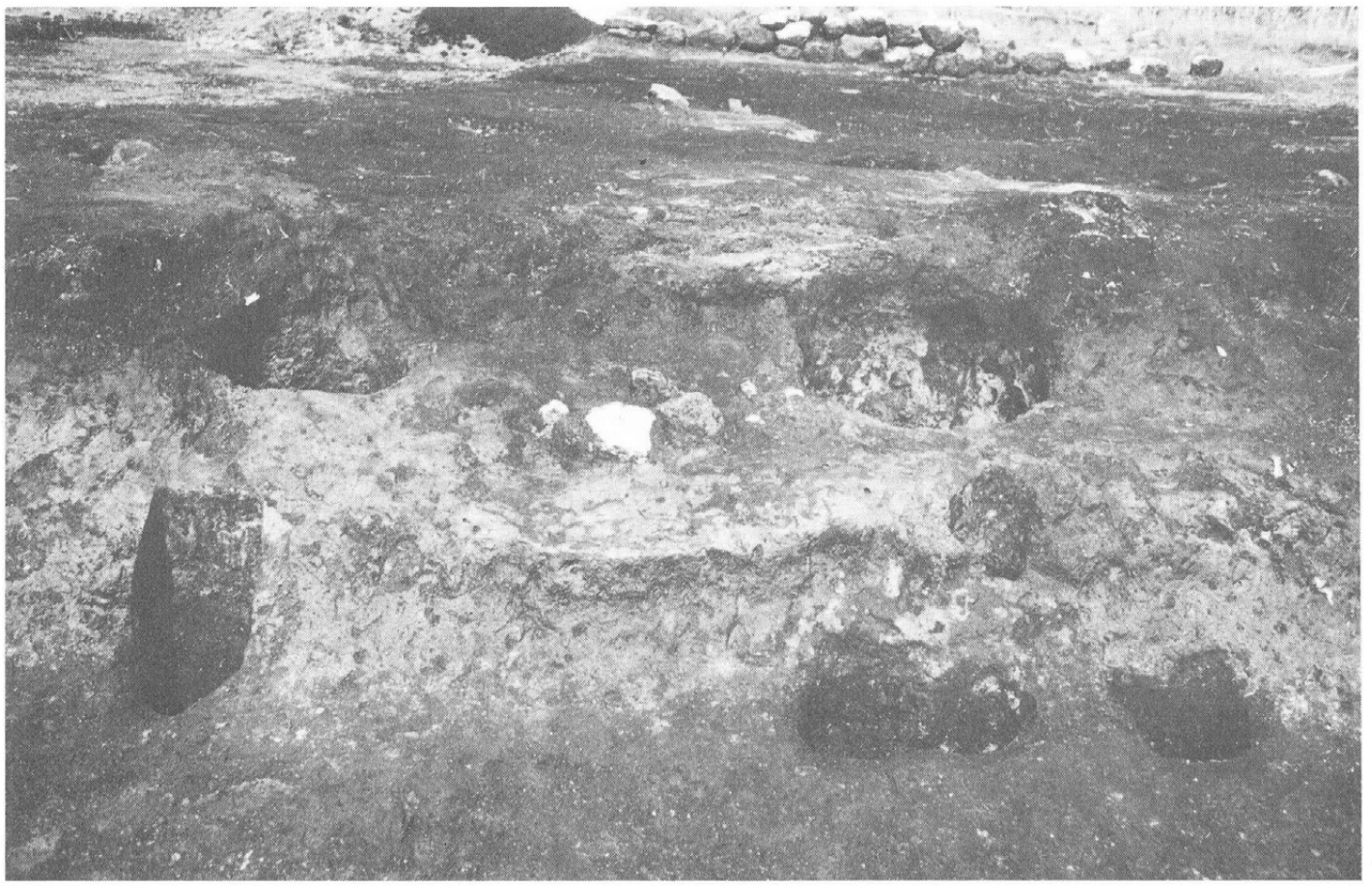
通路検出状況（北より）



正門跡（北より）

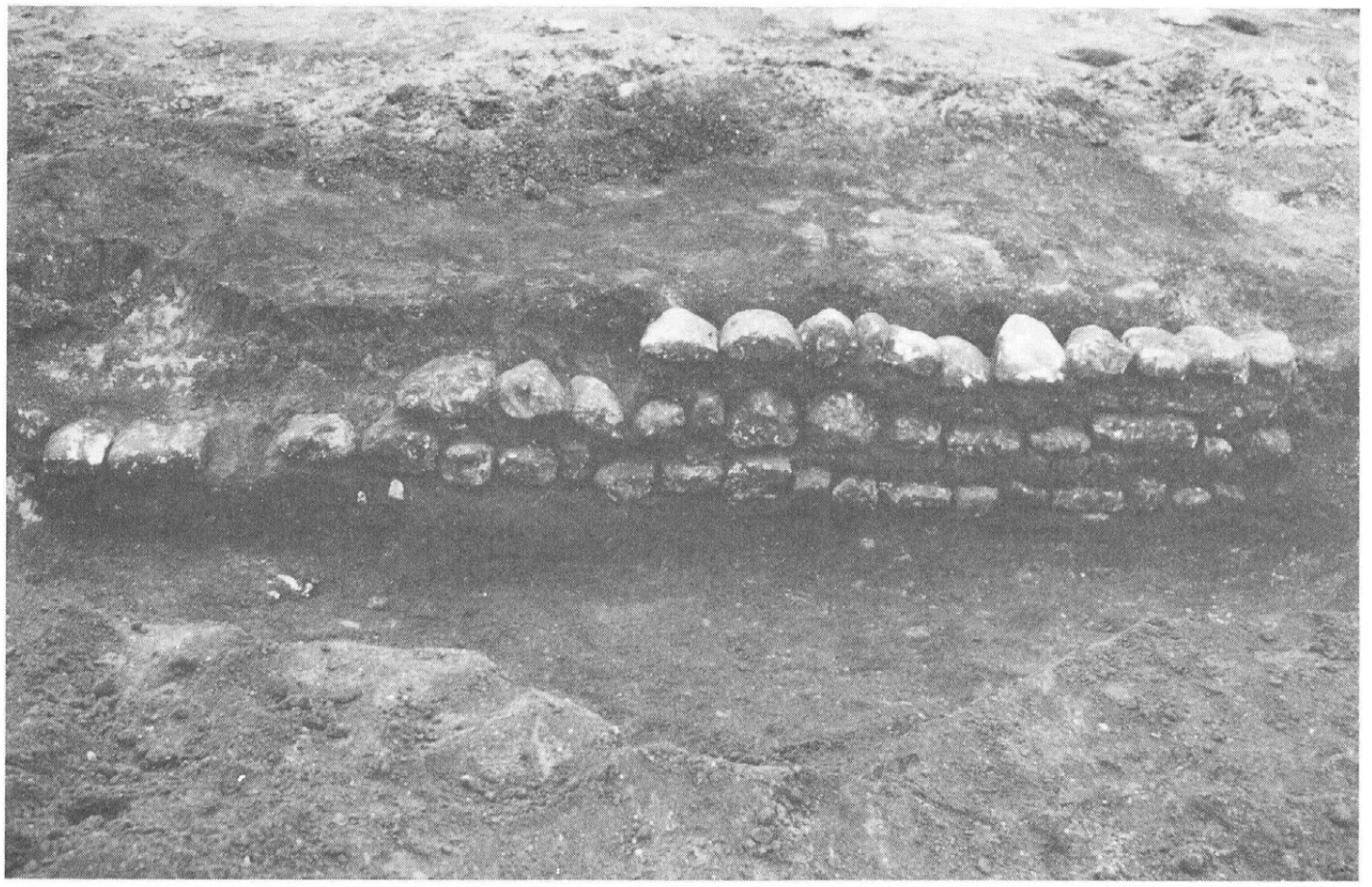


正門跡（西より）

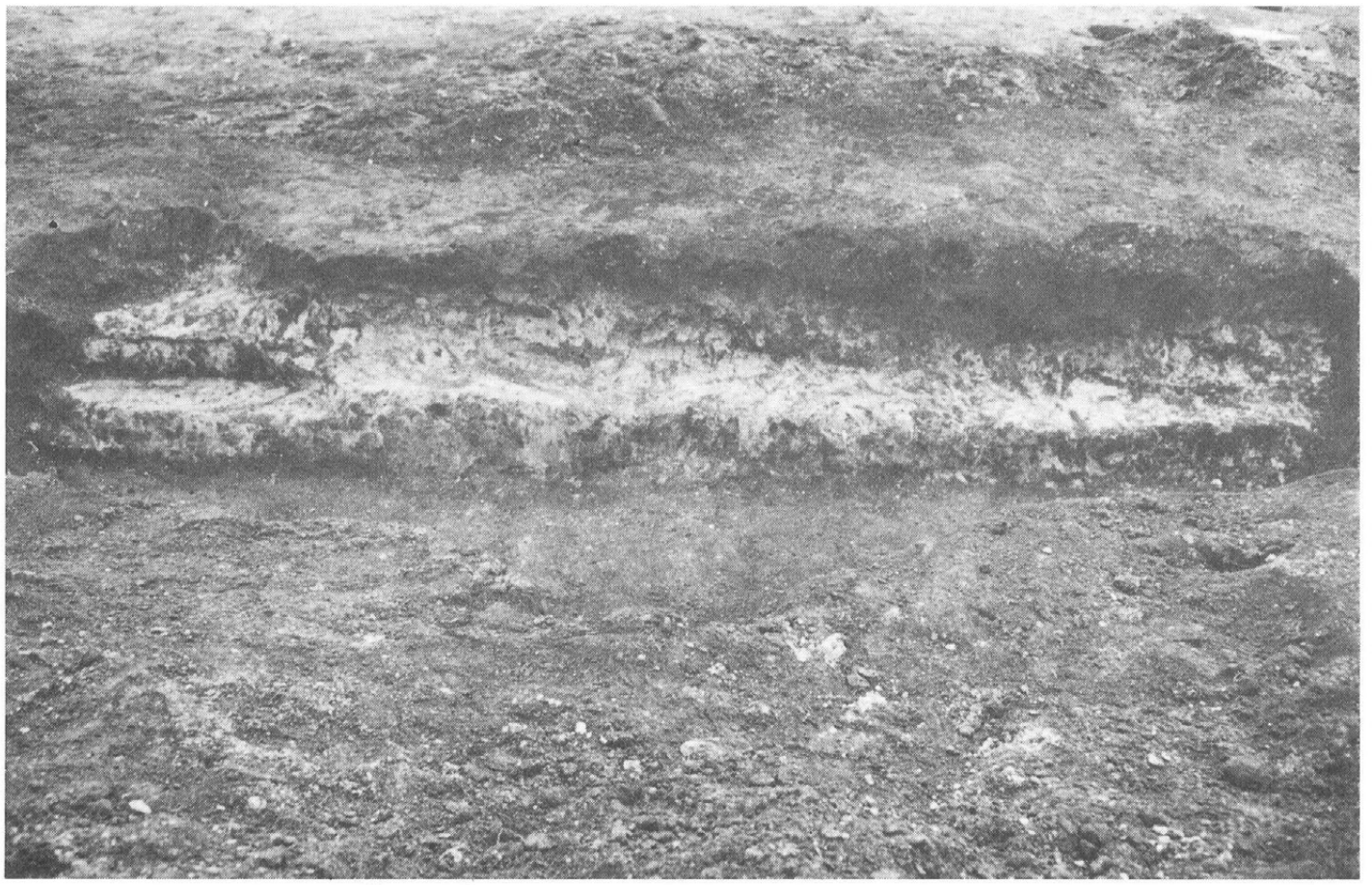


通用門跡（西より）

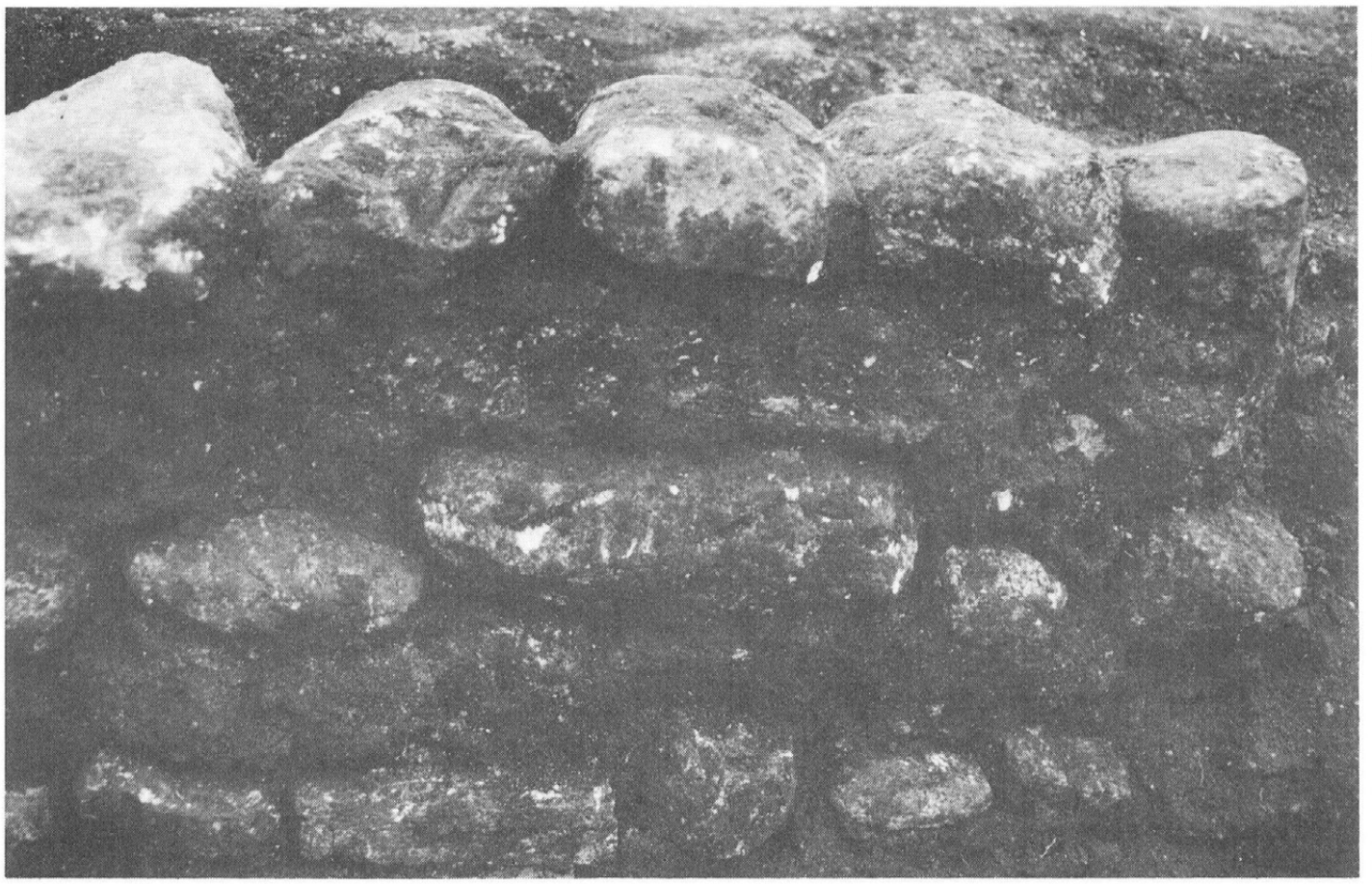
図版6



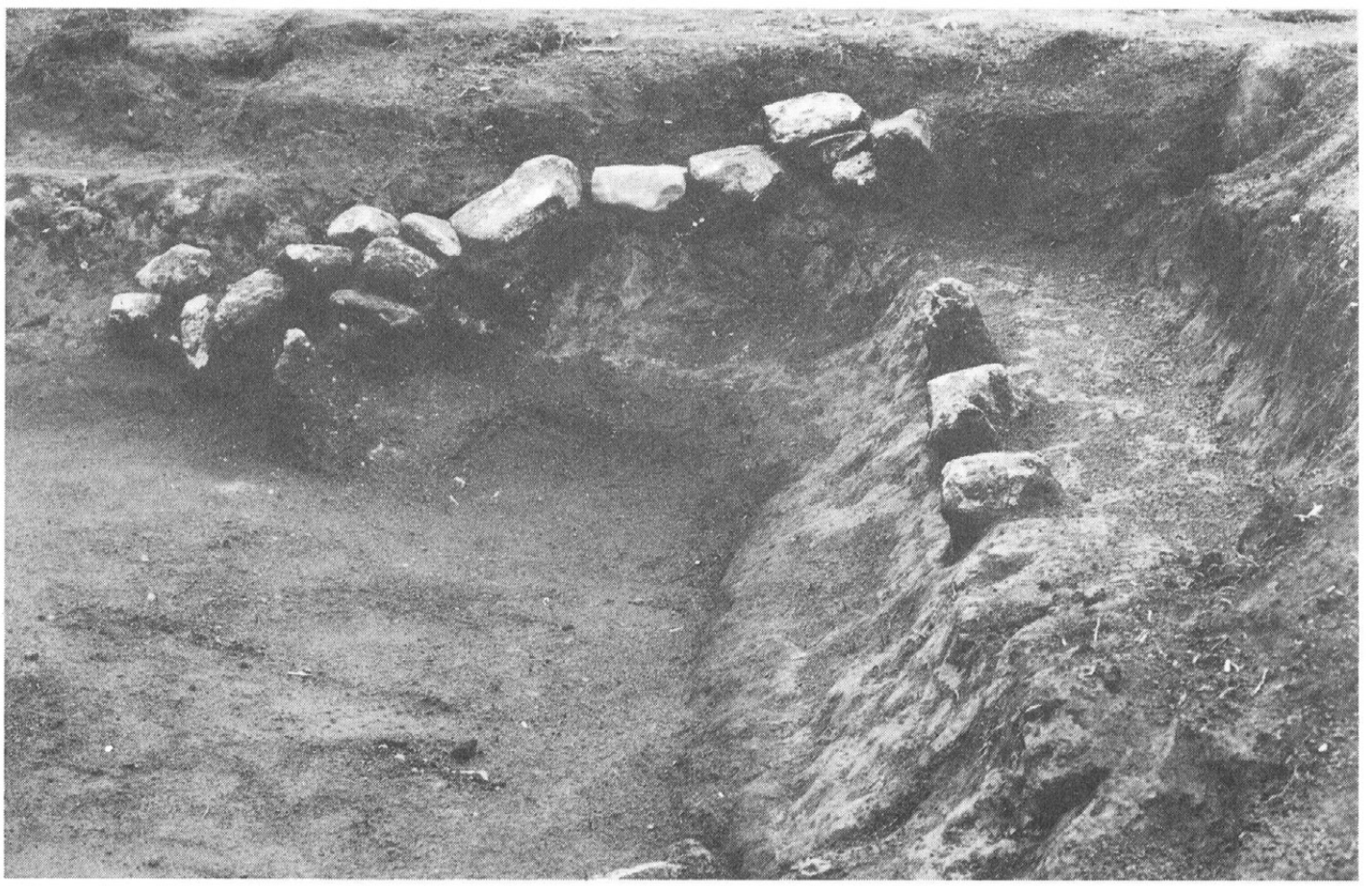
石垣列



石排除後

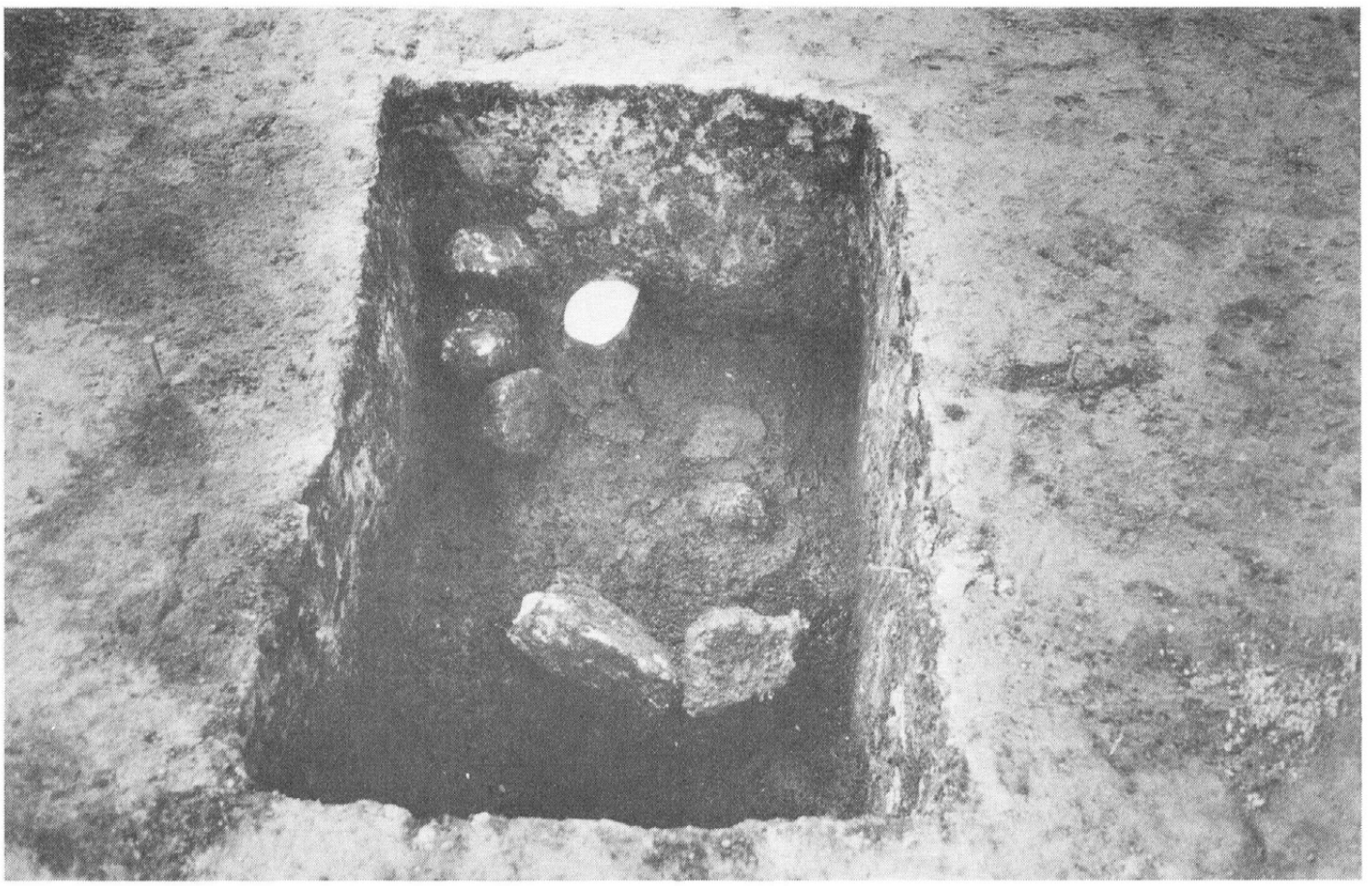


石垣拡大図

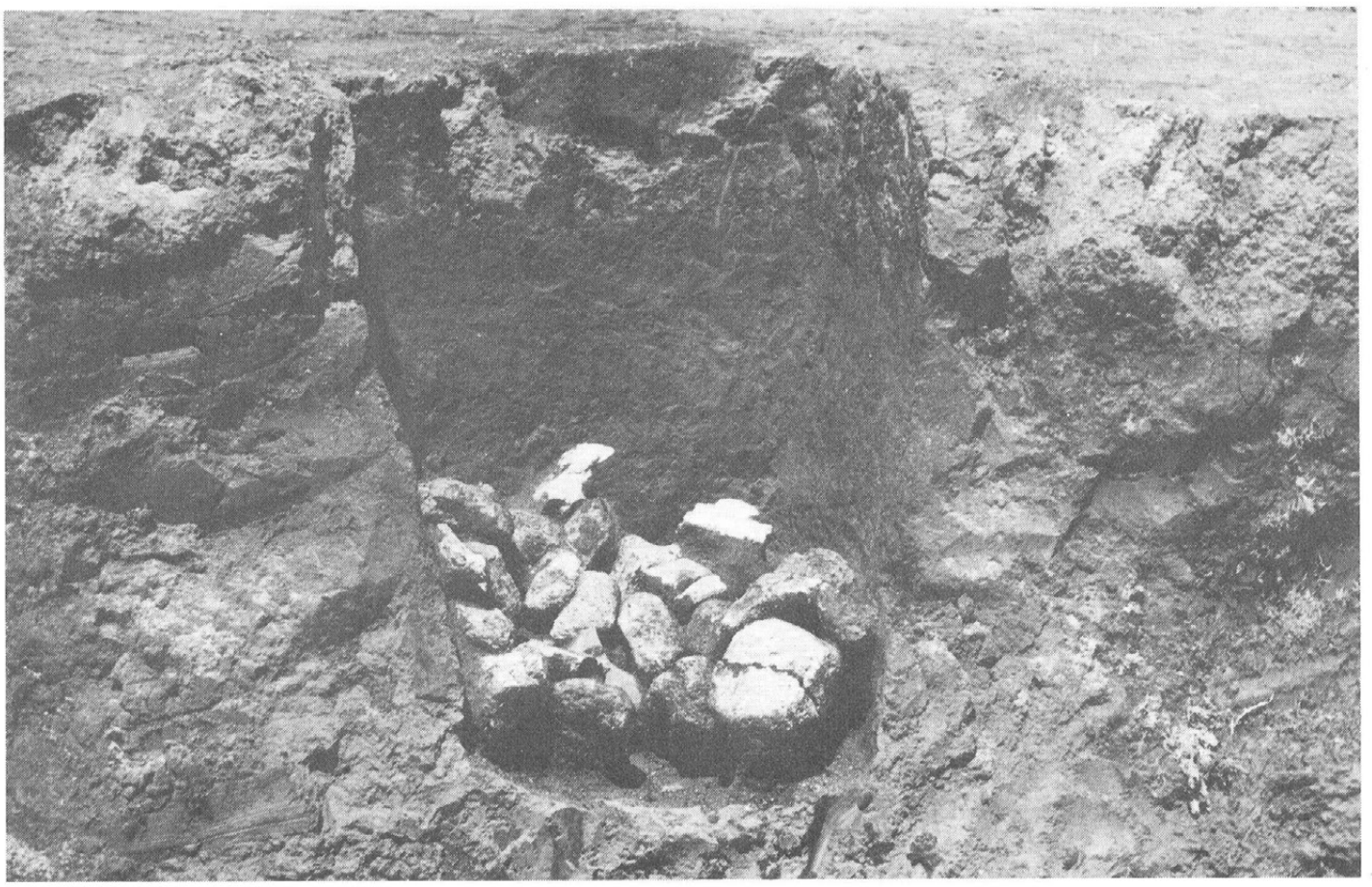


石垣列

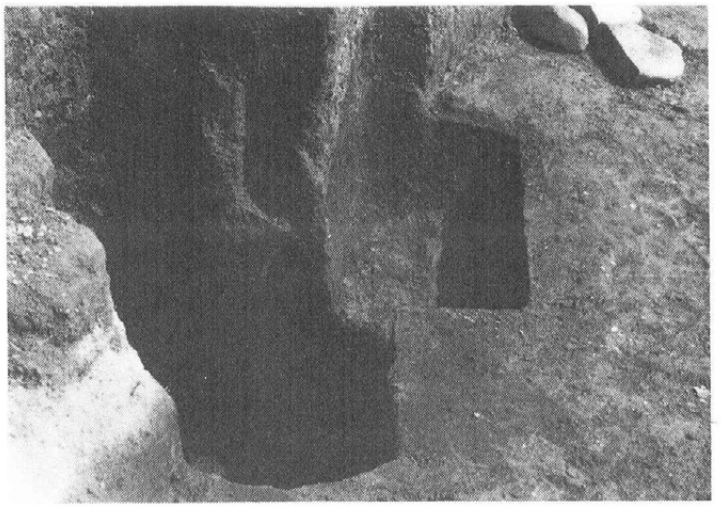
図版8



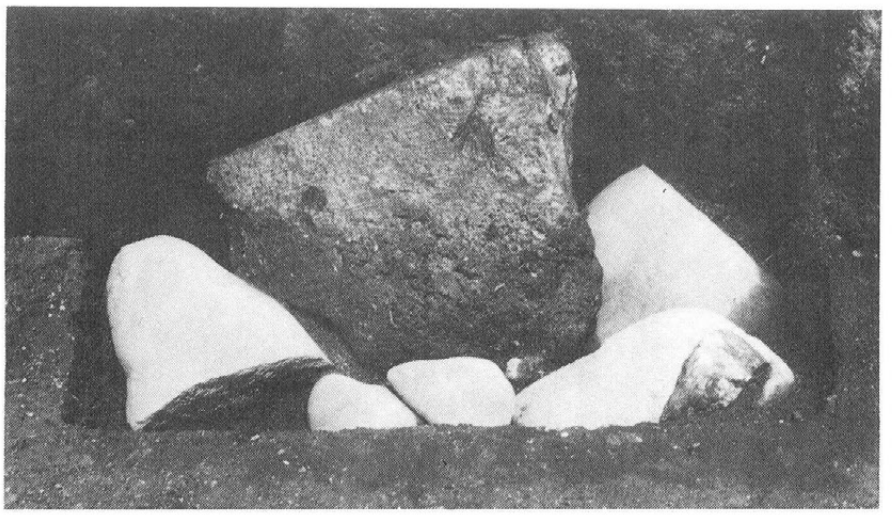
9号土壙出土状況



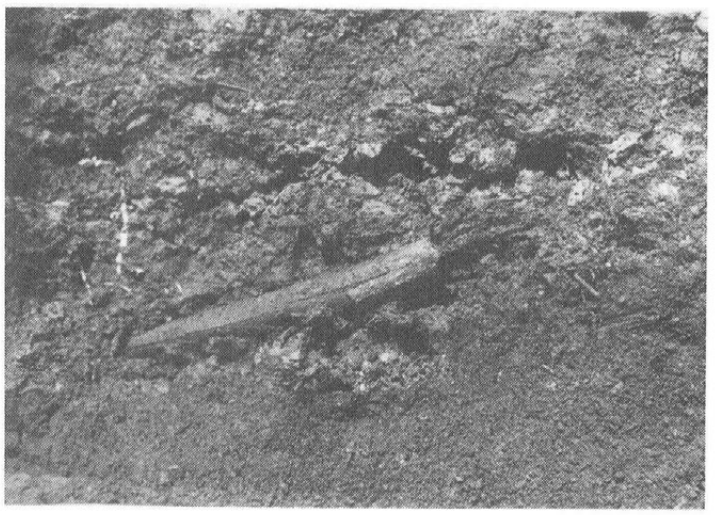
堅穴状遺構出土状況



井戸状遺構及び10号土壙

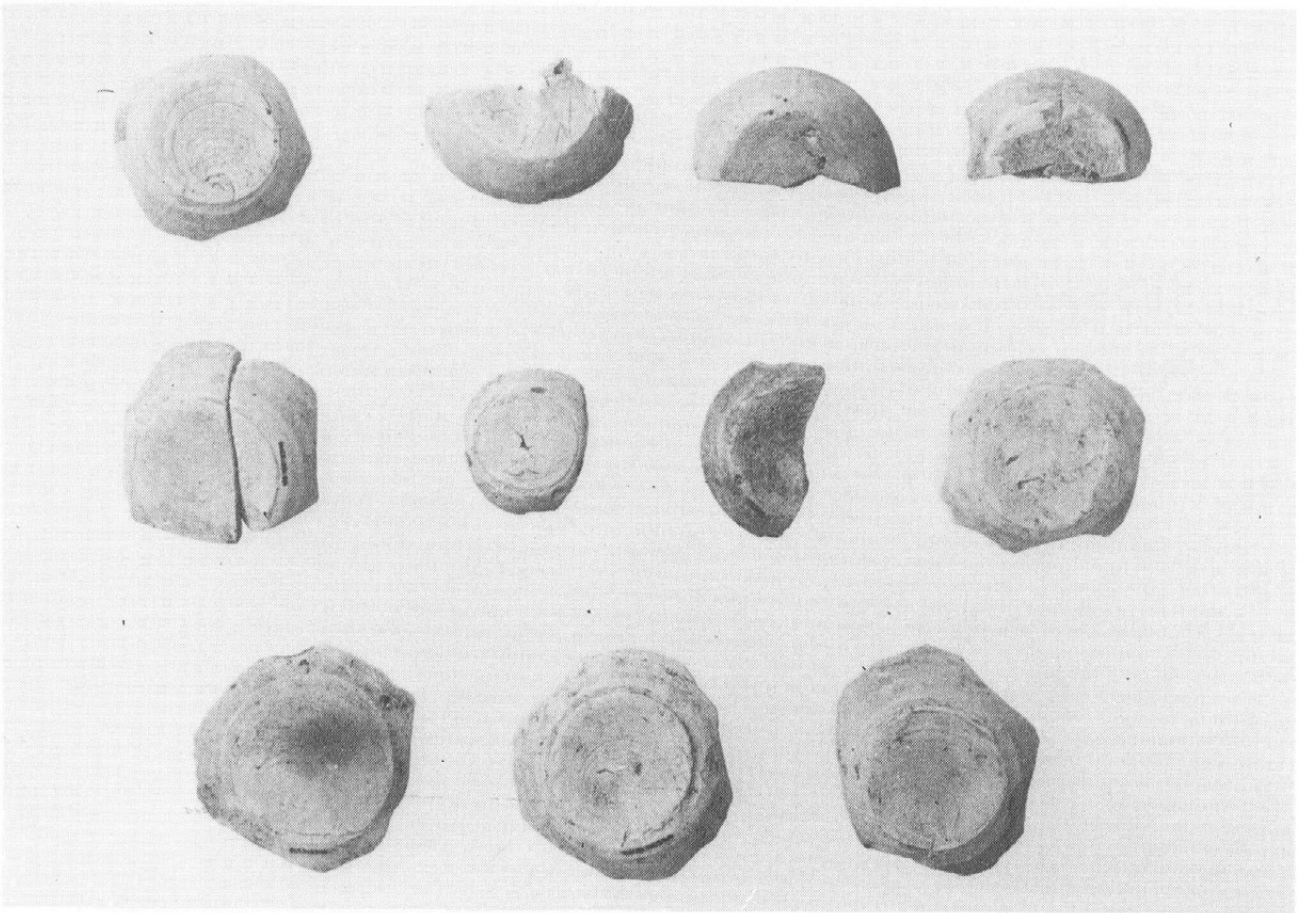


10号土壙出土状況

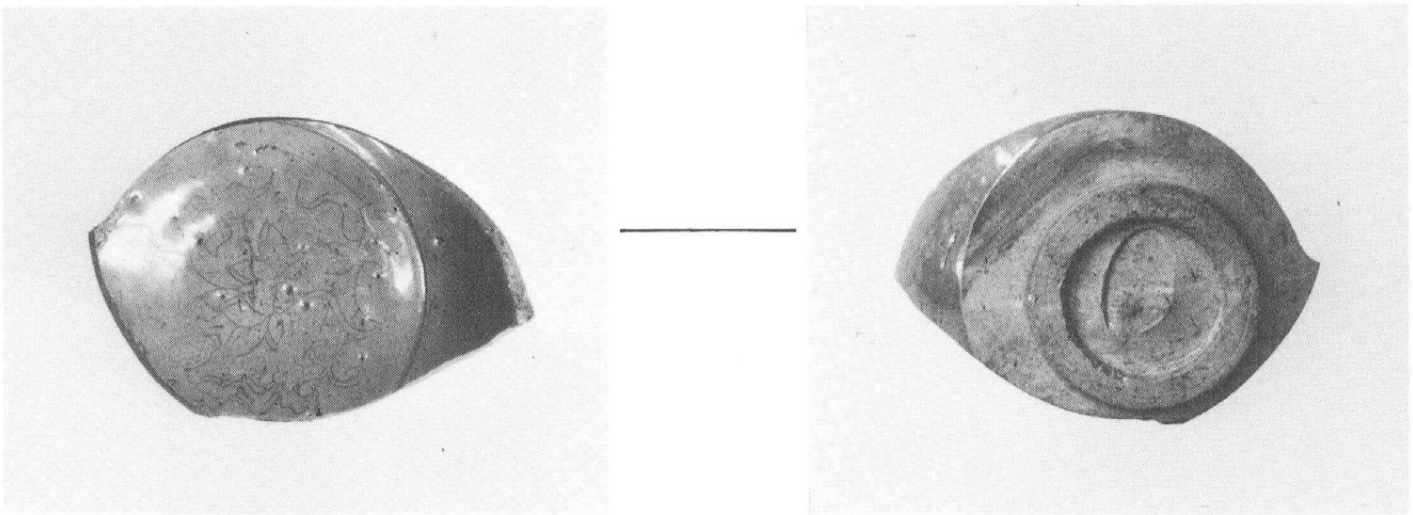


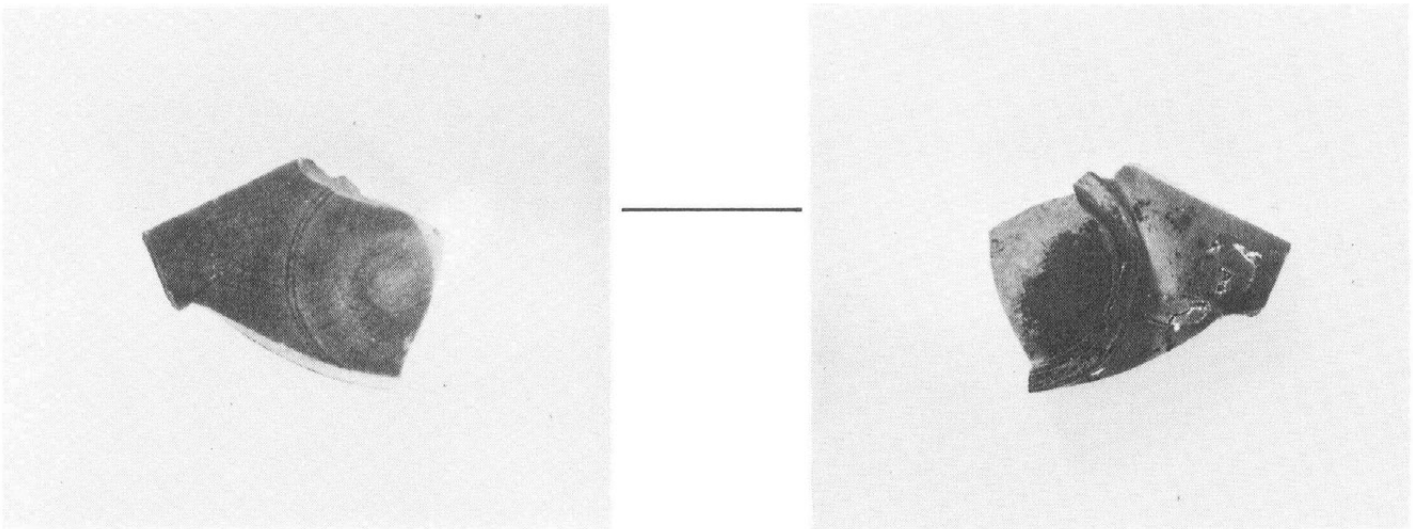
井戸状遺構遺物出土状況（左　青磁碗　右　竹組）

図版10



土師器

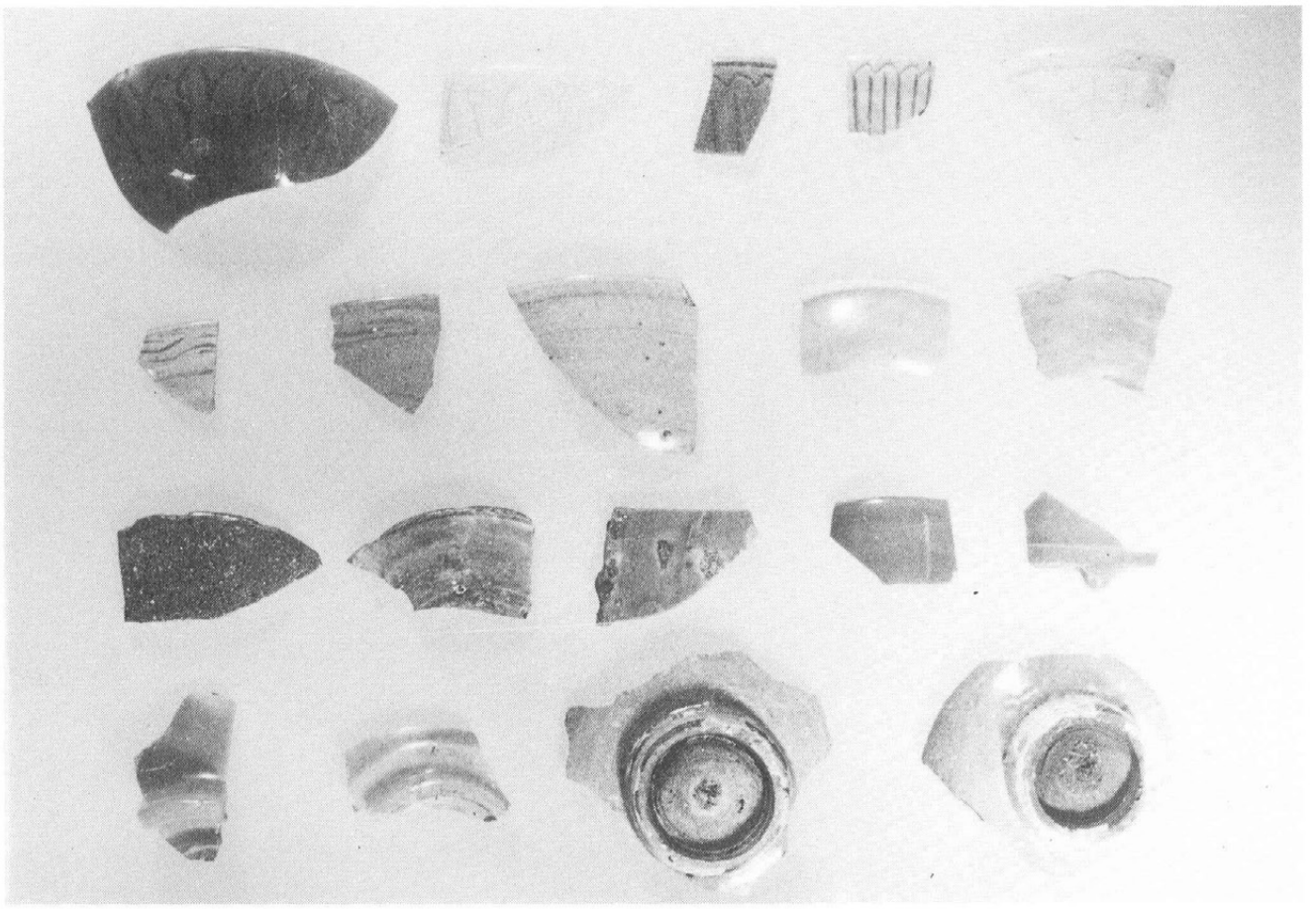




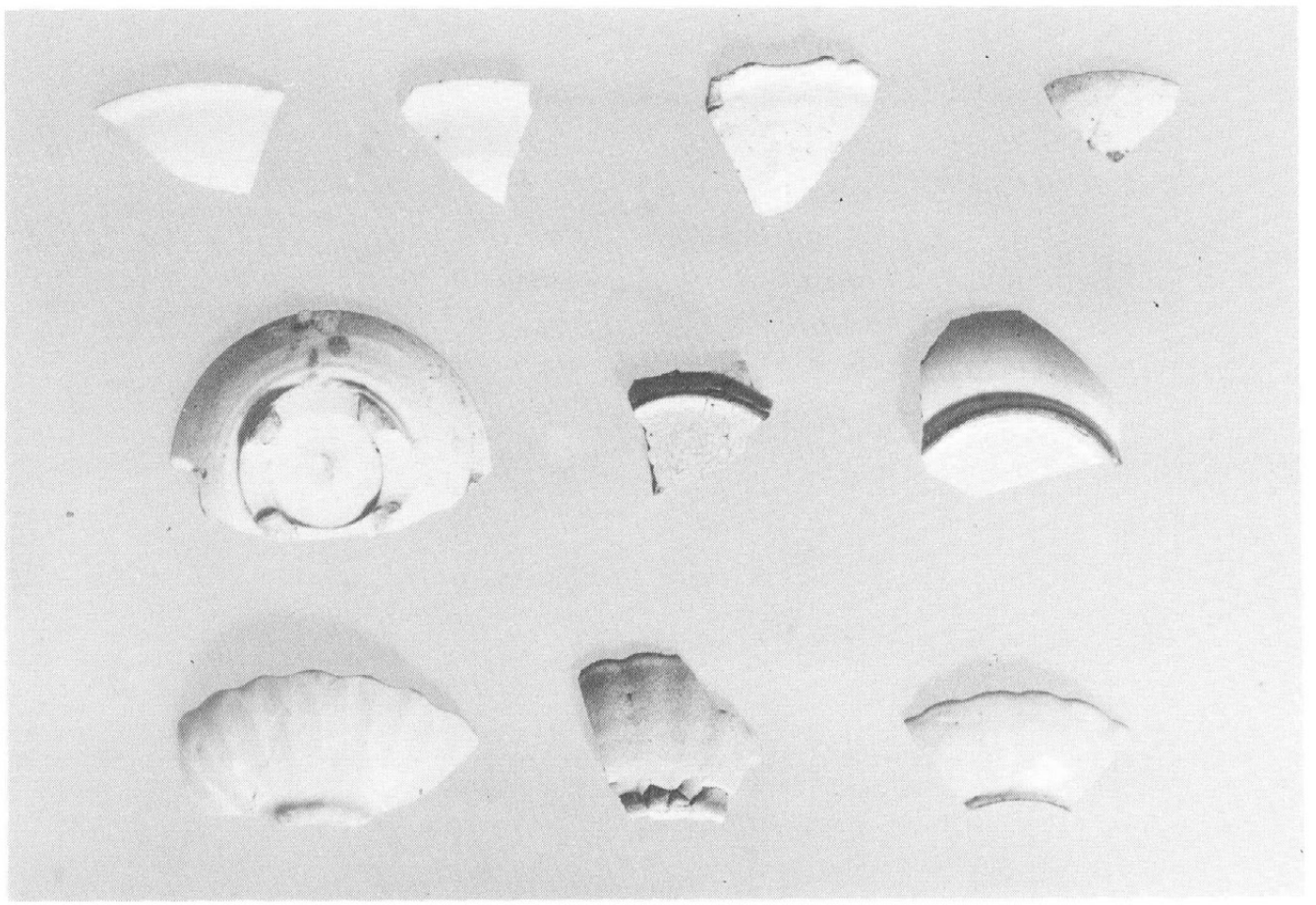
9号土壙出土遺物（上　白磁皿　下　青磁盤）

井戸状遺構出土　青磁碗

図版12

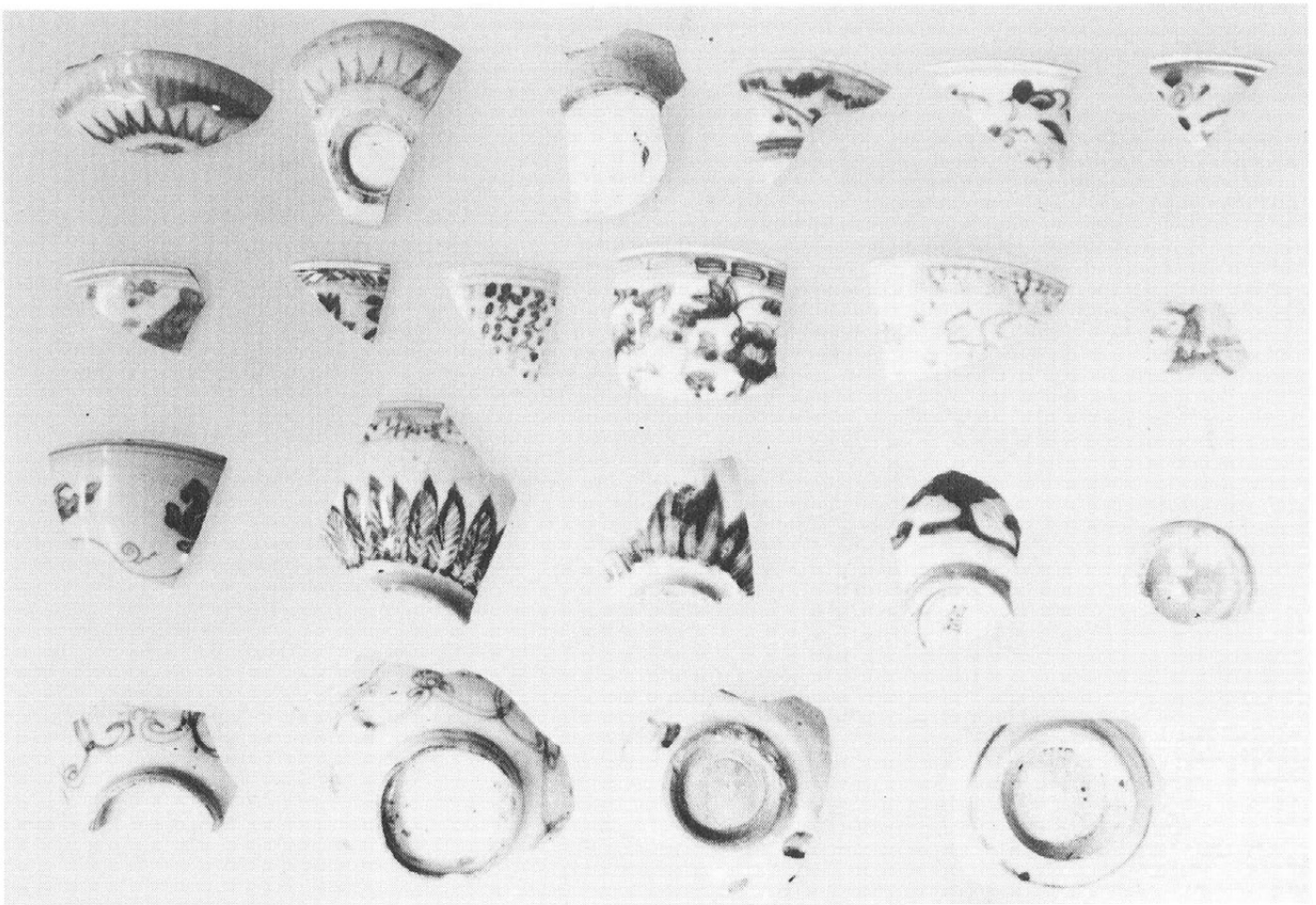


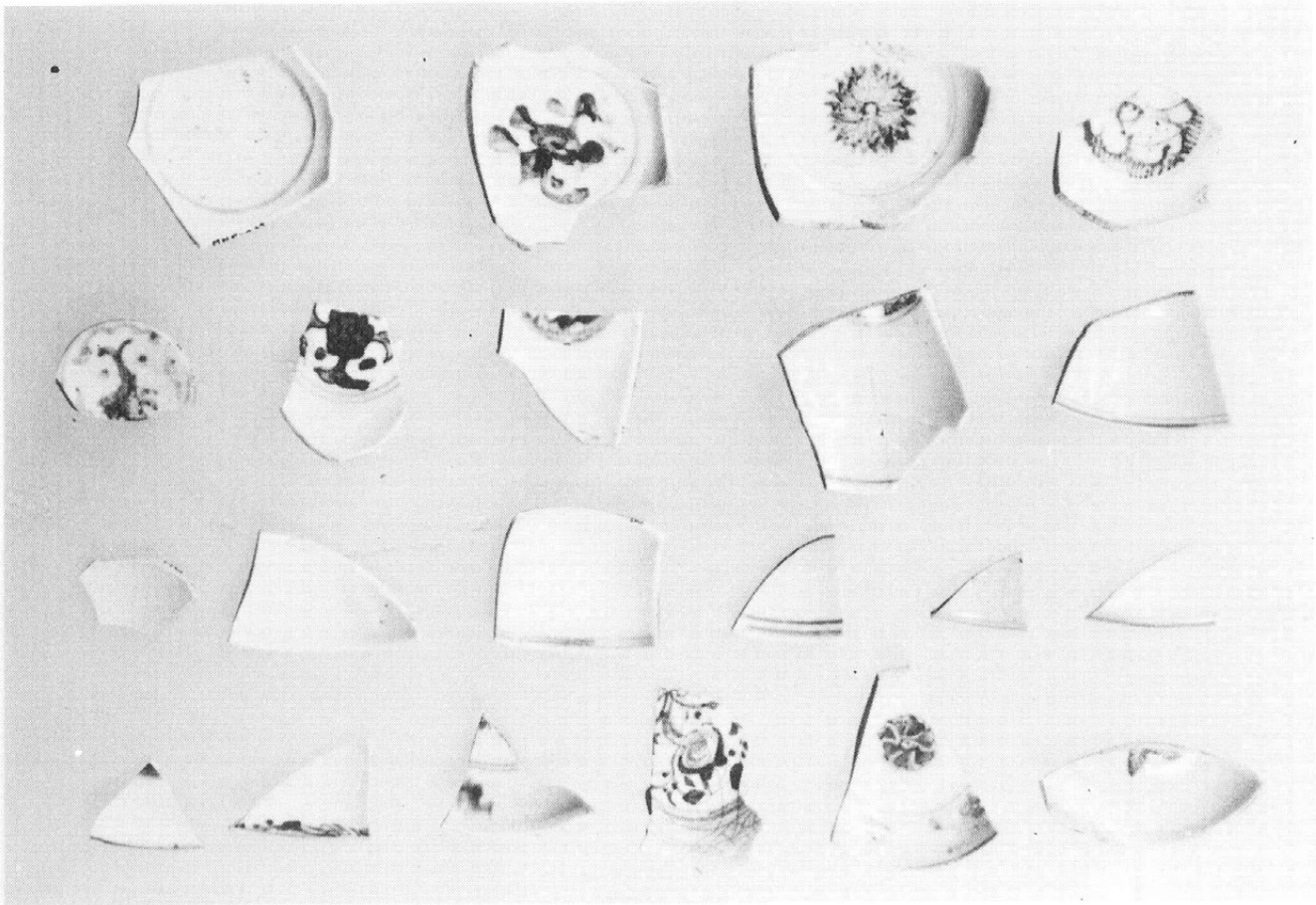
青磁



白磁・青白磁

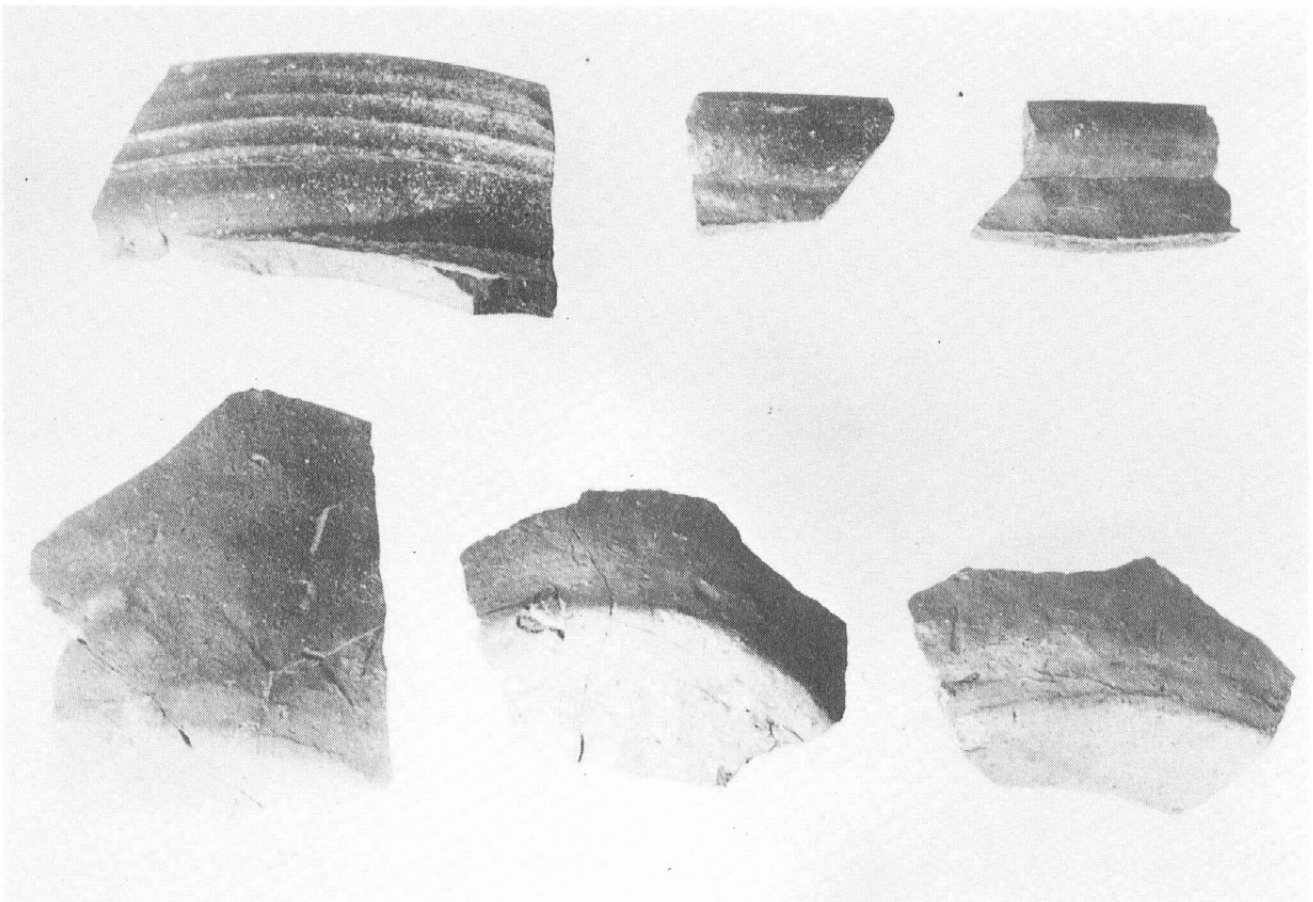
図版13





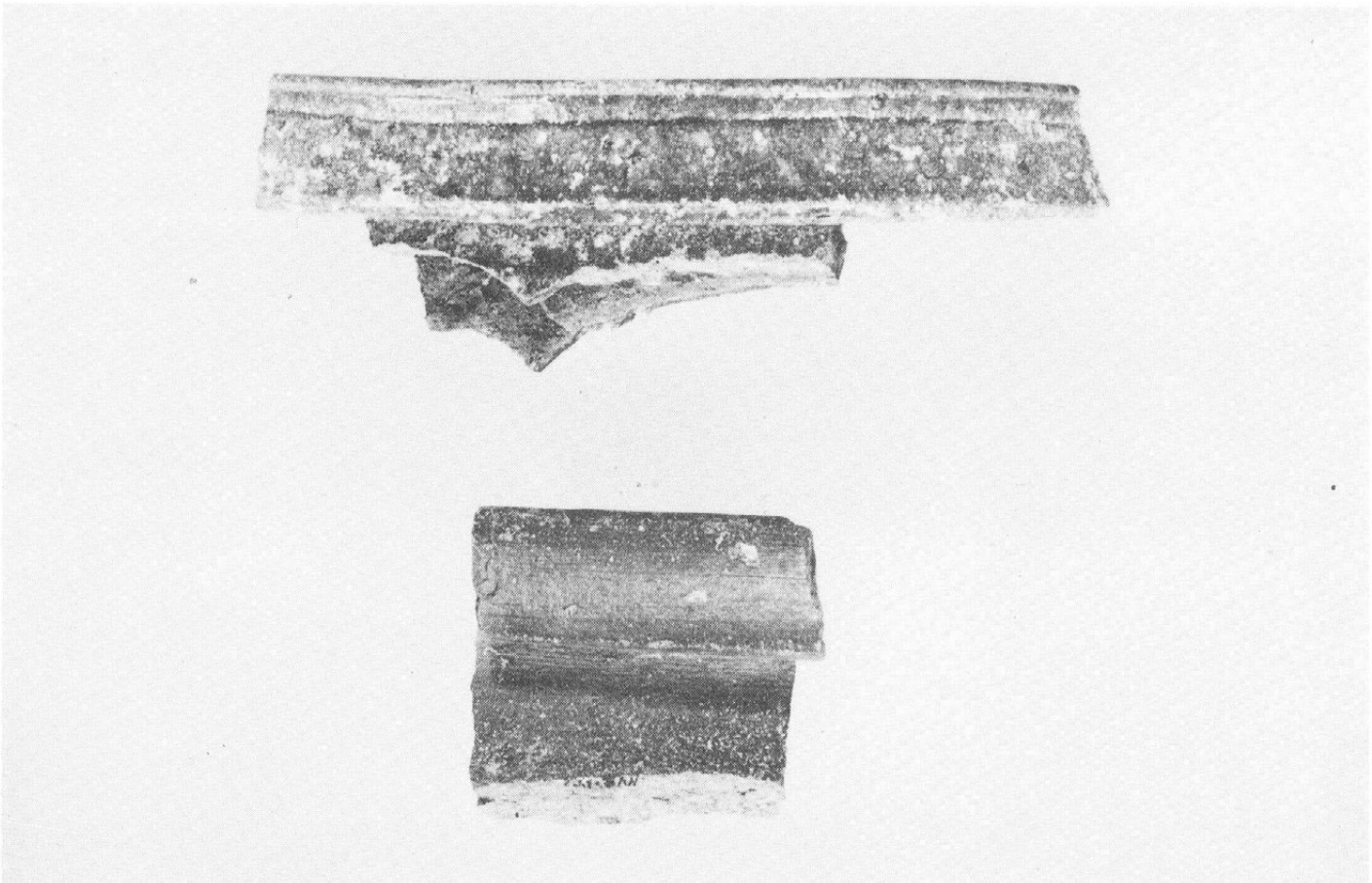
染　付

図版14

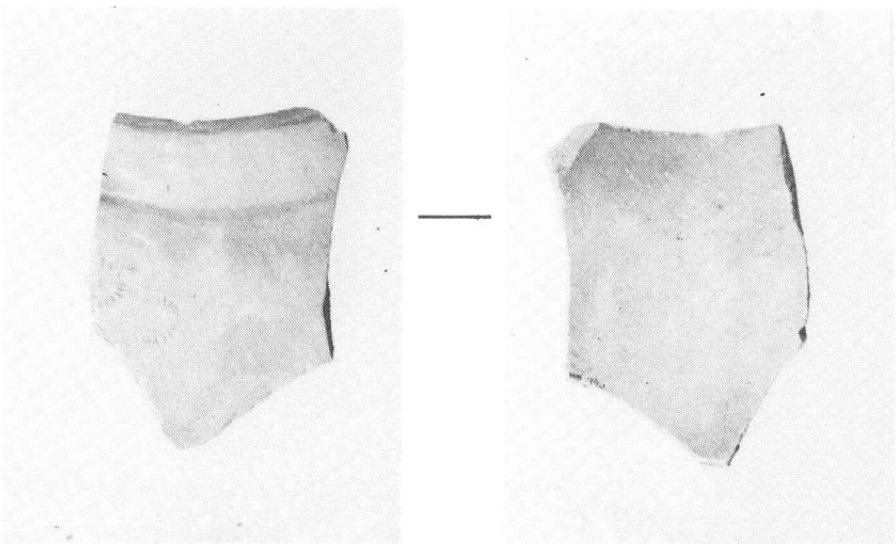


陶　器（備前焼）

陶　器（備前焼）



常滑焼



陶　器

# 都城市菓子野（かしの）地下式横穴調査報告

# 都城市菓子野地下式横穴調査報告

石　川　恒太郎

都城市菓子野は、同市庄内の東方約２キロの所で、この地方一帯には地下式横穴墳の多いところであるが、昭和５７年に庄内町から東方に伸びる道路の改修中に地下式横穴が発見されたもので、この道路は国鉄吉都線の谷頭駅と日向庄内駅との中間を庄内町から東に走るもので、菓子野小学校の南を通り、吉都線鉄道とは縦断する形になるが、道路の南方には大淀川の支流川内川が西から東に流れており、道路と平行する川内川との間は畑地と田圃で、この低平な土地に地下式横穴が群在するわけである。

ここに第１号として記した地下式横穴は、今回最初に発見されたもので、道路の下に古墳の羨道を閉塞していた石積の一部が発見されたので、写真１に見られるごとく、上部が道路となっているため、その全体を見ることはできないが、だいたい道路から考えて、高さ７０㎝ぐらいあったものと計られた。

羨道と玄室内は、天井が破壊されているので確実に知ることはできなかったが、発掘した結果は第１図に見られる通りで、玄室と羨道が続いている羽子板状であるが、このような形式の地下式横穴は、この種の古墳としては、古墳時代の末期的な古墳である。羨道と玄室との全長は１ｍ５０㎝で、この内訳は玄室の長さが１ｍで、羨道の長さが５０㎝であると考えられる。玄室の広さは、奥が広くて、入口が狭い形で、奥室の幅９０㎝、入口で５０㎝で、奥行の長さ約１ｍと思われる。そして玄室の方位は南北より１０度東に傾いているのである。

玄室内には第１図に見られるごとく、３体の人骨が頭を東、足を西にして伸展葬されていたが、直接ではないが幾らかの厚さの砂の上からブルドーザーで圧せられていたので、壊れている部分が多かった、目下長崎大学の医学部解剖学教室に調査を依頼しているが、玄室内に存在した状態は実測図（第１図）に示す通りである。

遺物は、玄室の北壁に接して図に見られる如く、第１号遺骨と壁との間に剣１振が、柄部を東に、鋒を西にして存在した（No.４）。またこの剣と北壁との間に　３本（No.５、６、７）が切先を東に向けて存在した。さらにその遺骨の南側に１体の人骨（第２号）がこれと平行して存在したが、この第２号遺骨の頭蓋骨の東側に、剣１振が、柄部を東北に、鋒を西南にして在り、その鋒に接して、その西方に、第１図に見る如く、足の骨が存在した。さらに、その南側に第３号の頭蓋骨があり、その西南に鉄鏃２本が、何れも切先を東に向けて存在し

た。

次にこれらの副葬品を見るに、北壁に接して存在した剣（No.４）は全長６２.１糎で、柄の長さ１５.９㎝、身長４６.２糎であった。身幅は３㎝、厚さ６㎜と計られたが、柄頭と鍔元に鹿角装が施されている。

第２号人骨の頭部に接して在った第２号剣は全長３５.７糎で、柄部の長さ１１.７糎、身長２４糎で、身の幅３㎝、厚さ６㎜と計られたが、この剣にも鍔元に鹿角装が施されている。

次にこの古墳の玄室内で発見された５本の鉄鏃は次の通りであった。

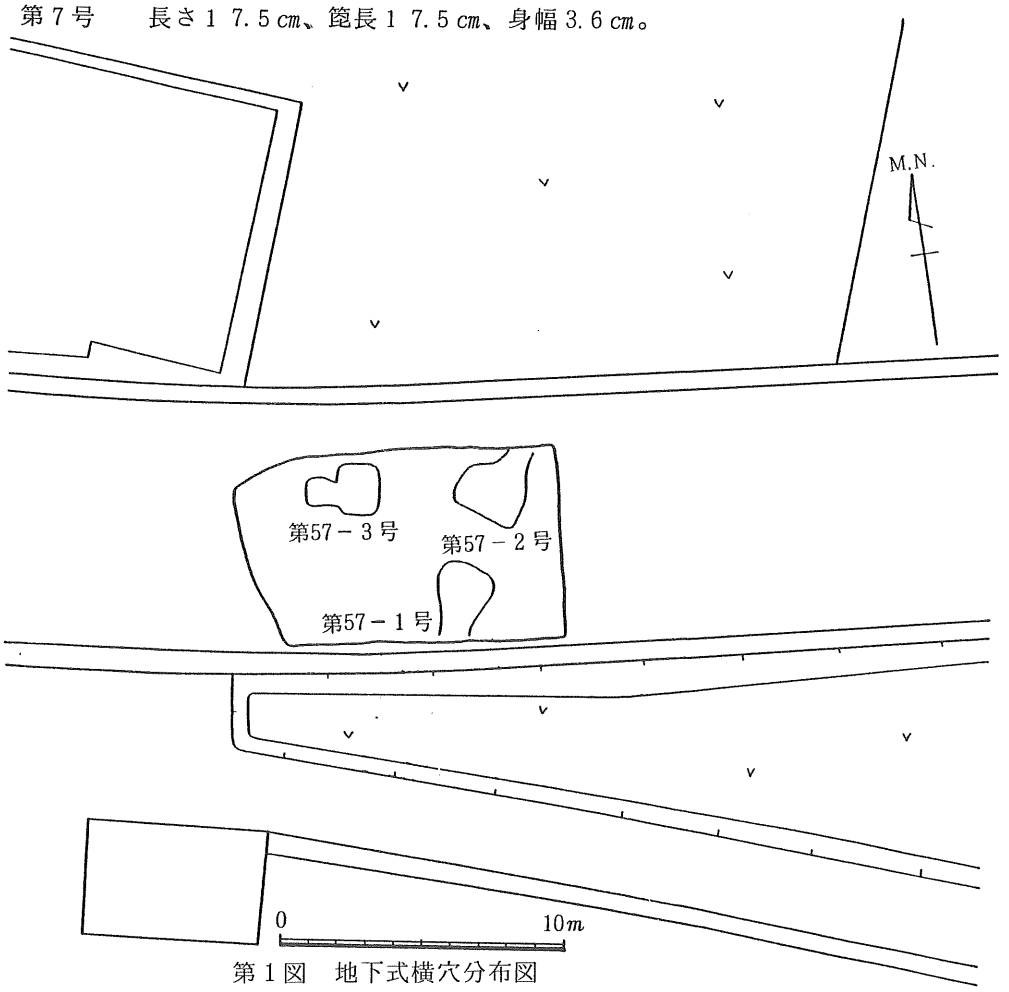
第１号　長さ１５.７㎝、箆長６.０㎝、身幅３.０㎝（最広部）

第２号　長さ１５.３㎝、箆長０.０㎝、身幅３.２㎝

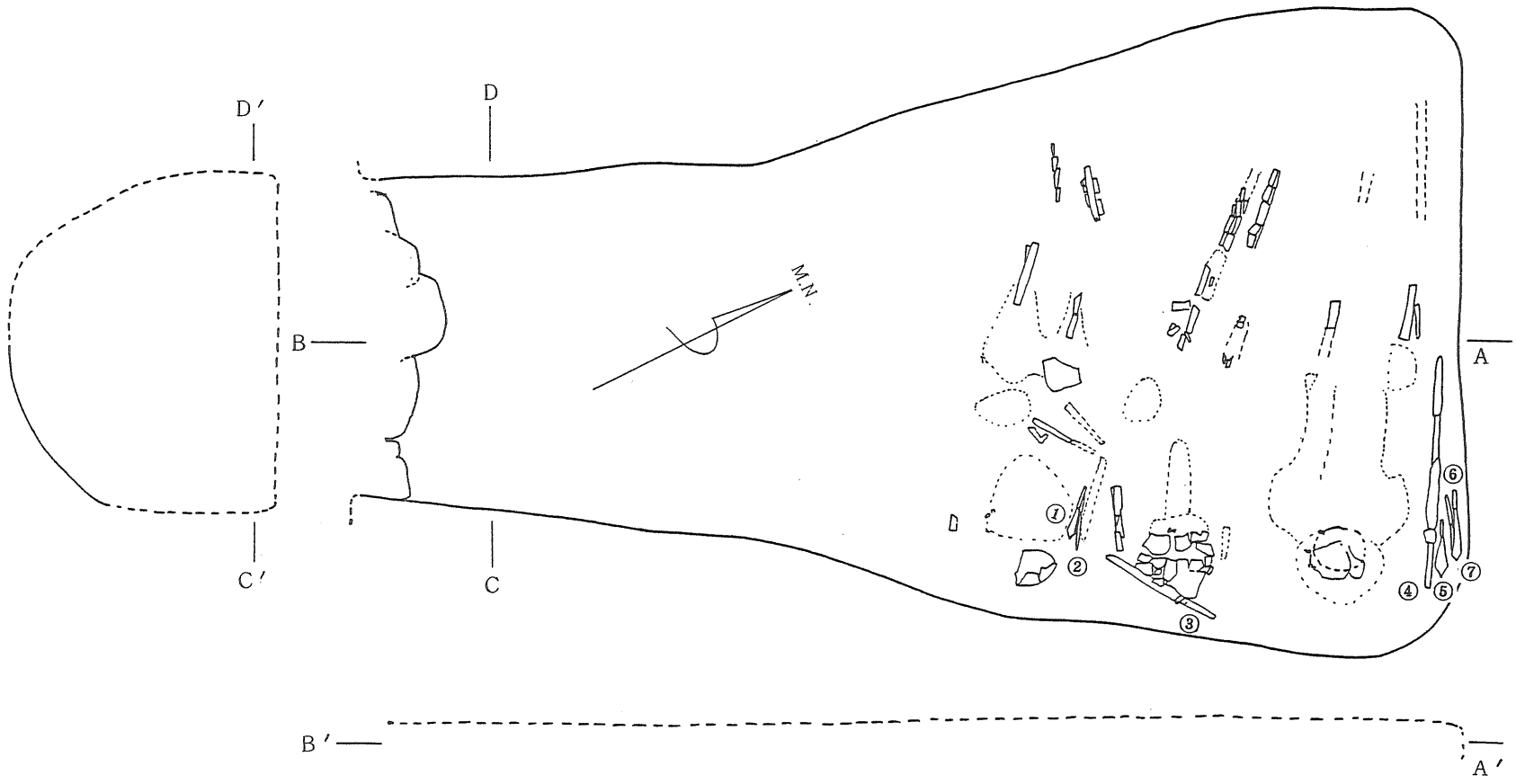
第５号　長さ１７.３㎝、箆長８.８㎝、身幅４.３㎝

第６号　長さ１８.８㎝、箆長１８.４㎝、身幅３.６㎝

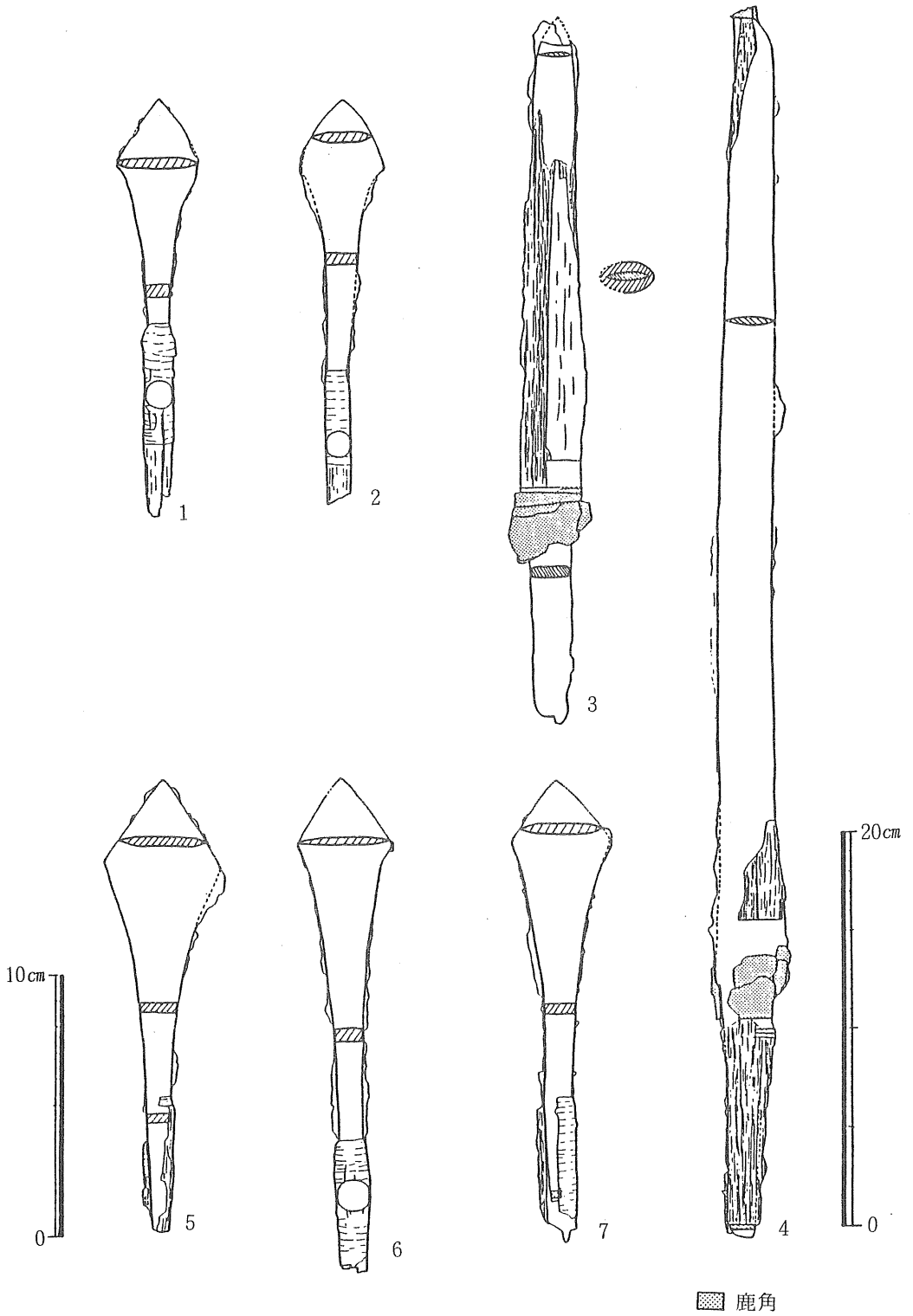
第７号　長さ１７.５㎝、箆長１７.５㎝、身幅３.６㎝。




第１図　地下式横穴分布図



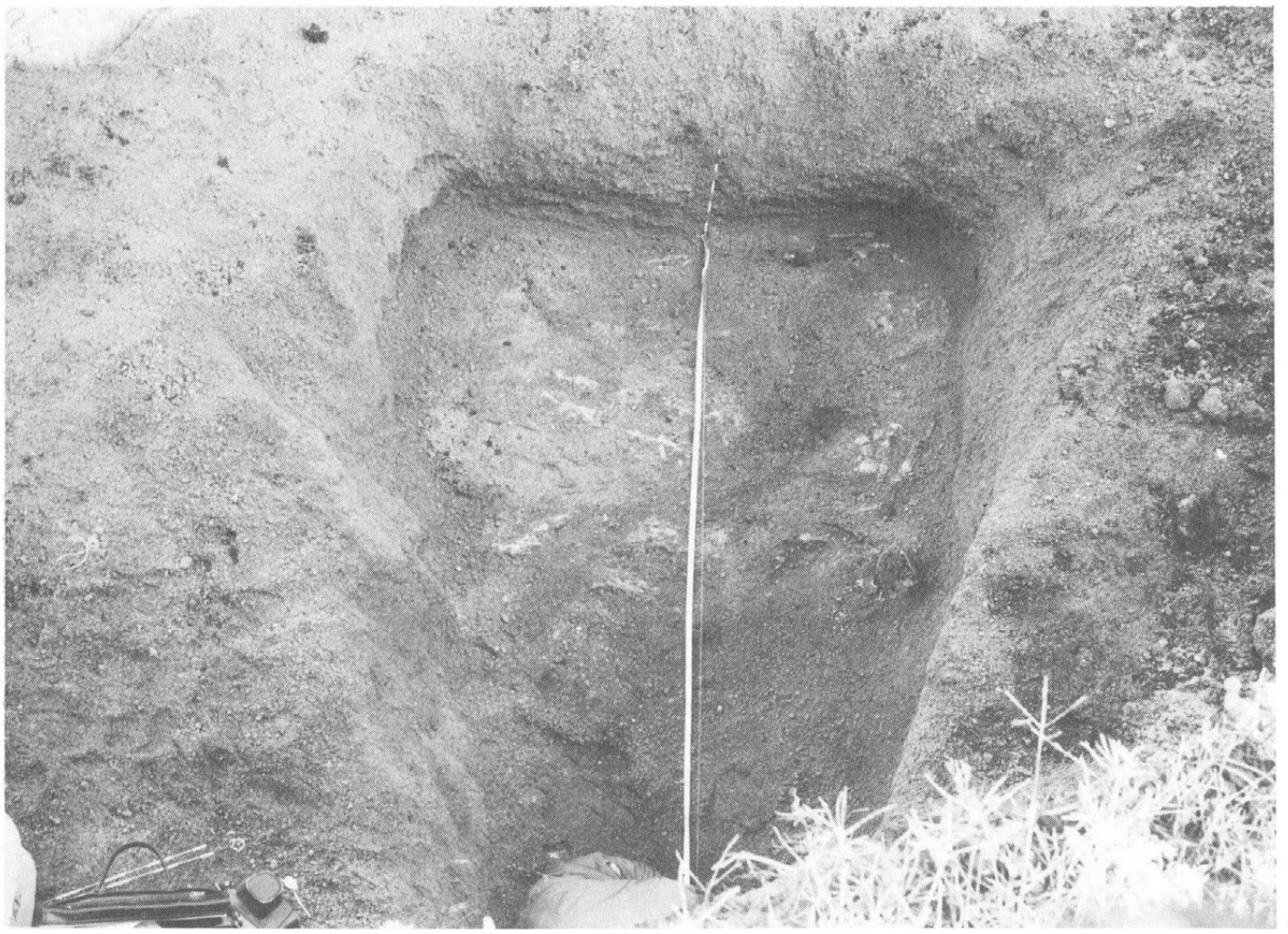

第２図　地下式横穴第57－１号実測図




第３図　地下式横穴第57－１号出土遺物（鉄鏃⅓、剣¼）

写真１　羨道入口と閉塞口の１部

写真２　玄室の奥壁と遺物



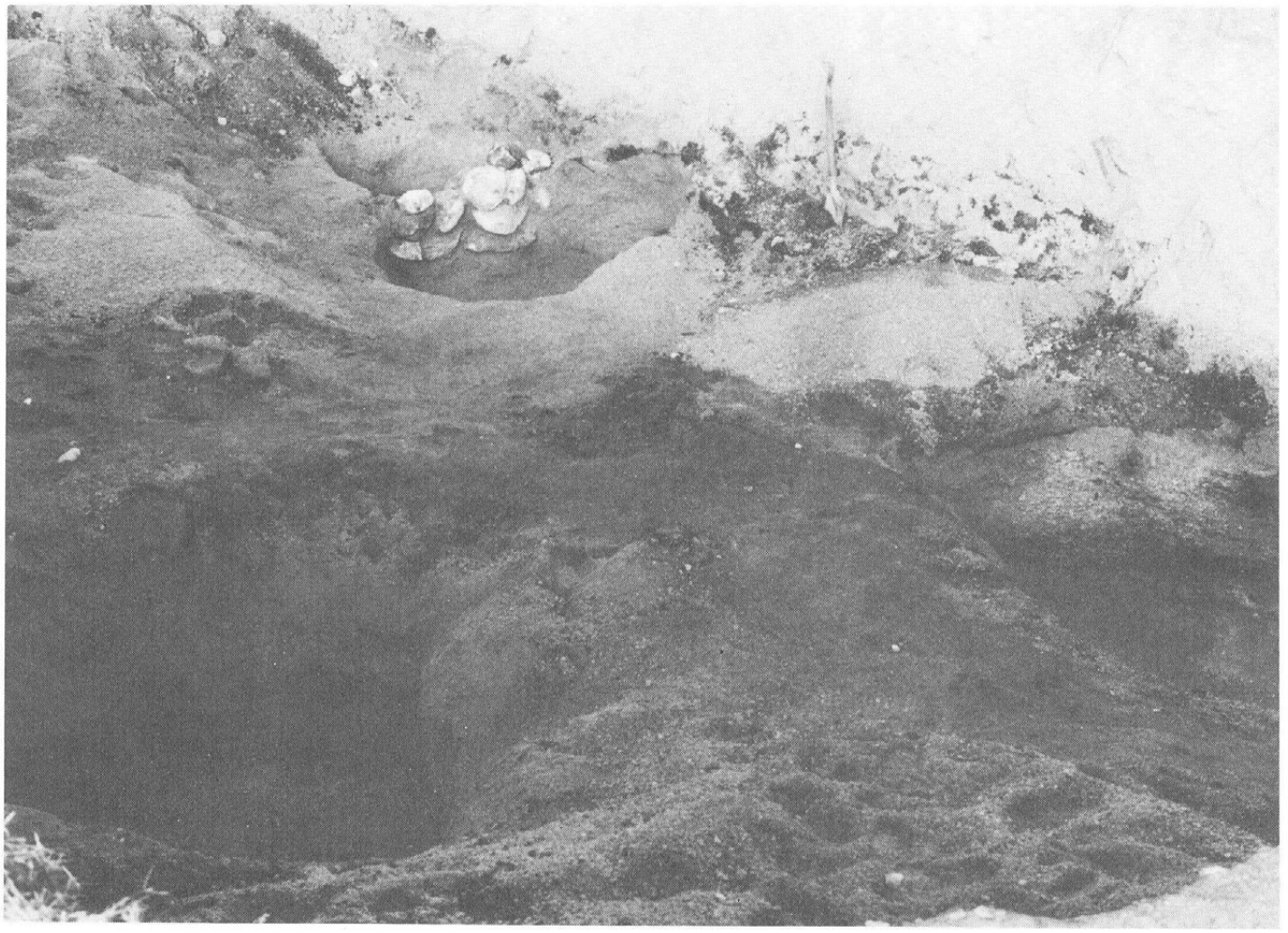
図版 2

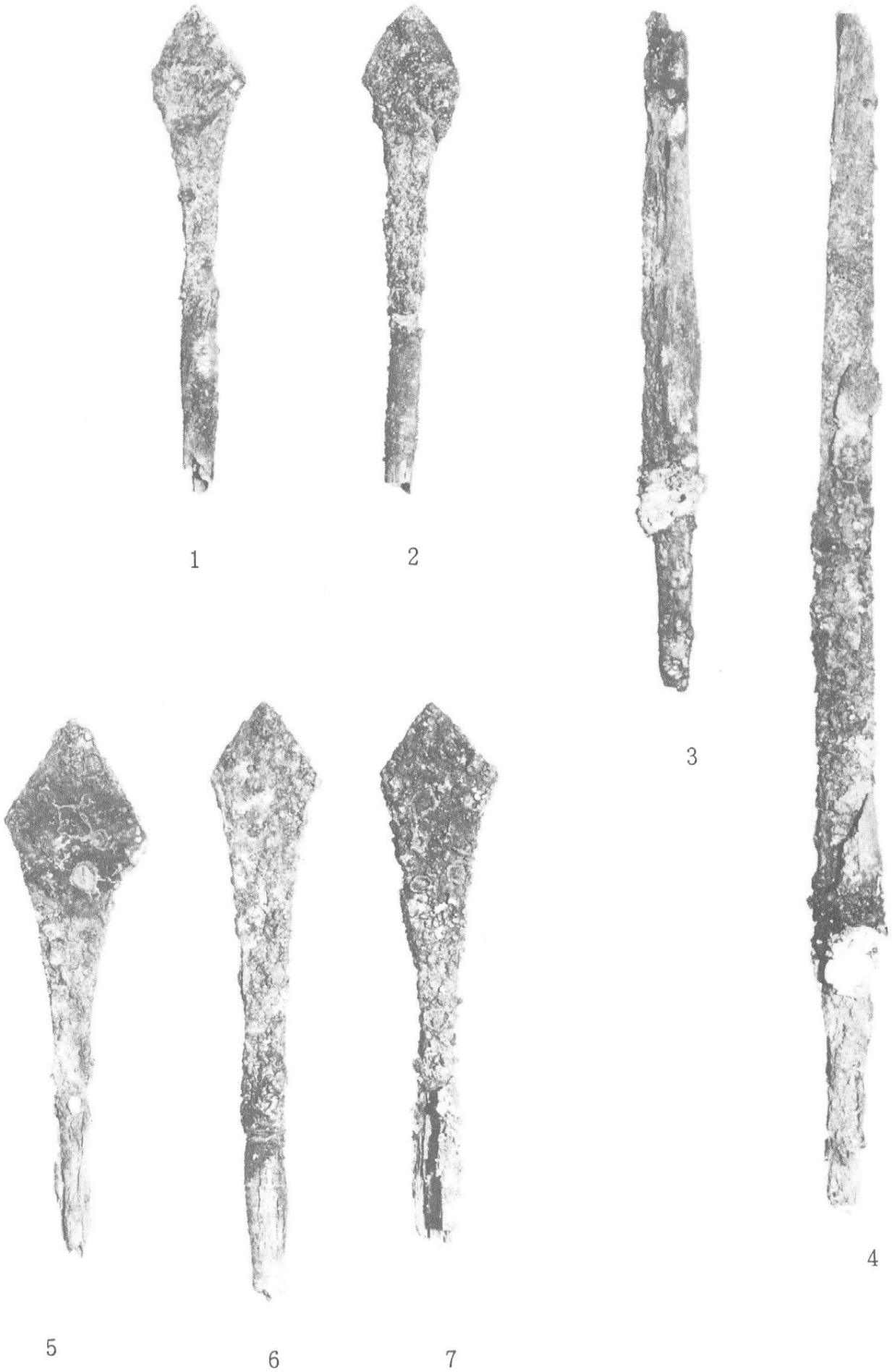
写真 3　奥壁の右に鉄鏃と剣

写真 4　第 2 号人骨と剣（右側に鉄鏃）

写真5

図版3






出　土　遺　物

# 菓子野（かしの）地下式横穴
# 第57－4号・5号発掘調査

# 例　　言

1. 本報告書は、都城市教育委員会が実施した都城市菓子野町に所在する菓子野地下式横穴第57－4号・5号の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県文化課主任主事面高哲郎の担当で、昭和57年11月29日から12月3日まで実施した。人骨については、長崎大学医学部解剖学第二教室、松下孝幸・分部哲秋・石田肇諸氏に依頼した。
3. 本報告書に使用した図面の作図は、遺構を面高、遠矢昭夫で、人骨については、松下、石田両氏が行い、製図は面高が行った。
   遺物の作図、製図は面高が行った。その際、津隈久美子、高橋加奈子氏の協力を得た。
4. 執筆・編集は面高が行った。
5. 出土遺物は、都城市教育委員会で保管している。

# 本　文　目　次

Ⅰ　所在地 …… 81
Ⅱ　調査に至る経過 …… 81
Ⅲ　調査の記録 …… 83
(1)　調査の概要 …… 83
(2)　第57－4号 …… 84
遺　　構 …… 84
出土遺物 …… 84
(3)　第57－5号 …… 86
遺　　構 …… 86
出土遺物 …… 88
Ⅳ　結　　語 …… 89

# 挿　図　目　次

第1図　遺跡の所在地 …… 82
第2図　地下式横穴分布図 …… 83
第3図　出土遺物　土師器・高杯 …… 84
第4図　第57－4号地下式横穴実測図 …… 85
第5図　第3トレンチ東壁土層図 …… 86
第6図　第57－5号地下式横穴実測図 …… 87
第7図　第57－5号出土遺物 …… 88

# 図　版　目　次

図版1　(1)　第57－4号竪穴 …… 95
(2)　第57－4号玄室 …… 95
図版2　(1)　高杯検出状況 …… 96
(2)　高杯出土状況 …… 96

図版 3　(1)　第57－5号竪穴 …… 97
　　(2)　第3トレンチ東壁 …… 97
図版 4　(1)　第57－5号（竪穴から玄室を見る） …… 98
　　(2)　第57－5号出土人骨 …… 98
図版 5　(1)　第57－5号貝輪出土状況 …… 99
　　(2)　第57－5号鉄鏃出土状況 …… 99
図版 6　(1)　出土遺物　高杯・鉄鏃（第57－5号出土） …… 100
　　(2)　第57－5号出土ゴホウラ製貝輪 …… 100
図版 7　　第57－5号出土イモガイ横型貝輪 …… 101

## I　所　在　地（第1図）

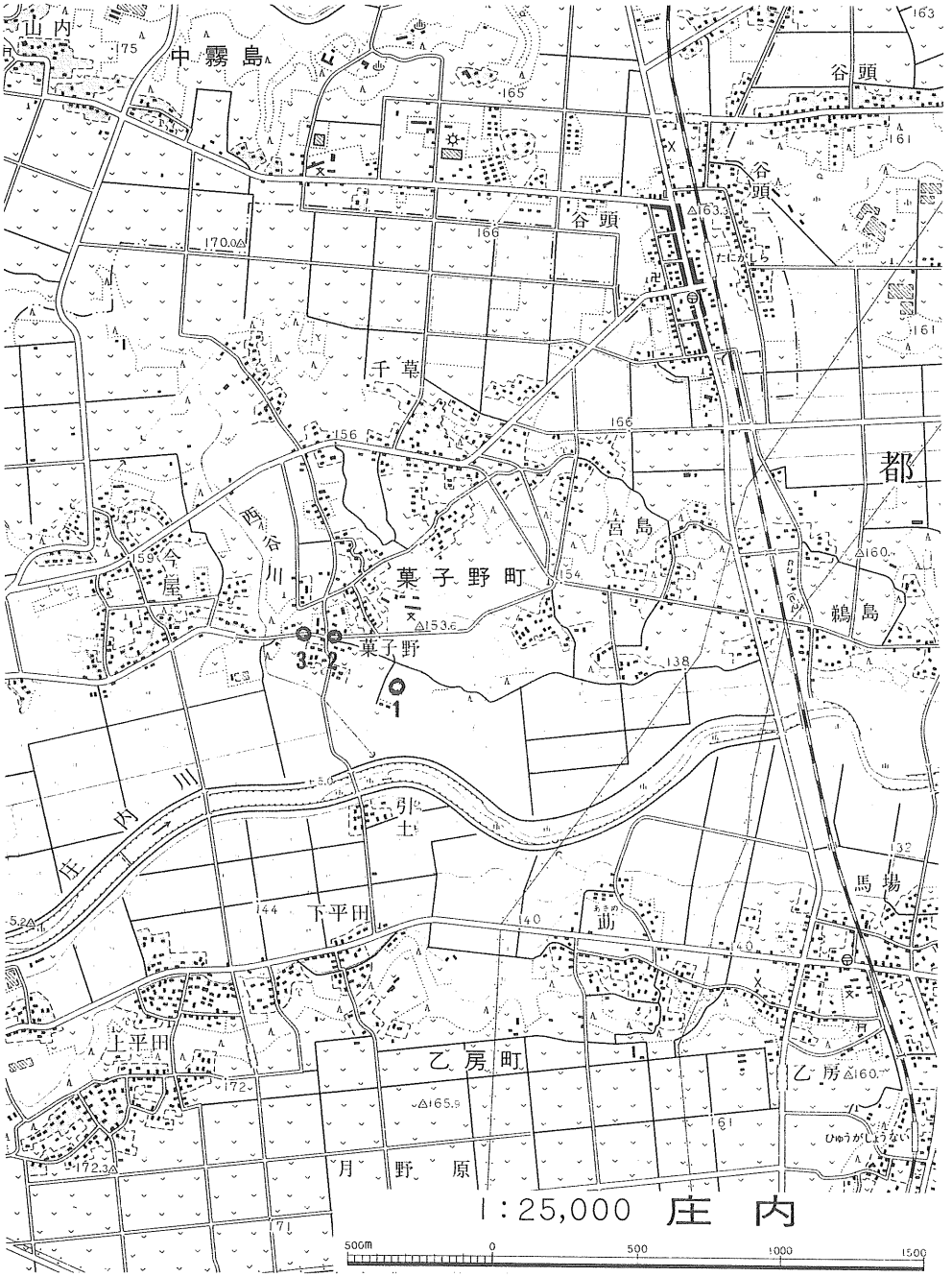
都城市菓子野町は、都城市街地の北北西約6.5㎞にある東へ細長く延びる台地上にあり、台地の南には庄内川が東流している。庄内川は、台地東端で大淀川と合流し、流路を北へとる。今回、調査された地下式横穴は、台地東縁、菓子野小学校南200ｍに位置している。

菓子野小学校南から庄内川にかけての台地南縁には、円墳が点在し、県指定されていたが、消滅している。今回、調査された地下式横穴の東20ｍにも県指定古墳があったが消滅しており、現在水田となっている。この付近では、円墳の他地下式横穴の存在も知られており、昭和55年には市道拡幅工事中1基の地下式横穴が発見され、また、昭和57年10月にも数基が同工事中発見されている[(1)]。この他、耕作中突然陥没することもあり、この部分は透水性が良く水田には不可のため、あぜなどとして利用されている。陥没部は地下式横穴と考えられることから、一帯はかなり広い範囲に地下式横穴が存在すると予想される。

## II　調査に至る経過

菓子野小学校南の台地縁辺は、現在水田として利用されている部分は多いが、5・6年前陥没した部分は滞水性がないため、茶・杉が植栽されている。　周辺ではこうした陥没部は地下式横穴ではないかと考えられている。昭和57年7月、土地所有者　　から当地も水田化したい旨の工事届が提出され、これに対して、県教育長から工事着手前に発掘調査を行うよう通知がなされた。このため、　　から市教育委員会へ発掘調査を行ってほしい旨依頼があり、教育委員会では文化財保護の観点から調査を受け入れることになった。

調査は、都城市教育委員会が主体となり、県文化課主任主事面高哲郎の担当で行うことになった。当初、調査は昭和57年11月8日から5日間を予定していたが、米の収穫が遅れた関係で同年11月29日から12月3日まで実施した。10月には市道拡幅工事現場でも3基の地下式横穴が発見されたので、今回、調査した地下式横穴を「菓子野地下式横穴第57－4号，5号」として記述する。両地下式横穴からは人骨が出土したので、長崎大学解剖学部第二教室講師松下孝幸氏に調査を依頼した。




1. 菓子野地下式第57－4・5号　2. 同第57－1～3号　3. 昭和55年発見地下式

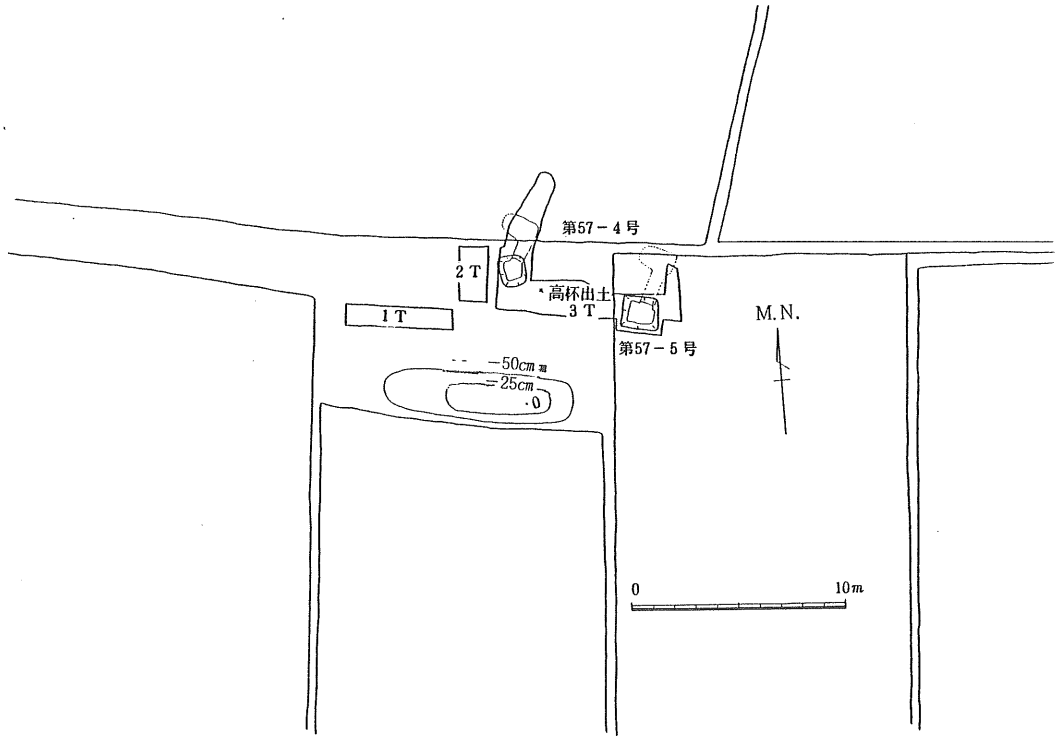
第1図　遺跡所在地

# Ⅲ　調査の記録

(1)　調査の概要（第２図）

調査は、茶畑北部の陥没部を中心にトレンチを設定して行う。その結果、第Ⅲトレンチ西端で地下式横穴１基、東端で１基の計２基が発見された。２基の地下式横穴の主軸方位は北北東で、台地の傾斜は緩やかではあるが、低所から高所に向っていると言える。(2)

当地の基本層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層ボラ混黒色土、第Ⅳ層御池軽石層（通称御池ボラ）で、２基の地下式横穴の玄室は第Ⅳ層に構築されていたが、地下式の保存状態は良好であった。構造はいずれも長い羨道をもち、逆Ｐ字形をなす地下式横穴であった。５号地下式は、３体埋葬で１号人骨の左前腕骨にイモガイ横型貝輪８個、３号人骨の右前腕骨にゴホウラ製貝輪１個が着装された状態で発見された。１号・３号は男性熟年である。４号地下式横穴の竪穴から南東１$m$の位置で高杯１点が出土したが、包含層は、地下式横穴構築時の２次堆積土と推定されるボラを多量に含む黒褐色土層である。また、第３トレンチ東壁では、２次堆積土の層が、５号地下式の玄室方向へ盛り上がっているのも確認され、墳丘の存在を考えるうえで注目された。




第２図　地下式横穴分布図

(2) 第57－4号

遺　構（第4図、図版1～2）

第57－4号は、主軸方位をN27°W とする左片袖の逆P字形の地下式横穴で御池軽石層中に玄室が構築されている。4号は、5・6年前陥没した地下式であるが、陥没部は竪穴であったため、羨道・玄室はほぼ完全に残存していた。しかしながら、羨道・玄室内には土が充満していたため、玄室天井部を開口して調査を行った。

竪穴は、約120cm×135cmの隅丸長方形で深さ約170cmである。羨道は竪穴北東隅に位置し、幅70cm、高さ85cmで天井はアーチ状となっている。長さは、110cmと地下式の中では長い羨道である。閉塞施設は確認されなかったが、羨道内等への土の流入から板様施設でなかったか考えられる。(3) 竪穴の埋土は、上層がボラを含む黒色土の硬質の層で、下層は黒色土混ボラ層となっている。閉塞施設である板様のものが腐朽したため、下層の黒色土混ボラ層が羨道内へ流入し、竪穴内に空洞が生じて陥没が生じたものと推定される。

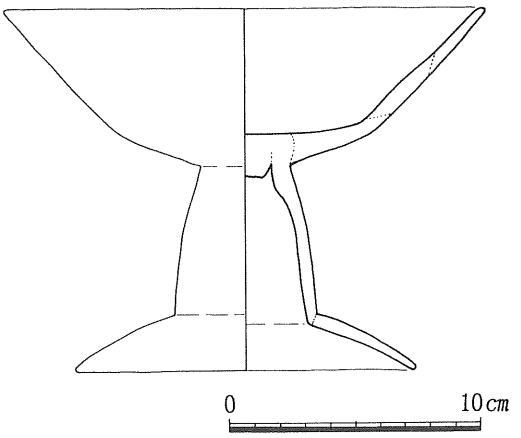
玄室は、西の両隅が丸くなっているが、基本的には100cm×190cmの長方形プランと考えられる。天井は、高さが約80cmでアーチ状となっている。

第57－4号に埋葬されていたのは、小児（Ⅰ期）1体で玄室東部に頭蓋骨の一部が残存していた。副葬品は認められなかった。

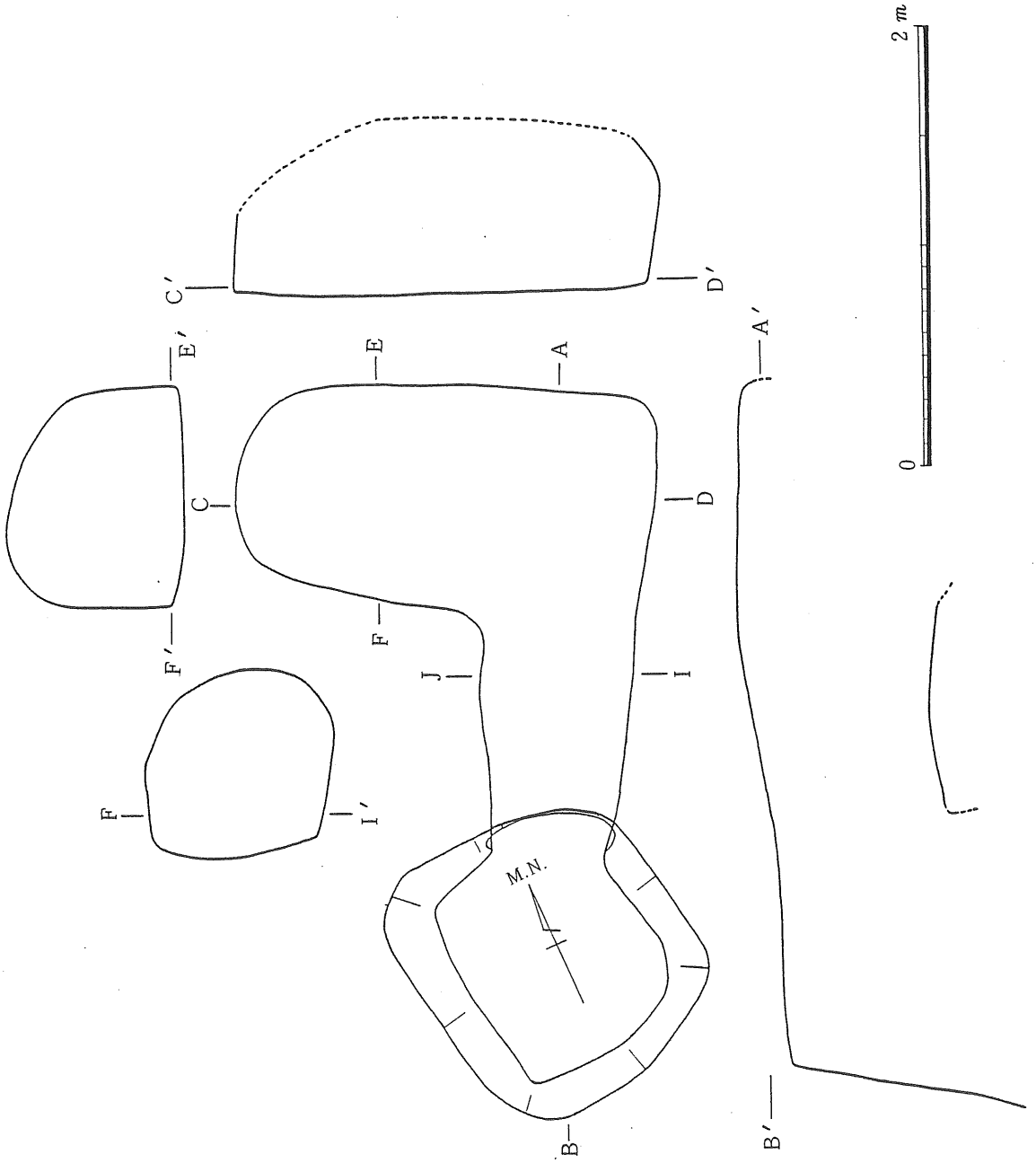
竪穴の周辺には、地下式横穴構築時の2次堆積土であるボラを多量に含む黒褐色土が厚さ10cmぐらいの層をなして拡がっていた。竪穴南東1mの位置において、2次堆積土層から土師器（高杯）が1点、横位の状態で出土しているが、これは、第57－4号に伴うものと考えられる。

出土遺物（第3図、図版6）

高杯は、器高14.4cm、口径19.3cm、脚端部径13.6cmを測る。杯部は、その下底部に弱い稜をもって直線的に開く、脚柱は中膨みをなし、脚裾部は内湾している。調整手法は、器壁が風




第3図　出土遺物　土師器・高杯




第４図　第57－４号地下式横穴実測図

化しているため不明。色調は黄褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。

(3) 第57－5号

遺　構（第6図、図版3・4・5）

第57－5号は、調査の際、竪穴が陥没して発見されたものである。羨道は東へ偏よる両袖であるが、片袖の逆P字形とも見取れる構造の地下式横穴で、玄室は御池軽石層中に構築されている。主軸方位はN28°Eである。

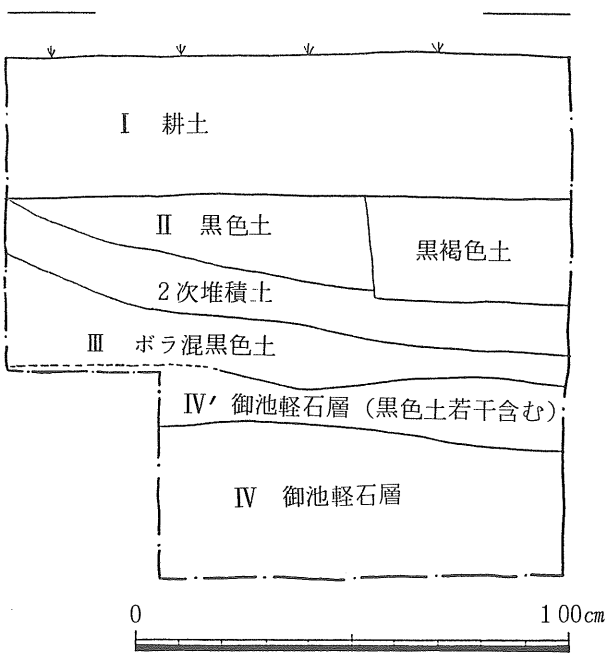
竪穴は、170cm×145cmの長方形プランで南辺は若干長くなっている。推定深さ170cm。竪穴内の埋土は、上部はボラ混黒色土で硬質の層で、下部は黒色土混ボラ層で下層にいくに従い黒色土の混入度は少なくなる。下部の黒色土混ボラが羨道内へ70～80cmほど流入し、羨門上の竪穴に空洞が生じており、この部分が陥没している。閉塞施設は何ら確認されなかったが、羨道内への竪穴の埋土の流入から閉塞施設は板様のもので、この板様施設の腐朽により陥没したものと考えられる。

羨道は、竪穴東よりから掘られ、その主軸方位は竪穴の軸方位より28度東へふれている。幅は羨門部で55cm、玄門部で75cmが計測され、梯形状をなし、全長154cmである。天井は平らで高さ80cmを測る。

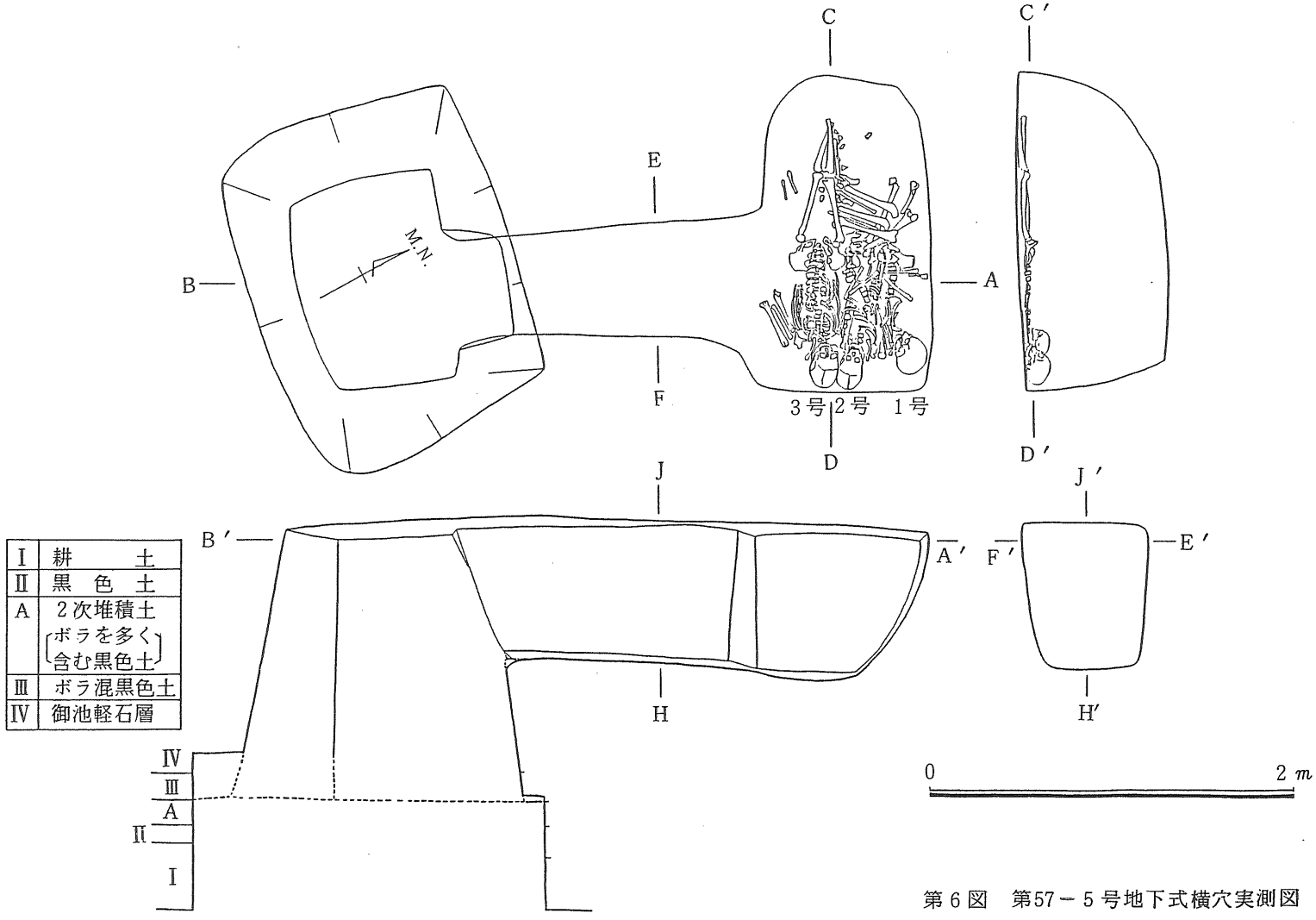
玄室は、西端が隅丸となっているが、基本的に90cm×170cmの長方形プランである。天井は、東半は平坦で箱形をなし、西半はドーム状となっている。高さは中央で80cmを測る。

埋葬人骨は、頭位を玄室右、東南東とする3体があり、1号人骨男性熟年2号人骨女性熟年、3号人骨男性熟年である。1～3号の頭蓋骨は塗朱されており、特に1号人骨は厚く塗られている。3体の人骨の保存状態は良く、3号人骨はほぼ原位置を保っていた。

3体の人骨は、1号人骨はその配列に乱れが見られ、3号人骨の胸部には2号人骨の肋骨が乗っていた[5]ことから




第5図　第3トレンチ東壁土層図




第6図　第57－5号地下式横穴実測図

1号→2号→3号の順に追葬されたと考えられる。

遺物は、1号人骨の左前腕骨にイモガイ製貝輪8個、3号人骨の右前腕骨にゴホウラ製貝輪1個が着装された状態で出土し、また、玄室左で鉄鏃2点も出土している。

第Ⅳトレンチ東壁において、地下式横穴構築時の2次堆積層であるボラ混黒褐色土の層が地下式横穴方向への盛り上がりが確認されている。

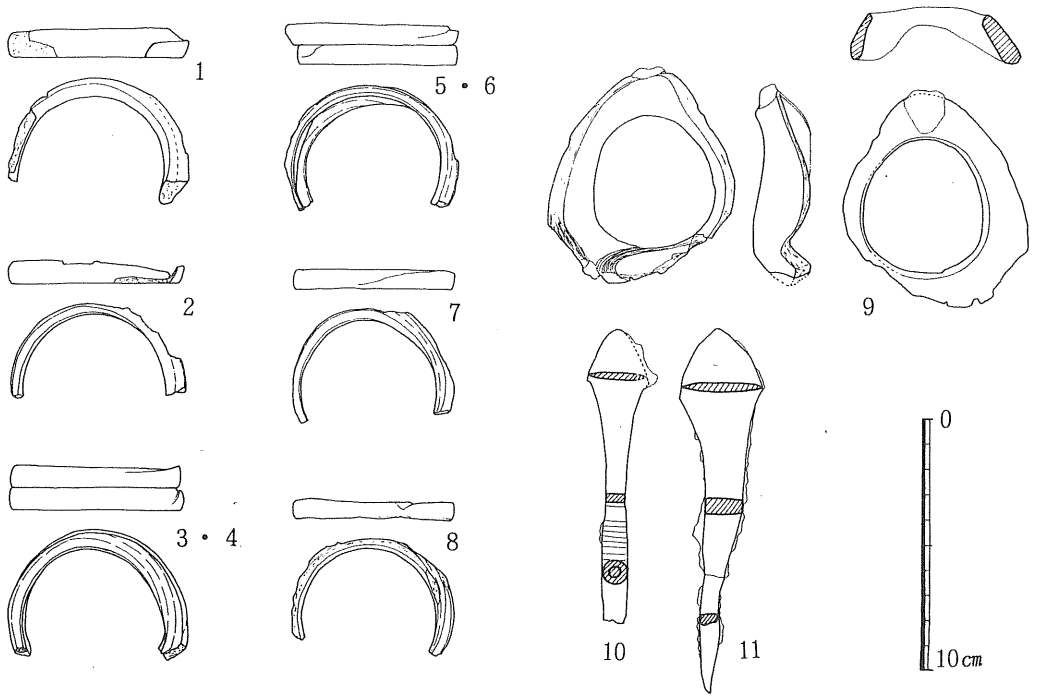
出土遺物（第7図）

貝　輪　（1～9）

1号人骨の左前腕骨に着装された状態でイモガイ横型貝輪8個が出土しているが、保存状態は悪く3分の1ないし4分の1が欠損している。番号は、手首から1、2、……で計測値は右のとおりである。8個の貝輪は、内径が5.7㎝前後（1～5）

| 番号 | 外径 | 内径 | 高さ | 番号 | 外径 | 内径 | 高さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 7.1 | 5.7 | 1.2 | 5 | 6.9 | 5.7 | 0.9 |
| 2 | 6.9 | 5.6 | 1.0 | 6 | 6.5 | 5.5 | 0.8 |
| 3 | 7.0 | 5.8 | 0.8 | 7 | 6.5 | 5.5 | 0.8 |
| 4 | 7.0 | 5.7 | 0.9 | 8 | 6.4 | 5.5 | 0.7 |

イモガイ横型貝輪計測値　（単位　㎝）




第7図　第57－5号出土遺物

5.5㎝（6～8）の2群に分けられる。高さは、1から順に減高している。

3号人骨の右前腕骨からゴホウラ製貝輪が着装された状態で出土している。外径8.8㎝×？、内孔径5.3㎝×4.9㎝、高さ2.0㎝が計測される。木村氏のいう繁根木b型[6]のゴホウラ製貝輪に類似する。

鉄　鏃

鉄鏃は、玄室左で変形圭頭斧箭式2点が出土する。10は現長11.6㎝、鏃身7㎝、最大幅約2.5㎝である。11は現長14.4㎝、最大幅3.4㎝で矢柄痕は認められない。

## Ⅳ　結　語

調査された2基の地下式横穴は、いくつかの点で類似点が指摘される。2基の地下式は、主軸方位がN約27°Eとほぼ同方向に向けて構築され、構造は長い羨道をもつ逆P字形で、また、閉塞施設が板様施設と推定されるなどの類似点があり、築造時期は、同時期と推定される。4号地下式に伴うと考えられる高杯は、国富町大野原地下式横穴第3号[7]、高原町日守地下式横穴群出土[8]の高杯と類似しており、その年代観から、菓子野地下式横穴第57－4号・5号は、6世紀前後と考えられる。

第57－5号地下式横穴からは、着装された状態で貝輪が出土したが、地下式横穴における貝輪の出土例は現在まで18例が報告されている。貝種は、ゴホウラ、イモガイ、オオツタノハ？等があり、ゴホウラ製は国富町大坪[9]と今回の2例で大半はイモガイ製である。

貝輪を出土した地下式横穴を地域別に見ると、宮崎平野地区では、長方形寄棟造り、楕円形妻入りの構造をもつ地下式から出土し、甲冑等を出土する例のある長方形妻入りタイプの出土例は、ゴホウラ製貝輪を出土した大坪以外は、出土例をみていない。えびの地区では、平入りで玄室平面形が長方形あるいは楕円形のタイプに出土し、肝属平野地区では、1例のみで軽石製家形石棺を伴う長方形妻入りから蛇行剣と共伴して出土している。北・西諸県地区では、大萩地下式横穴群においては、平入りの玄室平面形が梯形あるいは変長方形のタイプから出土し、高原、高崎、今回の都城においては、片袖のP字形のタイプから出土している。

地下式横穴において出土する貝輪は、イモガイ製が多く、ゴホウラ、オオツタノハ？製は数地下式で出土するのみである。オオツタノハ？製貝輪は、旭台、日守地下式横穴群で出土している。この貝輪を出土する地下式の構造は、旭台が梯形・切妻造り・平入り片袖で、日守が方形・寄棟造り・平入り片袖である。両地下式は、構造に若干の違いはみられるが類似

性が指摘され、また、いずれも棚状施設をもっている。旭台・日守地下式横穴群は、距離的にもそう遠くない位置関係にあり、朱やレリーフによる装飾をもつ地下式横穴群としてても注目されている。オオツタノハ？製貝輪を出土した両地下式の時期は、菓子野57－4・5号と同時期ないしやや先行するものと考えられる。

第3トレンチ東壁で見られた盛り上りに類似する例は、高崎町塚原地下式横穴[12]で報告されている。塚原の例は、2次堆積土の盛り上りでなく、火山灰（高原スコリア？）の盛り上りで、報告者は、降越部の存在を考えている。第57－5号の例も盛り上りは、何らの降起部の存在、つまり、マンウドの存在を示しているとも考えられ、5号地下式の竪穴は、マウンドの裾に位置していることになる。

地下式横穴と墳丘との関係については、石川恒太郎氏[13]、田中茂氏[14]の論考がある。田中氏は墳丘裾に竪穴が発見された地下式横穴の主軸方向が、墳丘の頂部へ向っていること、数基の地下式横穴が近接しながら切り合っている例がないこと、また、追葬する場合は何らの目印を必要とすることなどから地下式横穴は墳丘を伴うのでないかという仮説が提示されている。

今回の盛り上がりは、竪穴の埋土上層から始まり、玄室方向へ盛り上っていることから、墳丘説を実証する1例とも考えられる。しかしながら、今回、盛り上がりを確認したのが、1ケ所のみであり、また、類例も少ない現在、ここでは、墳丘を伴っていた可能性を指摘するにとどめ、今後の調査、研究をまちたい。

註

1. 道路のり面で発見され、人骨のみ取り上げられている。
2. 傾斜地立地の地下式横穴で、主軸方向が等高線と直交しながら、高位方向へ向うものは、群内においては編年的に先行するのではないかと考えられている。
3. 板様施設による閉塞と推定される例は、国富町飯盛地下式第53－1号、綾町地下式西都市東立野9号などがある。
4. 5号地下式は、両袖をもつが、右袖が短いので全体的に逆P字と見なしてよいと考える。
5. 人骨の状態については、松下氏から教示を受ける。
6. 木村幾多郎「所謂広田型貝輪の細分について」　九州大学文学部史淵第107号　1980
7. 瀬之口伝九郎他「六野原古墳調査報告」　史跡名勝天然紀念物調査報告第13輯　1944

8. 岩永哲夫「日守地下式古墳群確認調査」　宮崎県文化財調査報告書第24集　宮崎県教育委員会　1981

9. 石川恒太郎「国富町大坪地下式古墳調査報告」　宮崎県文化財調査報告書第15集　宮崎県教育委員会　1970

10. 石川恒太郎他「旭台地下式古墳群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第19集、宮崎県教育委員会1977

11. 岩永哲夫他「日守地下式横穴54－1～4号発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第22集宮崎県教育委員会1980

次年度調査された日守55－1・2号出土の貝輪は、貝種は二枚貝とされている。実測図では、54－2号出土のものに類似している。

12. 石川恒太郎「高崎町塚原地下式古墳調査報告」　宮崎県文化財調査報告書第14集　宮崎県教育委員会　1969

塚原地下式横穴の竪穴上の火山灰の盛り上りは、第14集実測図では玄室方向への盛り上りが表現され、「地下式古墳の研究」（1973）では、竪穴上での降起が表現されている。

13. 石川恒太郎「地下式古墳の研究」　ぎょうせい　1973

14. 田中茂「えびの市小木原地下式横穴3号出土品について－地下式横穴と墳丘－」　研究紀要№2　宮崎県総合博物館　1973

貝輪を出土する地下式横穴

（1983. 3）

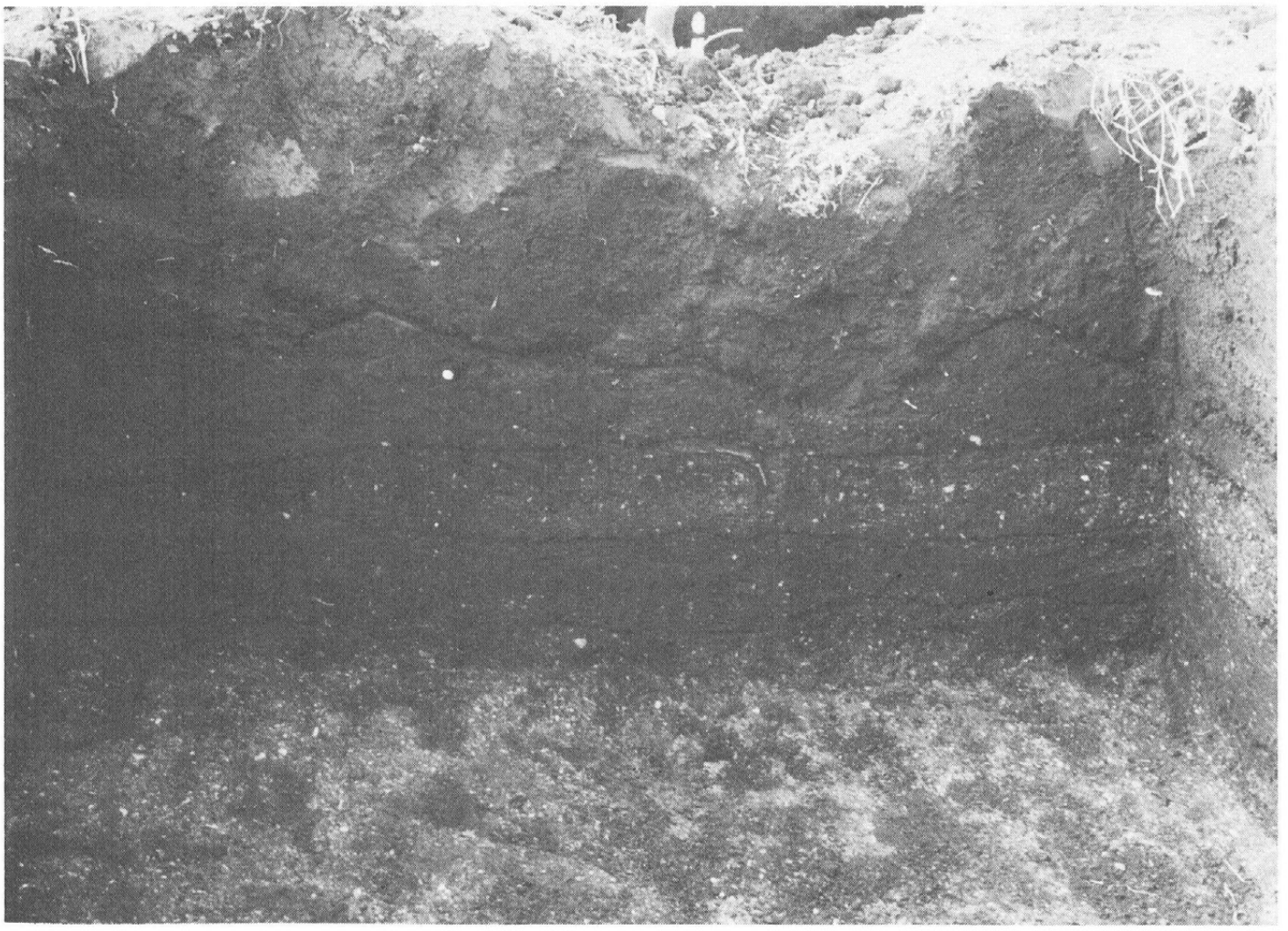
| 地域 | 地下式横穴名 | 構造 | 被葬者数 | 貝輪 | | | 武器 | | | 装身具 | 工具 | 農具 | その他出土遺物 | 文献・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 玄室・天井・羨道 | | 貝種 | 個数 | 着装位置 | 剣 | 刀 | 鉄鏃 | | | | | |
| 宮崎平野部 | 国富町大坪 | 長方形・寄棟・妻入り | 2 | ゴホウラ | 1＋1？ | ？ | 1 | 1 | | | 刀子1, 鉇1<br>鉄斧1 | 鋤先1 | 仿製獣形鏡 | 県文報15集 |
| | 〃 市ノ瀬1号 | 長方形・？・？ | 1 | イモガイ | 1＋1？ | ？ | | | | 管玉8,切子玉1<br>丸玉6,小玉60 | | | | 地下式古墳の研究 |
| | 〃 稲荷馬場 | 長方形・？・？ | 2 | ？ | ？ | ？ | | | | 金環 | 刀子3 | | 土師器坩1, 杯盌, 鉢、須恵器杯 | 宮博・研究紀要No.2 |
| | 西都市下三財月中1号 | 楕円形・？・妻入り | | ？ | ？ | ？ | | 2 | 2 | 臼玉47<br>小玉20 | | | | 〃 |
| 西・北諸県地区 | 野尻町大萩 | 梯形・寄棟・平入り | 2 | イモガイ | ？ | 左手 | 1 | | 17 | 銀環1 | 刀子2<br>鉄斧1 | 鎌1 | 朱玉1 | 県文報5集 |
| | 〃 大萩10号 | 逆梯形・寄棟・平入り | 1 | イモガイ | 1 | 男・左手 | | | | | 刀子1 | | | 大萩遺跡 |
| | 〃 〃 3号 | 変長方形・寄棟・妻入り | 2 | イモガイ | 1 | 女・左手 | | 2 | 6 | 銀環1 | 刀子1 | | 貝製品1,馬具2 | 〃 |
| | 高原町旭台9号 | 梯形・切妻・平入り<br>（逆P字形） | 3？ | オオツタノハ？ | 8 | ？ | 3 | | 6 | | 鉇1<br>刀子1 | | 鉾1 | 県文報19集 |
| | 〃 日守54－2号 | 方形？・寄棟・平入り<br>（逆P字形） | 3？ | オオツタノハ？ | 1 | ？ | 1 | | 1 | | 刀子1 | | | 県文報22集 |
| | 〃 〃 55－1号 | 長方形・寄棟・平入り<br>（逆P字形） | 2 | 二枚貝 | 1 | 男・左手 | 1 | | 2 | | | | | 県文報23集 |
| | 〃 〃 55－2号 | 方形・寄棟・平入り<br>（逆P字形） | 2 | 二枚貝 | 16 | 女・右手 | 4 | | 16 | | 刀子2<br>鉇 1 | | 鍬先2 | 〃 |
| | 高崎町原村上 | 長方形・アーチ・平入り<br>（P字形） | 2 | イモガイ | 1 | ？ | 2 | | | | | | | 県文報18集 |
| | 〃 横谷・原村A号 | 長方形・？・平入り<br>（逆P字形） | 4 | イモガイ | 12 | ？・両手 | 4 | | 10 | | 刀子9 | | 鉄釧1 | 県文報19集 |
| | 都城市菓子野57－5号 | 長方形・アーチ・平入り<br>（逆P字形） | 3 | イモガイ<br>ゴホウラ | 8<br>1 | 男・左手<br>男・右手 | | | 2 | | | | | 本報告 |
| えびの・北薩 | えびの市小木原101号 | 方形・？・平入り | 3 | イモガイ | 6 | ？・左手 | 2 | 1 | 7 | | 鉇 | | | 県文報15集 |
| | 〃 平松43－2号 | 楕円形・？・平入り | 1 | イモガイ | 1 | ？ | | 1？ | | | | | | 県文報14集 |
| | 〃 島内2号 | 長方形・切妻・平入り | 3～4 | イモガイ | 4 | ？ | | 1 | 8 | | | | | 県文報16集 |
| 肝属 | 高山町上原 | 長方形・切妻・妻入り | 1？ | イモガイ | 2 | ？ | 蛇行剣1 | | | | 刀子3 | | 貝製ヘラ1 | 隼人<br>軽石製石棺 |

県文報……宮崎県文化財調査報告書

(1)　第57－4号竪穴

(2)　第57－4号玄室

図版 2



(1)　高杯検出状況

(2)　高杯出土状況

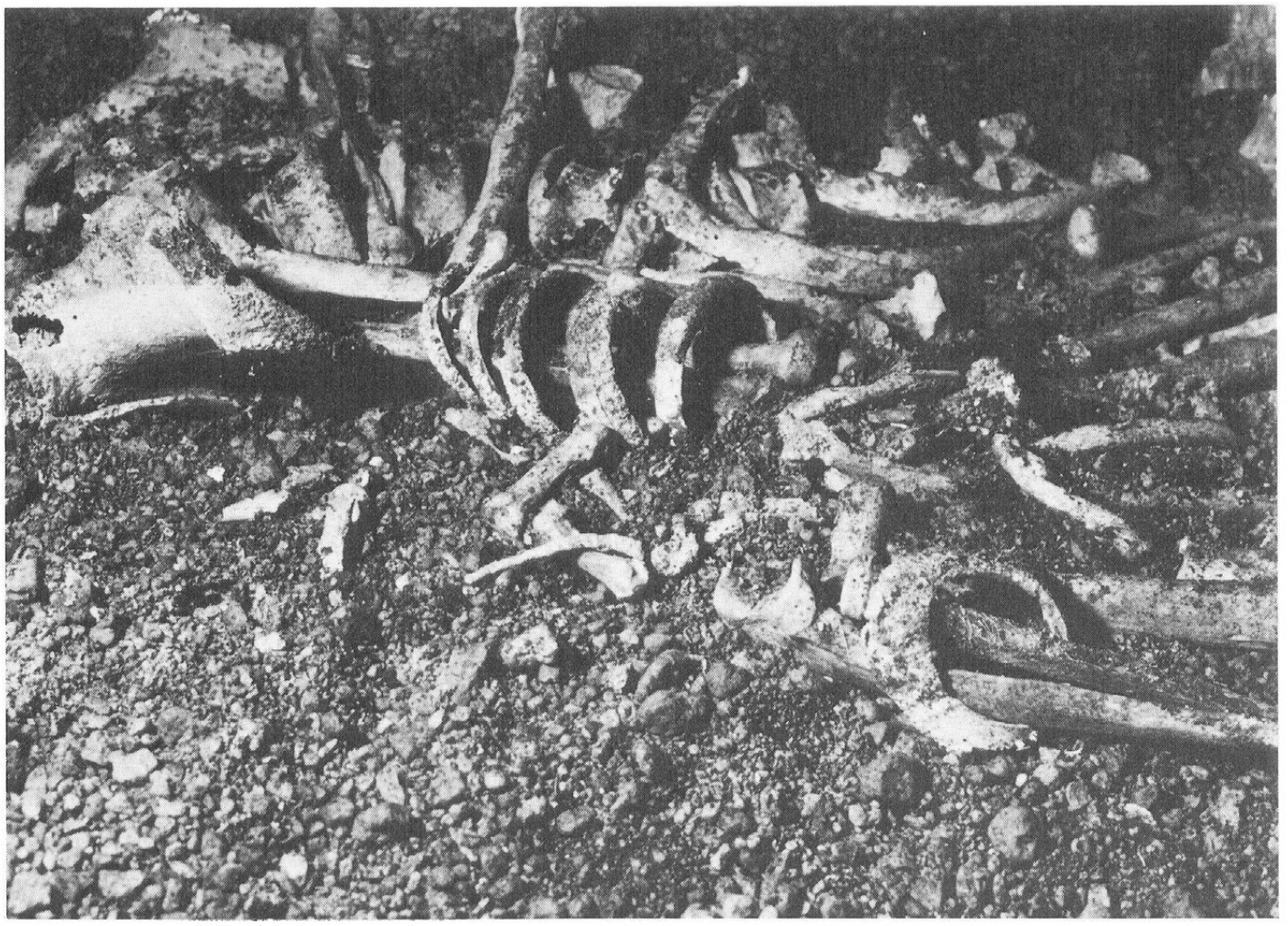
(1)　第57－5号竪穴

(2)　第3トレンチ東壁

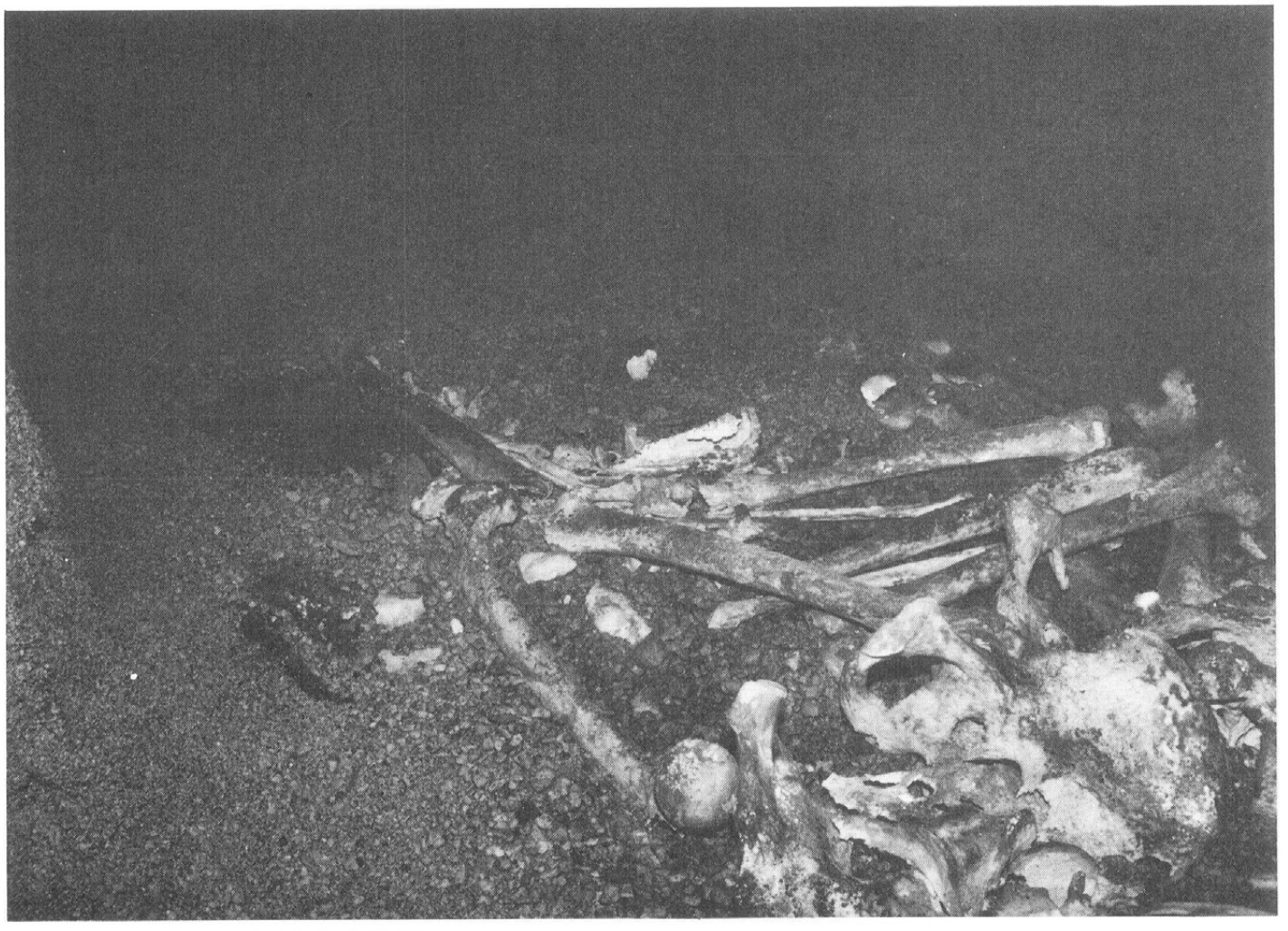
図版 4

(1)　第57－5号（竪穴から玄室を見る）

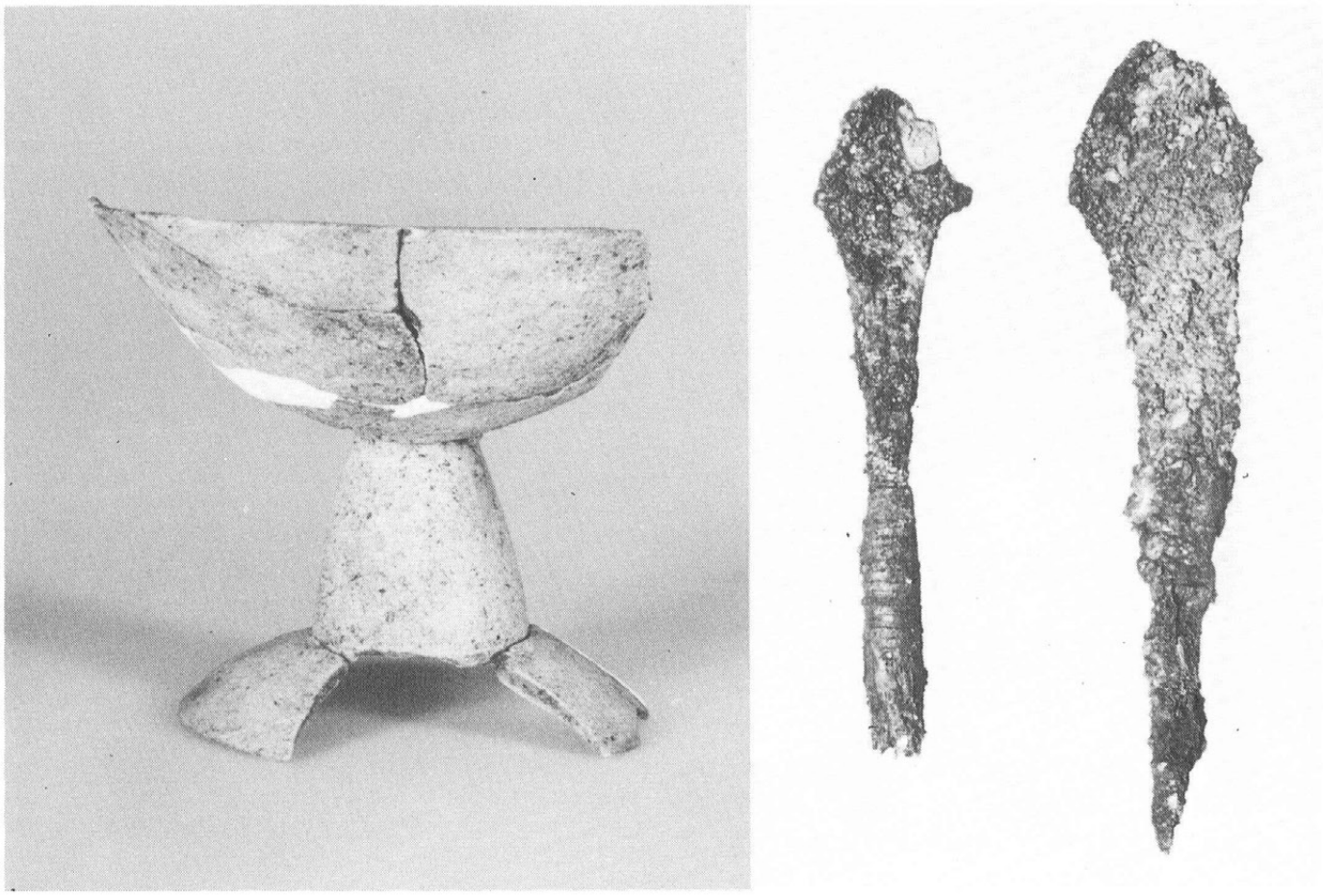
(2)　第57－5号出土人骨



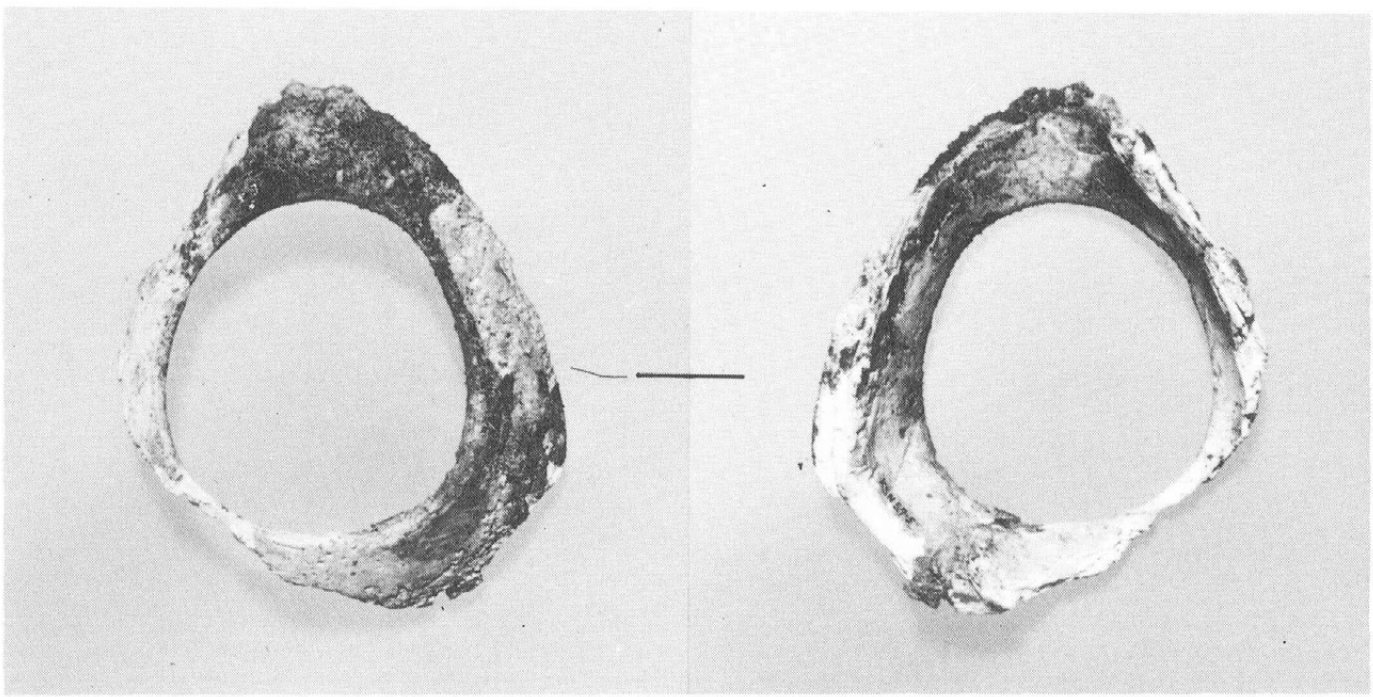
(1)　第57－5号　貝輪出土状況



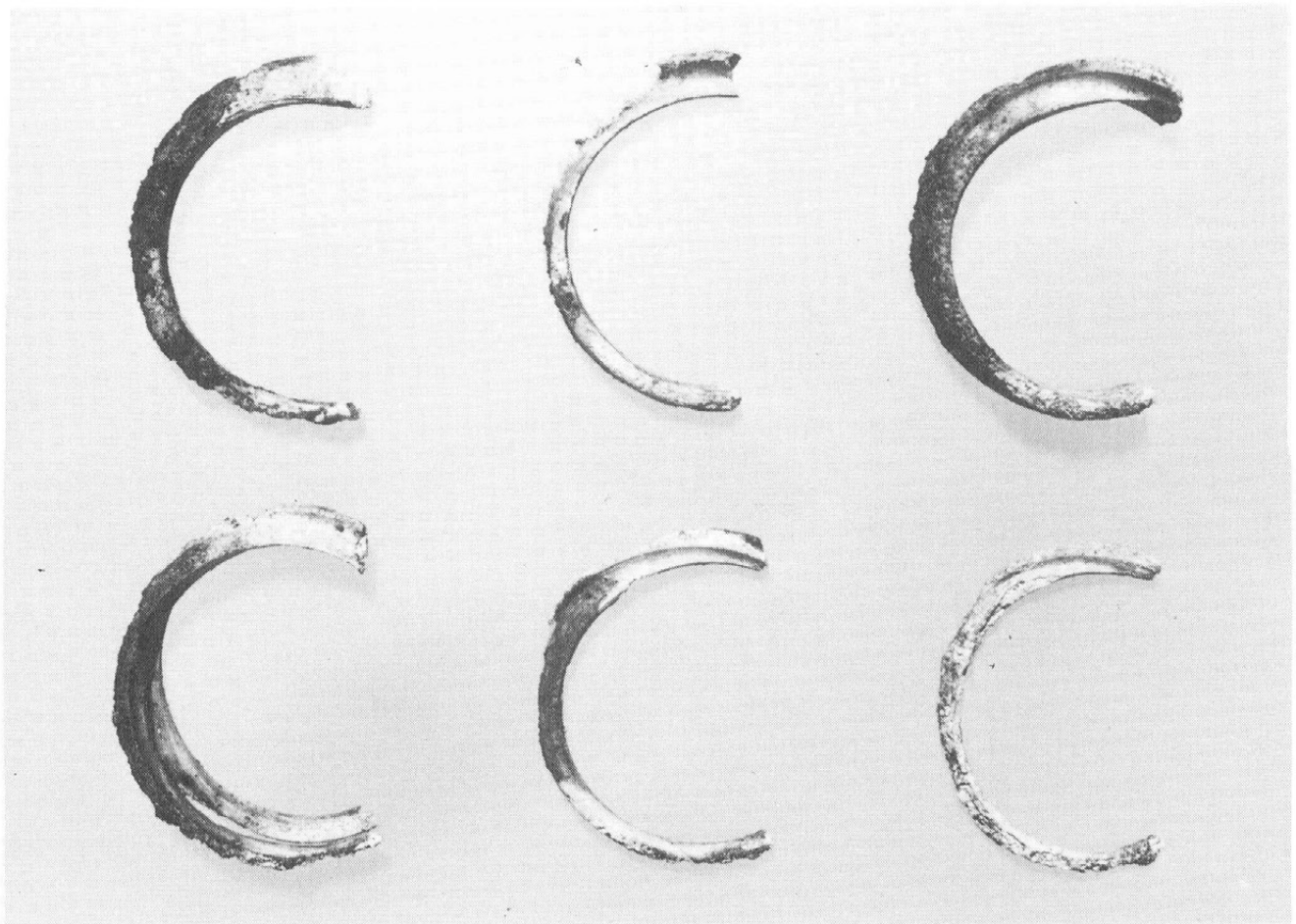
(2)　第57－5号　鉄鏃出土状況

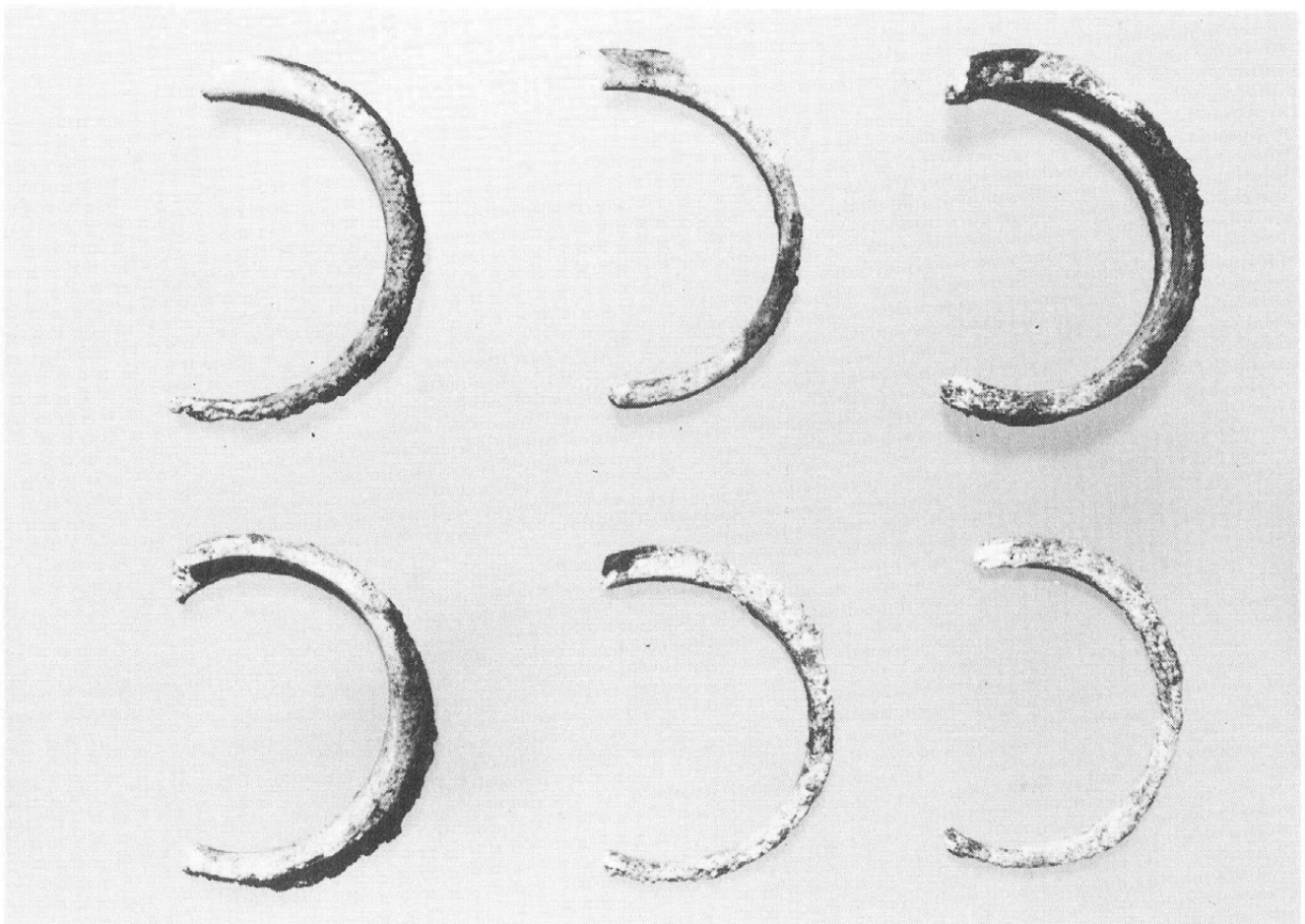


(1)　出土遺物　高杯・鉄鏃（第57－5号出土）



(2)　第57－5号　出土ゴホウラ製貝輪





第57－5号　出土イモガイ横型貝輪

# 宮崎県都城市菓子野（かしの）地下式横穴出土の古墳時代人骨

松下孝幸・分部哲秋・石田 肇

# 宮崎県都城市菓子野地区横穴出土の古墳時代人骨

松下孝幸※・分部哲秋※・石田　肇※

## はじめに

宮崎県都城市菓子野町にある菓子野地下式横穴（古墳）群のうちの５基が1982年（昭和57年）に調査された。このうちの３基は道路工事業者によって潰されてしまい、人骨も圧縮破壊されていた。残りの２基のうちの１基（57年５号墳）にはきわめて保存状態が良好な人骨が残存しており、資料としては貴重なものである。

当教室では、かねてから南九州地方に特有な地下式横穴（古墳）から出土する古墳人骨に強い関心を寄せ、この古墳人の形質を解明するために現在も資料の収集と研究を続けている。資料の増加に伴って他地方の古墳人との差異がしだいに明らかになりつつあり、また同じ地下式横穴から出土する人骨にも地方差が存在することを示唆する資料も出土しているが、まだ資料数が十分なものではなく、地下式古墳人の全体像を解明するまでには至っていない。このような問題点や課題を明らかにしていくためにはまず既に発掘されている人骨について、これらを資料化し整備していくことが必要である。このような観点から本例についても計測および人類学的観察を行なったので、その結果を報告したい。なお昭和55年に出土した人骨についても合せて記載した。

## 資　　料

菓子野地下式横穴５基から出土した人骨は表１に示すとおり、12体であるが、57年１号墳、２号墳、３号墳は既に破壊されており、人骨を取り上げ、その形質を論じることは不可能なもので、体数を明らかにすることと歯が残存していたので、年令を推定することだけがかろうじて可能であった。これら破壊された人骨の残存量は多く、また５号墳出土人骨の保存状態がきわめて良好なものであることを考えれば、この潰された人骨の保存状態も良かったものと推測され、まことに残念である。

※　長崎大学医学部解剖学第二教室

表1　資料数

| 成人 男性 | 成人 女性 | 小児 | 不明 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 3 | 1 | 1 | 8 | 13 |

これらの人骨は別項で述べられているとおり、考古学的所見より古墳時代後期初頭（5世紀末～6世紀初頭）に属する人骨である。

人骨の総数は55年分も含めると13体であるが、このうち破壊されていたのは8体分の人骨である。残りの5体のうち1体が小児骨で、あとの4体は成人骨であった。この4体の成人骨のうち3体は男性で、残りの1体が女性であった。なお各出土人骨の性別・年令は表2に示すとおりである。

表2　出土人骨一覧

| 人骨番号 | 性別 | 年令 | 備考 | |
|---|---|---|---|---|
| 55年1号墳 | | | 1体 | |
| 1号人骨 | 男性 | 熟年 | 頭蓋朱 | |
| 57年1号墳 | | | 3体 | 業者によって破壊 |
| 1号人骨 | 不明 | 壮年 | | |
| 2号人骨 | 不明 | 熟年 | | |
| 3号人骨 | 不明 | 不明 | | |
| 2号墳 | | | 4体 | 業者によって破壊 |
| 1号人骨 | 不明 | 壮年 | | |
| 2号人骨 | 不明 | 壮年 | | |
| 3号人骨 | 不明 | 壮年 | | |
| 4号人骨 | 不明 | 壮年 | | |
| 3号墳 | | | 1体 | 業者によって破壊 |
| 1号人骨 | 不明 | 熟年 | | |
| 4号墳 | | | 1体 | |
| 1号人骨 | | 小児(I) | | |
| 5号墳 | | | 3体 | |
| 1号人骨 | 男性 | 熟年 | 頭蓋朱 | |
| 2号人骨 | 女性 | 熟年 | 頭蓋朱、上肢一部朱 | |
| 3号人骨 | 男性 | 熟年 | 頭蓋朱 | |

計測方法はMartin-Saller(1957) により行ない、一部はHowells (1973) の方法で計測した。また鼻根部は鈴木 (1963) と松下 (1983) の方法で計測を行なった。

比較資料としては、従来報告されている宮崎県の地下式横穴出土の古墳人（以下「地下式古墳人」）、朝田墳墓群第Ⅱ地区の横穴墓から出土した古墳人（以下「朝田古墳人」）、（松下，1982）。

なお比較表中の地下式古墳人とは、灰塚（内藤，1973）、大萩（内藤，1974）、日守（松下，1981）、上の原（松下，1981）、旭台（松下，他，1983）を一括して平均値を算出したものである。

## 所　　見

上述しているように57年１号墳～３号墳から出土した人骨は完全に押し潰されていたために観察することもできないものであった。従って所見は55年１号墳、57年４号墳および57年５号墳からそれぞれ出土した人骨についてのみ記載する。

なお、各人骨の計測値は表12～24に示すとおりである。

**55年１号墳１号人骨**（男性・熟年）

(1) 頭　　蓋

右の頬骨弓を欠く以外は完全である。

1. 脳頭蓋

脳頭蓋の諸径は中程度で、乳様突起は小さく、外後頭隆起の発達はあまり良いものではない。縫合は、三主縫合とも内板では癒合閉鎖しており、外板においては冠状縫合は開離しているが、矢状縫合の大部分とラムダ縫合の一部には癒合が認められる。

頭蓋最大長は184㎜、頭蓋最大幅は135㎜、バジオン、ブレグマ高は133㎜で、頭蓋長幅示数は73.37、頭蓋長高示数は72.28、頭蓋幅高示数は98.52となり、頭型はdolich-, ortho-, akrokran（長・中・尖頭）に属している。

また頭蓋水平周は512㎜、横弧長は297㎜、正中矢状弧長は373㎜である。

2. 顔面頭蓋

眉上弓から眉間へかけての隆起は強く、鼻骨もやや隆起しているので、鼻根部はやや陥凹している。また鼻根部は狭い。

右の頬骨弓を欠損しているので、頬骨弓幅を計測することはできないが、左は完全に